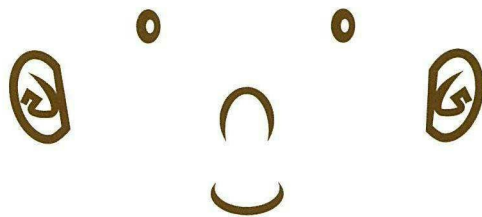


平成21年度事業報告

平成19年度 文部科学省
「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に採択
～地域活性化への貢献(広域型)～

地域の国際化を推進する 参加型実践教育

「国際交流インストラクター」の養育・派遣による
小中学校・高校の国際理解教育推進プログラムの展開



新潟国際情報大学プロデュース

IUIP

国際交流インストラクター



新潟国際情報大学
Niigata University of International and Information Studies

平成21年度活動風景

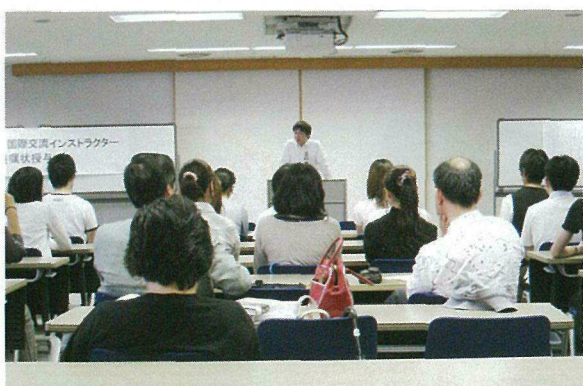
国際交流インストラクター演習2

国際交流インストラクターの養成を大学の正規の授業科目のなかで実施しました。



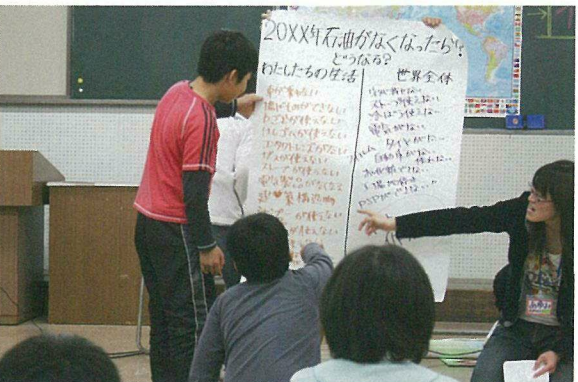
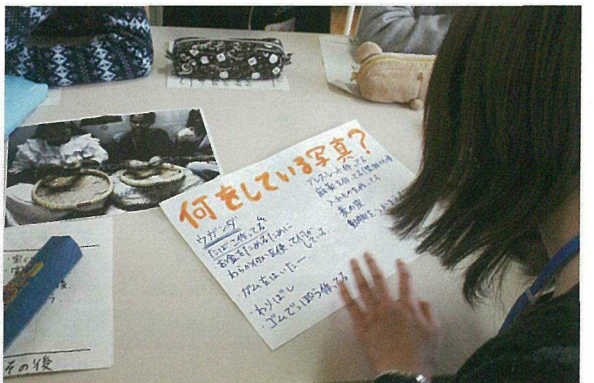
委嘱状授与式(平成21年8月10日)

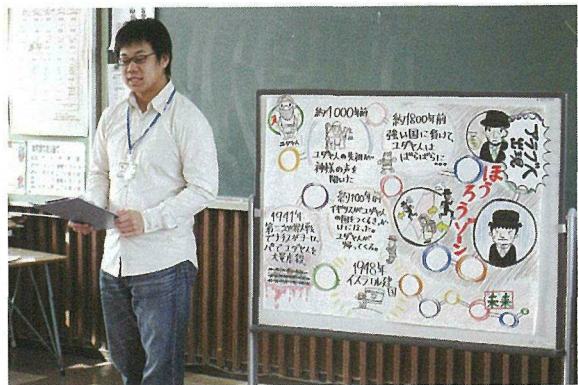
(財)新潟県国際交流協会より、「国際交流インストラクター」として正式に認証されました。



派遣先学校での国際理解講座

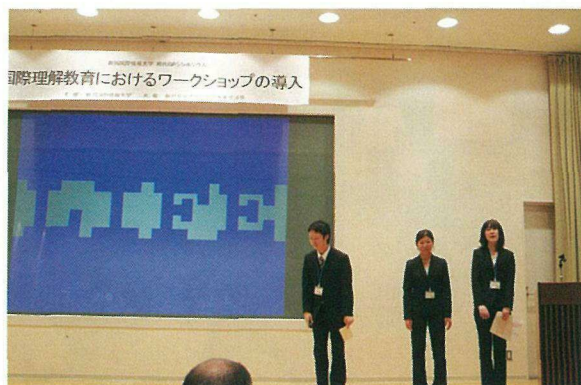
派遣依頼のあった県内の小中学校・高校において、国際交流インストラクターの学生が、ワークショップ方式で国際理解講座を実施しました。





現代GPシンポジウム(平成21年11月14日)

派遣依頼のあった県内の小中学校・高校において、国際交流インストラクターの学生が、ワークショップ方式で国際理解講座を実施しました。





特別合宿研修(平成21年12月26～27日)

本学とともに国際交流インストラクター事業を実施している敬和学園大学、新潟県立大学の学生とともに合宿研修を行い、成果と課題について意見交換しました。



平成21年度事業報告書

目次

ごあいさつ	11
平成21年度の活動スケジュール	12
平成21年度の活動報告	14
国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題	16
先生方の声	16
児童・生徒アンケート	18
学生の声——平成21年度の活動を振り返って	20
国際理解講座のプログラム——平成21年度の「進行シート」から	24
実施後の自己反省——平成21年度の「評価シート」から	56
現代GPシンポジウム「国際理解教育におけるワークショップの導入」の記録	63
プログラム	64
開会の挨拶——新潟国際情報大学 情報文化学部長 槻木公一	65
基調講演「新潟に求められる国際理解とは何か」 長岡市国際交流センター 羽賀友信 センター長	66
国際理解教育プログラムの紹介——国際交流インストラクターの新潟国際情報大生	70
講評——上越教育大学大学院学校教育研究科 釜田聡 教授	78
パネルディスカッション「国際交流インストラクターによる国際理解教育の成果」	86
今後の国際交流インストラクター事業について——(財)新潟県国際交流協会 土田純一 事務局長	100
閉会の挨拶——新潟国際情報大学 学長 平山征夫	102
参考資料	104

ごあいさつ



本学は、国際化・情報化という現代の重要な2つの時代潮流に対応できる人材育成を目指して、平成6年に設立されました。特にペレストロイカ以降、北東アジア諸国との交流の拠点化を目指す新潟では、こうした国際化へ対応出来る人材の育成は喫緊のニーズとなっています。

こうした状況下、文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)の補助事業として実施した「国際交流インストラクター事業」は、大きな成果をあげ、国際理解力のある人材育成に多大な効果を挙げました。小中高生にインストラクターとして国際理解教育を行うことは、それほど容易なことではありません。説明内容の検討、教材の作成、話す訓練など苦労も多かったようですが、自らの苦労が報われた時の喜びと同時に、自発的に学ぶことの楽しさを感じ、学生たちは目を輝かし、時間も忘れて準備に取り組んでいました。

ここに事業実施状況を報告いたしますとともに、この事業の大いなる意義についても併せて報告いたします。

新潟国際情報大学 学長
平山 征夫



本取組は、2005年度より開始された新潟国際情報大学と(財)新潟県国際交流協会との共同プロジェクトに端を発し、2007年度より、文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(以下「現代GP」)」に選定され、以後今年度までの約3年間にわたり活動を継続・発展させてきました。現代GPにおいては、事業内容を本学のカリキュラムに組み込み、さらには予算規模の大幅な拡大を背景にして、新たに3名の専任スタッフ(研究推進員、プロジェクト・アシスタント(2008年度よりプロジェクト推進委員)、事務補佐員)を迎え入れ、事業の拡大と活性化を実現しました。本年度は、現代GP事業としては最終年度にあたります。

この3年間でこれまで誕生した「国際交流インストラクター」数はのべ約230名、さらにその学生たちによる国際理解ワークショップに参加した県内の児童生徒の数はのべ約5,100名にのぼります。さらに、これらインストラクターの学生や受講した児童・生徒のみならず、本事業に直接・間接に関わった教育・行政・各種専門家を合わせると、その「広がり」は当初の予想をはるかにこえたものとなりました。

また、こういった事業規模の拡大のみならず、本取組はその「質」においても、顕著な進歩が見られました。「国際交流インストラクター」を養成する過程で、多数の招聘講師による研修、ワークショップの教材や資料の蓄積、大学や学年を横断した学生間の相互研鑽の習慣化、派遣先である小中高校からのアンケートや評価会議における評価のフィードバックなどによって、年を追うごとに事業の内容が深まり、ワークショップの質の改善もたらされました。このような成果は、現代GPシンポジウム「国際理解教育におけるワークショップの導入——国際交流インストラクター事業の成果と課題」(2009年11月14日開催)でも詳細に紹介されています。

本取組がこのような成果を生み出した過程を振り返ってみると、一つの重要な背景がうかがえます。本事業の起点は、終始一貫して、小中高校の児童・生徒たちの真剣なまなざしと笑顔でした。派遣されるインストラクターの大学生たちは、まさにその児童・生徒たちに必死に「応答」しようとし、夜遅くまで準備に明け暮れました。そして、本学の専任スタッフや担当教員たちもまた、その懸命に努力する学生たちの情熱に触発され、それに「応答」しようとして努力しました。つまり、上から下への教育ではなく、いわば「下から上への教育」こそが、本事業に一貫していた気風であったと言えます。

またさらに、こういった下からの教育的要請を、地域の理解と協力が大きく支えました。新潟県国際交流協会をはじめとし、各小中高の受け入れ校、新潟県内の教育委員会、地元の国際協力団体や各種NGO、さらには本事業の趣旨を理解し、共に事業を推進してきた敬和学園大学や新潟県立大学などの支援抜きに、「広域事業」としての本取組の成長を語ることはできません。特に、カリキュラムや行事予定、立地条件の相違などさまざまな困難を克服し、学校をこえて相互に実りのある交流ができた背景には、受け入れ担当校教員の献身的なご尽力がありました。ここで、一人一人のお名前を挙げることはできませんが、これまでご協力いただいた学内外、地域のあらゆる方々に、この場を借りて心から御礼を申し上げたいと思います。

もちろん、本取組は未だ「発展途上」であります。本報告書を何卒ご覧いただき、ご質問、ご要望などをどんどんお寄せください。皆さまよりいただいたご意見を糧に、今後もさらに新たな課題に取り組み、学生ともども事業を発展・成長させて行ければと願っています。

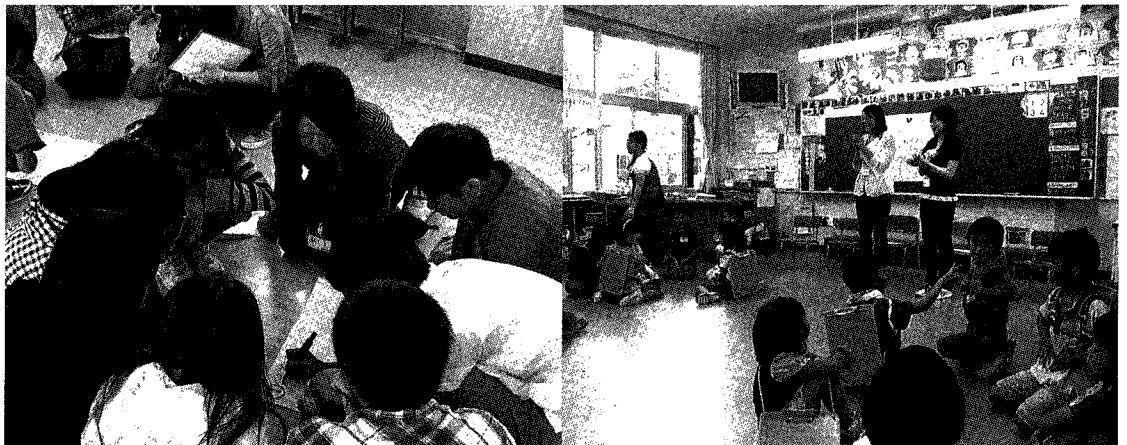
事業推進責任者
新潟国際情報大学 情報文化学部 教授
佐々木 寛

活動スケジュール

平成21年度事業報告

日	活動内容	会場
4月17日	「国際交流インストラクター演習2」開講	新潟国際情報大学
24日	研修「グローバル化の波に翻弄されるカンボジア社会」 講師: 島村昌浩様(日本国際ボランティアセンター)	新潟国際情報大学
5月1日	「アフガニスタン、イラク、パレスチナにおける戦争の現実と私たち」 講師: 谷山博史様(日本国際ボランティアセンター代表理事)	新潟国際情報大学
8日	講義「日本の常識・世界の非常識」 講師: 羽賀友信様(長岡市国際交流センター長)	新潟国際情報大学
16日・17日	講義「からだごとことばのレッスン」 講師: 竹内敏晴様(演出家、竹内演劇研究所主宰)	赤塚地区公民館
6月12日	講義「ソバルから考える環境問題」 講師: 石森大知様(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニアフェロー)	新潟国際情報大学
7月31日	国際交流インストラクター演習2試験	新潟国際情報大学
8月9日	オープンキャンパスでのワークショップ実演	新潟国際情報大学
10日	平成21年度 国際交流インストラクター委嘱状授与式 研修講演: 鈴木諭様(青年海外協力協会)	新潟国際情報大学
9月4日	ワークショップ「うたがって気づく自分の“世界”」	加茂市立須田小学校
11日	ワークショップ「学校へ行けないってどういうこと?!」	新潟市立亀田東小学校
14日	ワークショップ「甘くて苦いチョコレートの真実」	新潟市立黒埼南小学校
15日	ワークショップ「あ、エビフライ食べたい、 「人口ドカン!定員オーバーなんですけど」、「Hello! Good bye work」	新潟市立西内野小学校
16日	ワークショップ「世界をみ茶おう!しっ茶おう!」	新潟市立二葉中学校
16日	ワークショップ「パレスチナ・ナウ」	佐渡市立羽茂中学校
17日	ワークショップ「うたがって気づく自分の“世界”」、 「世界をみ茶おう!しっ茶おう!」、「石油と私たち」	燕市立吉田南小学校
18日	ワークショップ「あ、エビフライ食べたい」、「砂嵐がやって来た」	新発田市立東豊小学校
28日	ワークショップ「あなたが今、欲しいものは何ですか?」	胎内市立鼓岡小学校
29日	ワークショップ「日本人って変?!外国人って変?!」	燕市立吉田南小学校
30日	ワークショップ「あなたが今、欲しいものは何ですか?」	柏崎市立大洲小学校
30日	ワークショップ「人口ドカン!定員オーバーなんですけど」、「Hello! Good bye work」	新潟市立根岸小学校
10月22日	ワークショップ「石油と私たち」、「甘くて苦いチョコレートの真実」	西川地区公民館
11月1日	ワークショップ「砂嵐がやって来た」	新潟県立新潟工業高等学校
3日	ワークショップ「世界をみ茶おう!しっ茶おう!」	ラボ国際交流センター新潟地域会
14日	現代GPシンポジウム「国際理解教育におけるワークショップの導入 ——国際交流インストラクター事業の成果と課題」	クロスパルにいがた・映像ホール
12月4日	ワークショップ「パレスチナ・ナウ」、「学校へ行けないってどういうこと?!」、 「ファーストフードから見える異文化」	新潟県立新潟翠江高等学校
26~27日	特別合宿研修 黒田俊郎教授(新潟県立大学)による講評	新潟県阿賀町

期 日	活動内容	場 所
1月15日	ワークショップ「甘くて苦いチョコレートの真実」	新潟市立万代高等学校
15日	ワークショップ「石油と私たち」、「うたがって気づく自分の“世界”」、「世界をみ茶おう!しっ茶おう!」	新潟県立新潟翠江高等学校
2月1日	ワークショップ「石油と私たち」、「パレスチナ・ナウ」	村上市立山辺里小学校
2日	ワークショップ「学校へ行けないってどういうこと?」	見附市立新潟小学校
3日	ワークショップ「あ、エビフライ食べたい」	三条市立中央小学校
4日	ワークショップ「世界をみ茶おう!しっ茶おう!」、「ファーストフードから見える異文化」、「Hello! Good bye work」	燕市立吉田南小学校
5日	ワークショップ「あ、エビフライ食べたい」	三条市立中央小学校
8日	ワークショップ「砂嵐がやってきた」、「人口ドカン!定員オーバーなんですけど」、「みんな違ってみんないい」	新発田市立東豊小学校
12日	ワークショップ「世界をみ茶おう!しっ茶おう!」、「ファーストフードから見える異文化」、「うたがって気づく自分の“世界”」	新発田市立東豊小学校
12日	ワークショップ「甘くて苦いチョコレートの真実」	胎内市立築地小学校
15日	ワークショップ「甘くて苦いチョコレートの真実」	新潟県立村松高等学校
16日	ワークショップ「石油と私たち」	十日町市立中条小学校
19日	ワークショップ「ファーストフードから見える異文化」、「みんな違ってみんないい」	新潟市立巻南小学校
3月2日	ワークショップ「今あなたがほしいモノは??」	新潟県立三条高等学校



平成21年度活動報告

平成21年度事業報告

●講義「国際交流インストラクター演習2」開講

4月に、46名の学生を迎えて、国際交流インストラクターを養成する授業科目「国際交流インストラクター演習2」が開講されました。手探り同然で実施した昨年度の国際交流インストラクター演習1の経験をふまえて、今年度は次の2点に留意して演習を実施しました。

第1に、グループ分けに際して経験者が複数名配属されるようにしました。昨年度は、課題レポートの内容に沿って学生を半ば機械的にグループ分けしましたが、その結果、経験者が多数のグループができた一方で、経験者が1名で、ほとんど初心者中心のグループも生ずることになりました。そこで今年度は、各グループに経験者が複数名配属されるように調整した上で、初心者の割り当てを行うことによって、グループごとのばらつきを最少化するように工夫しました。

第2に、専任アドバイザー制度を導入しました。これは、これまで以上に学生に対するきめ細かな指導体制を確立するために、各グループの指導を担当する教員をアドバイザーとして割り当てるものです。

幸いにもこうした工夫が奏功して、今年度は昨年度よりも演習がスムーズに進行することができたと考えます。

●今年度の国際理解講座のテーマ

新潟国際情報大学では、次の7つのテーマに沿ってグループが結成されました。

「うたがって気づく自分の“世界” ～価値観は十人十色!!～」

「パレスチナ・ナウ～サッカーボールに込められた思い～」

「石油と私たち～資源と環境の行く末は～」

「世界をみ茶(ちゃ)おう!しつ茶(ちゃ)おう!」

「ファーストフードからみえる異文化～ハンバーガーサプライズ～」

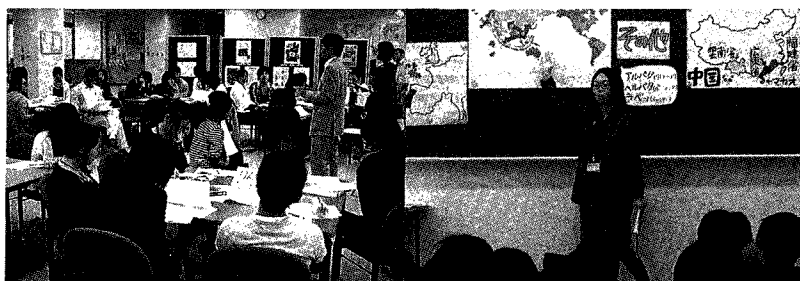
「学校に行けないってどういうこと?!」

「甘くて苦いチョコレートの真実」

なお、本報告書には、これらのグループの「進行シート」(指導案)を掲載しました(24～55ページ)。

敬和学園大学では、「砂嵐がやって来た」、「人口ドカン!定員オーバーなんですけど」、「あ、エビフライ食べたい」、「Hello! Good bye work」が実施されました。

そして、県立新潟女子短期大学では「今、あなたがほしいモノは???」が、新潟県立大学では「日本人って変?」がそれぞれ実施されました。



●国際交流インストラクターとしての認証

8月10日に、(財)新潟県国際交流協会より、合計86名が「国際交流インストラクター」の委嘱状を授与されました。内訳は、本学44名、敬和学園大学27名、新潟県立大学・県立新潟女子短期大学15名、です。

なお、委嘱状授与式のあとは、JICA地球ひろば新潟デスクのご厚意により、鈴木諭様(青年海外協力協会)による研修講演が実施されました。

●小中学校・高校への派遣

今年度は、派遣先学校数も派遣回数も、昨年度の実績とほぼ同等でしたが、昨年度に引き続いて高等学校への派遣が増加傾向にある点が注目されます。また、国際理解講座終了後の児童・生徒アンケートによれば、小学生がおおむね高評価であるのと比較して、高校生による評価が低調であることは否定できません(本報告書、18～19ページ)。したがって、高校生レベルに一層マッチしたワークショップを構築していくことが、今後の課題となります。

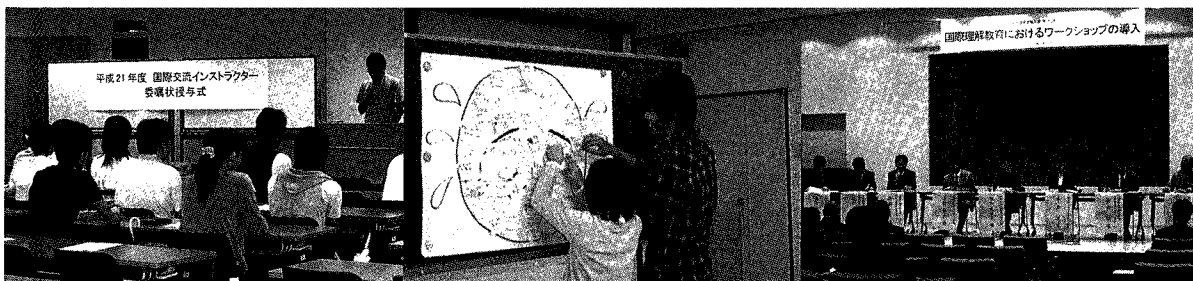
なお、本報告書には、派遣先学校での国際理解講座の実施後に国際交流インストラクターの学生が活動をふり返った「評価シート」を掲載しました(本報告書、56～62ページ)。インストラクターの学生も自分たちの活動をふり返り、より良いワークショップを実施するべく常に努力を重ねています。

●現代GPシンポジウムの開催

11月14日にクロスパル新潟にて、新潟国際情報大学主催、新潟県国際理解教育推進協議会共催で、現代GPシンポジウム「国際理解教育におけるワークショップの導入——国際交流インストラクター事業の成果と課題」を開催しました。これは、国際交流インストラクター事業のこれまでの成果を公開し、参加者から多くのご意見、批判、助言を頂くことによって、本事業の一層の充実を図ることを目的としたものです。詳細につきましては、本報告書、63～103ページをご覧ください。

本シンポジウムには、教育、行政、マスコミ、国際交流団体など多くの関係者と本学の学生インストラクターや卒業生多数が参加し、また、質疑応答ではフロアからも活発な助言がなされました。本シンポジウムにご協力下さいました関係者の皆様に、この場を借りて、あらためてお礼申し上げます。

現代GPとしての補助は本年3月で終了しますが、国際交流インストラクター事業は、このシンポジウムで明らかになった課題に取り組み、来年度以降も地域と連携した活動を展開していく予定です。今後とも一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

平成21年度事業報告

先生方の声 (平成21年9～12月実施分より抜粋)

(1)ワークショップのテーマ・内容等について

- テーマに沿った内容であった。もっとも分かりやすい資料をポンクイズ式に出して行ってもよい。
- 難しい内容だったが、1年生でも考えやすかった。
- 子どもたちが興味を引くテーマで、内容もわかりやすく構成されていた。
- 中学生にとって難しいことが多いと思う。パレスチナ以外をとりあげて暴力の連鎖について考えるワークショップを創ってみるのも興味深いと思う。
- 異文化理解の内容としては、「違いがある。でも元は一つのもの」ということだけでは浅いようだ。違いがあるが、その上で国際交流を進める上でどんな態度・姿勢で臨めばよいかまで考えさせられると中学生としてはありがたい。
- 学校側の希望を入れてもらってよかった。エビは子どもにとって身近でよかった。
- 国際理解という視点だけでなく、相手を理解することの大切さや、思いやりをもつことの大切さにつなげていただきよかった。
- とても興味深い内容だった。ただ、2年生の子どもにとっては、もっとシンプルにストレートにテーマにせまらないと、プレゼントのあめや、ゲームで何問正解したかだけが印象に残ってしまいます。
- 学校の授業ではなかなか取り上げられないテーマ・内容で、大変よい経験でした。
- 人口問題という児童が全く知らないことを教えてもらい勉強になった。
- 環境問題と国際理解について考えるきっかけとなる良い内容でした。
- 国際政治の 이슈ー・高校生に身近な話題がバランスよく取り扱われていたと思う。
- テーマもわかりやすく、内容もわかりやすく工夫されていた。
- テーマがはっきりしていて、また絞っていたのでわかりやすかったです。
- テーマは、生活に結びつけられているものでよかった。
- 子どもたちが自ら選んだテーマではなく選択したテーマなので、自分たちの問題として考えるのは難しい。こんな子がいるのかという思いが残る感じ。
- 興味をそそってよかった。
- 「うたがって気づく…」は大変よかった。

(2)インストラクターの説明、ワークショップの進め方等について

- ゲーム、絵などで体を動かし、自然に打ちとけ、自己表現し易くしてよかった。
- 1年生にわかりやすく話してもらった。話を聞きながらワークシートに記入するということは実はすごく高度なことで、低学年でできるのはほんの一部。説明したことをクイズ形式で再度問うなどの方法も良いと思う。

- 難しい内容も補足説明があつてよかった。ゲームや劇があり楽しく学習できた。
- 体育館ということもあり、もう少し声を張っていただけると聞きやすい。各グループにファシリテーターがついており、生徒の活動を支援してよかった。
- 視覚で体験だと、one shotでもわかりやすい進め方だった。原稿を読み上げるシーンが多かったので、聞き辛い所もあった。
- 学生の皆さんのあたたかい雰囲気がとても好感的だった。
- ゲームや紙芝居、劇で難しい内容でもわかりやすく伝えてくれたと思う。
- ゲームや劇、紙芝居などで説明し、子ども達もよく理解できたようだった。
- 紙芝居では、もっと恥ずかしがらず話していただけると良かったと思います。
- 良。ただ、子供の感想で多かったのは、あめをもらったこと、目玉焼きに何をかけるか。この2点で、テーマについて触れていた子は、ほんの一部でした。
- イラスト、小道具などを用いて大変分かりやすく説明していただきました。子どもたちの思考の流れにも合っていて、だんだんと理解が深まりました。
- 最後のまとめにむけて、紙芝居やゲーム等で少しずつ体験しながら学習できてとてもよかった。
- 熱心に取り組んでいる姿勢に好感が持てた。
- 生徒を巻き込んで楽しく進めようとしていた。
- 楽しい雰囲気作りやスムーズな進め方は素晴らしいです。生徒のペースを見ながら進めたり、名前の呼び方への配慮もあればより良いかと思います。
- 子どもたちを飽きさせないよう、いろいろと工夫している様子があり、楽しかったが、目先のおもしろさにとらわれてしまう感じがした。
- 紙芝居、ゲームを取り入れ、子どもたちは楽しみながら学んでいた。
- 明るくてよかった。
- 分かりやすく、丁寧に進めてくださった。

(3)事前打合せ等について

- 進め方について詳しい資料があり、ありがたかった。
- 希望をうけ、子どもたちのために試行錯誤してもらった。メールで十分な打ち合わせができてよかった。
- 時間のない中、授業内容についてファックスをもらっていたので、流れが分かってよかった。
- ていねいに時間を割いて下さって助かった。事前に内容だけでなく、準備や質問事項もFAXで送ってもらいありがたかった。
- ワークショップの流れが分かり、子供たちへの指導もしやすかった。
- 職員の方と実際に授業を行ってくださる学生の方々が事前に来校し

てくださり、顔を合わせて打ち合わせができたので、大変ありがたかった。授業を行う教室を見ていただき、こちらで用意するもの、こちらで用意して下さるものもはっきりと分かり、当日に落ち度なくできた。

- 来校していただき、お電話でも何度も確認いただき、ありがとうございました。
- じっくり打ち合わせ等をやっていたいただき、良かった。
- 使用する教室、使う道具などの打ち合わせ、授業の流れの説明など、しっかりと事前に打ち合わせをしていただいたので、ありがたかったです。
- 事前に会場を見ていただき、直接話ができてよかった。
- 先日伺わせていただいていたため、例年より、よい準備ができたと思います(生徒側も)。
- 担当者がしっかりした企画構成に沿って、細かいところまで話ができ良かった。
- 各グループを統括する窓口の方がいられるとよかったです。
- 自主的に動いていただいたので、とても助かった。
- 最小限であったが、かえって助かった。

(4)その他

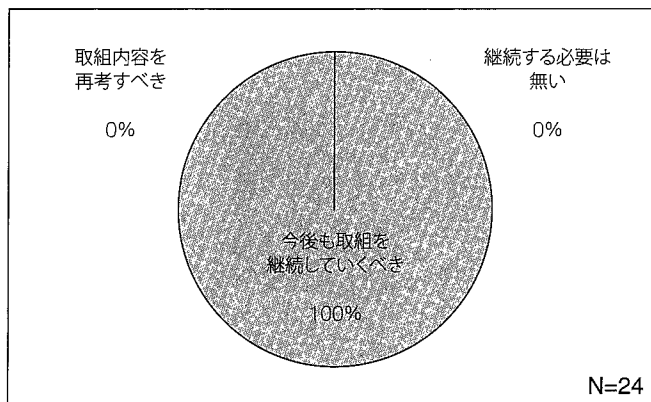
- 学生さんたちの目から見た世界を子どもたちだけでなく私自身も感じることができ、有意義だった。
- 大学生の熱心な姿が印象的でした。遠い佐渡まで来て下さり、生徒にとって充実した交流ができたと思います。また機会があれば、よろしくお願いします。
- 1回だけでなく、2回(1回目に宿題を与えられて、2回目にまとめetc)に渡る講座があってもいいなあと思った。
- クイズやゲーム、体験等を取り入れ、子ども達が興味を持って楽しく参加できた。
- 話し方や、子どもへの対応の仕方もすばらしく、すこくなっていた。
- 国際交流ということで、外国人の留学生を想定していた。日本人だということを案内に明記してほしい。
- 児童が大変興味を持って取り組んでいました。子どもたちにとって貴重な経験となりました。ありがとうございました。
- 5名のチームワークが良く、明るく元気いっぱい子ども達に接してくれた。とてもいい経験をさせてもらった。
- 言葉を何気なく使わず、「こんな言葉を使って伝わるのか」常に考えて、話したり説明したりすれば、より生徒とコミュニケーションがとれて、生徒の理解が深まり、生徒が自ら参加する気持ちが強くなると思います。

(5)今後の取組について、お考えを教えてください

- 小学校としては、とてもありがたく、参考になる取り組み。ぜひ続け

てほしい。

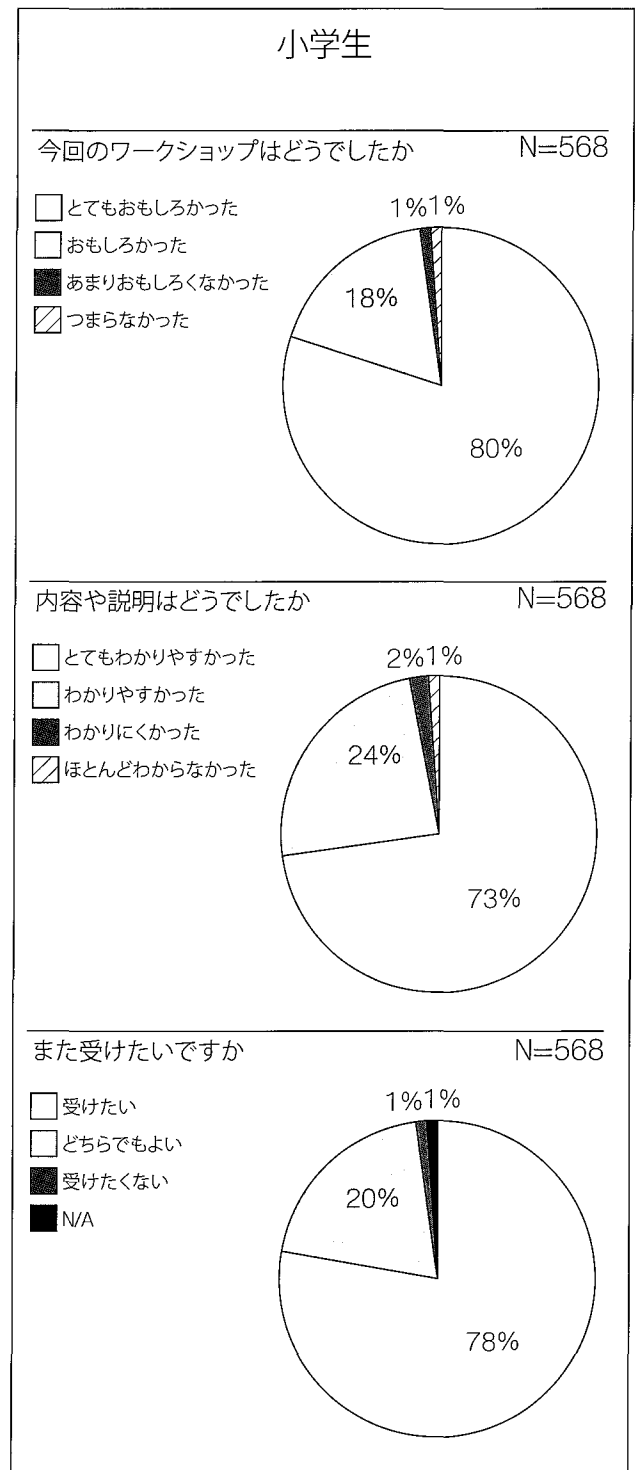
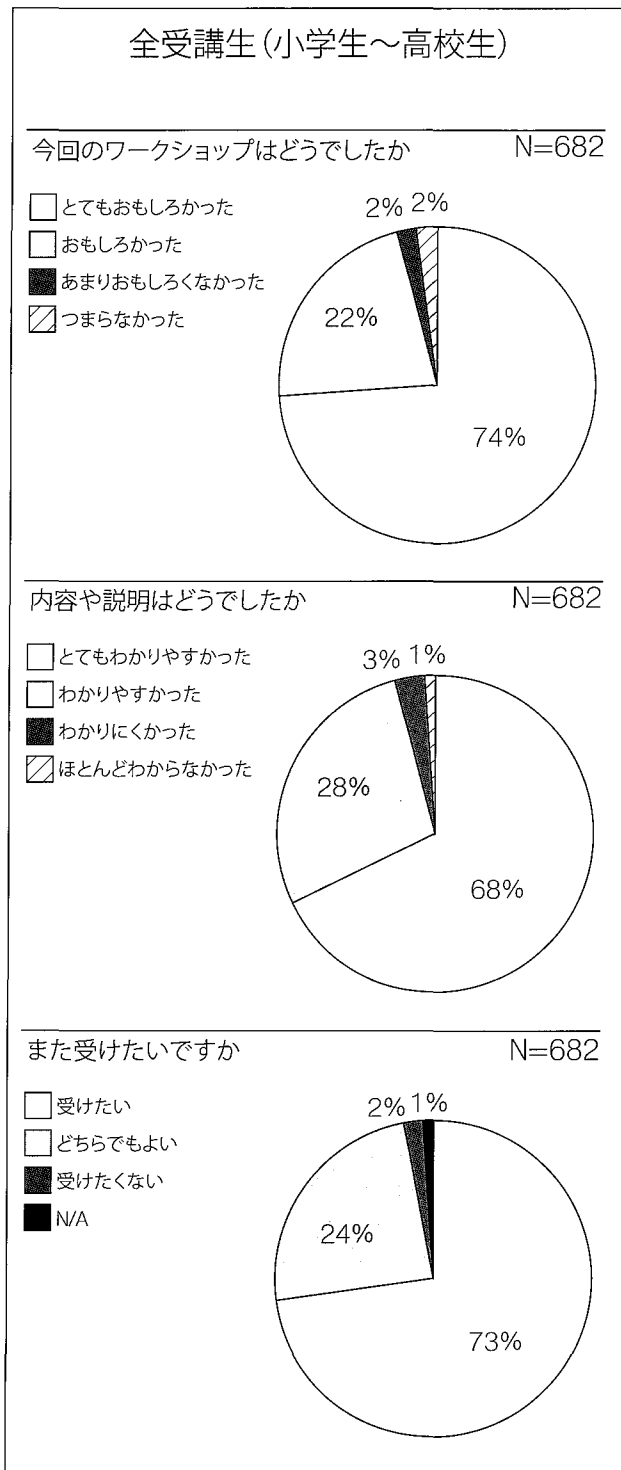
- 子どもたちにとって年代の近い大学生が直接関わってくれることは、キャリア教育にもつながると思う。
- 一つのテーマを丁寧に時間をかけて準備して下さったものをこちらは受け取るだけ。申し訳ないほど助かる。
- 敬和学園大学のみなさんのワークショップが大変すばらしいので、今後も継続してほしい。
- 学校では教科書以外の内容を扱うことが少なく、外国のことを学ぶ機会は少ない。勉強している人から具体的に学ぶことはとてもいい勉強になった。
- 児童の年に近い大学生に教えていただくことが、まず子ども達にとって新鮮である。また国際理解は本やネットで学習しても真実味がなく、実際に話を聞いたり交流したりすることで、気持ちが育つと考えるから。
- 子ども達にわかりやすく、国際理解について取り組め、楽しく勉強できました。
- 学校側にとっては、大変ありがたい取組です。ぜひ継続していただきたいです。
- 学生にとっても、児童にとっても、とても有意義な活動だと思う。
- ワークショップを受ける方にも、ワークショップをする方にも、相互の教育的効果があると思う。
- 限られた条件においても、相手の心をつかむコミュニケーション力を若者が身につけることは、社会に有効であるから。
- 高大連携は今後取り組むべきものだと思います。生徒にとっても、教員にとっても刺激となります。
- 高・大ともにコミュニケーションやプレゼンテーションのスキル向上に役立つと考えます。普段触れ合わない者同士の交流は大変刺激になります(教員も)。
- その都度の実践を分析し、次の実践へと生かしてください。



国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

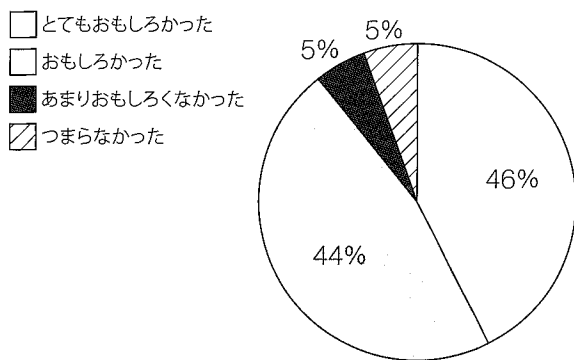
平成21年度事業報告

児童・生徒の声 (平成21年9月～12月の派遣先学校アンケートより集計)

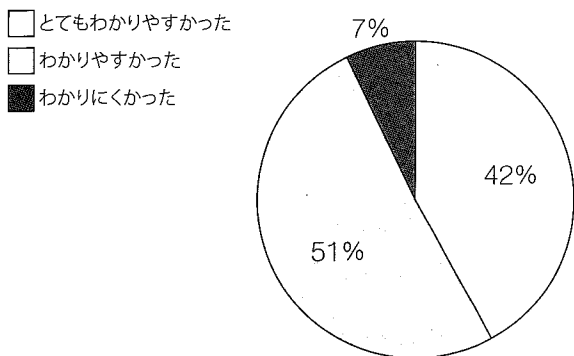


中学生

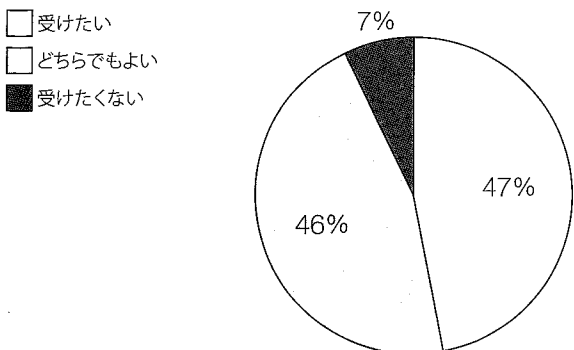
今回のワークショップはどうでしたか N=59



内容や説明はどうでしたか N=59

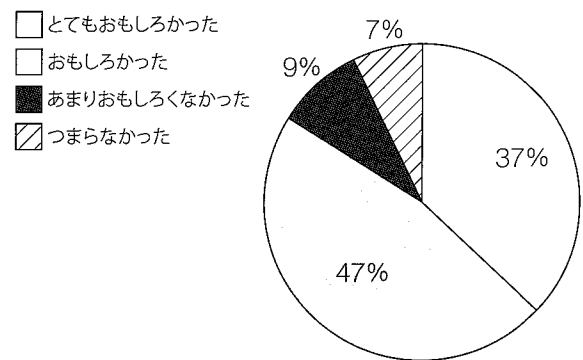


また受けたいですか N=59

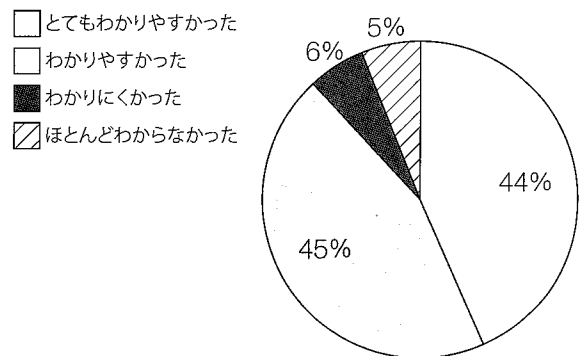


高校生

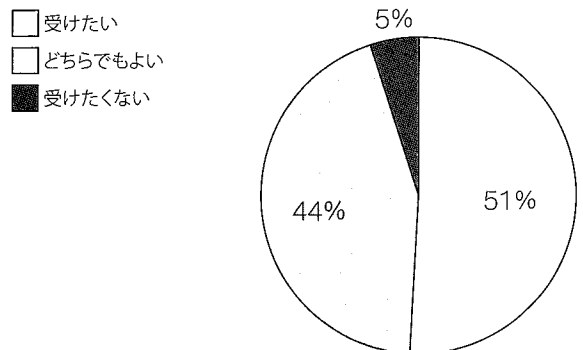
今回のワークショップはどうでしたか N=55



内容や説明はどうでしたか N=55



また受けたいですか N=55



国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

平成21年度事業報告

学生の声——平成21年度の活動を振り返って

新潟国際情報大学

「うたがって気づく自分の“世界”—価値観は十人十色!!」

私たちのグループでは「うたがって気付く自分の世界」という題目で1年間ワークショップを行ってきました。普段何気なく接しているテレビや新聞、ラジオといったメディアから私たちは情報を得ており、またそのようなメディアの情報が私たちの価値観の形成に大きな影響を与えます。本ワークショップではまず自分の価値観だけがすべてではなく、一人ひとりが多様な価値観を持っていると確認したうえで、メディアは物事の多角的な面のうちほんの一部しか映しておらず、それらの情報を疑ってみることの大切さに参加者が気付いてもらうことを目的としています。具体的にはツバルの報道やマリ共和国のある儀式の写真等、様々な題材を使ってワークショップを進めていきます。

「疑うこと」を教えるというのはかなり困難なことですし、本来「疑うこと」は自発的な行為であるにもかかわらず、ワークショップの進行のなかで誘導的にならざるを得なくなるところがあるなど問題点は多くありました。来年度は、参加者に対していかに身近な例を多く挙げることが出来るか、また主題に気付いてもらうため参加者自身が考えられる時間をいかにして設けるか、ということが大きな課題となりそうです。

私個人としては初めてファシリテーターを行ったのですが、ワークショップを楽しむことができたのが何よりの成果だったと思います。緊張はもちろんありましたが、参加者から力をもらうことが多く、また私自身が参加者から教えてもらうことの方が多かったと感じます。共に学び合うこの気持ちを忘れずに来年も頑張りたいと思います。(山田啓介)

「パレスチナ・ナウ——サッカーボールに込められた思い」

私たちのグループはパレスチナ・イスラエル問題についてのワークショップを行いました。このワークショップを行ったことによって、人に何かを伝えることの難しさを知りました。

最初、私たちのグループは一番伝えたいことが明確にならないまま準備が進み、その結果、話し合いをする度に言いたいことが変わるような状況になってしまいました。なので、ワークショップを作っていくにはぶれない大きな目標を早い段階で決める必要があると思いました。

当たり前のことですが、人に物事を伝えるためには、自分が何を言いたいのか自分自身で確認することが大切だと思いました。

今後は、今年の反省を踏まえて、ワークショップを作っていくと思います。(鷺津貴士)

「石油と私たち——資源と環境の行く末は」

私自身は今年度から国際交流インストラクターとして活動しました。私がワークショップを作っていく上で目標にしていたのが、「自分たちがやっていて楽しいワークショップ」でした。そのために必要だと考えた点が2点あります。

1点目は、「自分も参加者も動くワークショップ」です。私はみんなでわいわい騒いでる時間が好きなので、それをワークショップにも活かしたいと考えました。なので、ワークショップにはクイズを取り入れたり、短い劇をいくつかやってみたりしました。

2点目は、「参加者に新たな発見を与えるワークショップ」です。自分が知らなかった情報を他の人知ってもらえると嬉しい気分になるので、ただ「石油が無くなってしまいます。大事に使いましょう!!」だけでなく、「石油がなくなったら世界はどうなるのか?」を参加者に知ってもらえた上で、今後のことを考えてほしいと考えました。

以上の2点に気をつけながら、「自分たちがやっていて楽しいワークショップ」を目標に頑張ってきました。しかし、まだまだ楽しめる工夫は出来ると思います。来年度は更にWSを楽しんでいきたいです。(市川真也)

「世界をみ茶おう!知っ茶おう!」

私たちのグループでは、日常的に飲んでる「お茶」から、世界や文化のつながりを考えるということを意識してワークショップを作ってきました。ほかの国でのお茶の飲み方を説明したり、実際にお茶を飲んでもらったりと、子どもたちも私たちも楽しんで参加できるような心がけました。

長くても90分という短い時間の中で伝えたいことをすべて伝えるのは難しく、何倍もの時間をかけて話し合い、準備をしても、1回のワークショップが終わると反省することはたくさん出てきます。ファシリテーターとしての能力はまだまだ低く、説明の時の言葉の選び方や、どうすれば子どもたちに考えてもらえる内容になるかなど悩むことは多々ありました。しかし、グループで助け合いながらのワークショップは成功していると思っています。

今年は小学校、中学校、高校と様々な学年を対象としたワークショップを経験し、また学校以外でのワークショップもやりました。この経験を今後につなげ、さらにいい内容のワークショップを作りたいと思います。(佐藤祐子)

「ファストフードからみえる異文化—ハンバーガーサプライズ」

私たちは、ハンバーガーを通じた異文化理解のワークショップを行いました。内容は、ハンバーガーにまつわるクイズから、世界の珍しいハンバーガーの紹介、そして、夏休みに実際に韓国、フィリピン、タイのハンバーガーショップに行き、その時の写真を交えながら各国の特徴を紹介していきます。ここでは、世界各国の風土や文化によって、ハンバーガーショップの味やサービス、価値観が違ふことを知ります。また、実際に現地での体験談を盛り込むことで、児童・生徒が世界をより身近に感じ、興味や関心を引くように工夫しました。そしてさらに、宗教問題を取り上げ、インドで実際に起こったハンバーガーにまつわる事件を通して、異文化理解の難しさや大切さについて考えていきます。このように、各国の食の違いを取り上げるだけでなく、宗教問題に焦点をあて、異文化理解の大切さだけでなく、難しさについて考え、そしてそれらを踏まえ、自分は世界とどう関わっていくかを考えることができます。

このワークショップの成果は、実体験や画像を生かし、児童・生徒が「海外に行ってみよう!」、「文化の違いっておもしろい!」、と自ずと感じてくれたことです。最後に、2月の派遣へ向けて、細かい打ち合わせを行い、本番ではどんな状況にも対応できるように練習や修正をすることが課題です。このワークショップを通して、世界を知る楽しさを感じてもらえたらと思っています。(本田加南子)

「学校に行けないってどういうこと?!」

私は今年でインストラクター 2年目でした。そして、昨年と同じく「学校へ行けないってどういうこと?!」というテーマで取り組んできました。同じテーマだったため、さらに深く追求したワークショップを作り上げることを目標とし、グループの皆と案を出し合いました。しかし、凝り固まった頭からは昨年と似たような案ばかりが出て来てしまい、新たなものを考えつくるのにとても苦労しました。けれどもメンバー一人ひとりが案を出し、深く話し合えたことで、新たな視点からのワークショップを作りあげることが出来ました。派遣では元氣溢れる子ども達に圧倒され、計画通り進まない点もありましたが、臨機応変に対応することも出来ました。

改善すべき点では、準備に時間をかけすぎて、リハーサルを十分に行うことが出来なかったことです。スムーズに進行することが出来ないこともそうですが、本番で私達があたふたしてしまったり、子どもたちも不安になってしまいます。もっと余裕を持って準備をし、本番に挑まなければならないと思いました。そうすることで、心にも余裕が生まれ、より楽しくワークショップを行うことが出来ると思います。(押木絵里)

「甘くて苦いチョコレートの真実」

私は「甘くて苦いチョコレートの真実」というテーマでワークショップを作りました。このワークショップの目的は、身近なチョコレートを通じて、その裏側にある現実を知り安易に「安いから買う」のではなく、「なぜ安いのか?」と参加者に考えるきっかけを与えることです。そして、目標は、①みんな楽しい、②参加型、③体験できる、ワークショップを作ることです。

対象者は小学生ということで、90分という長い時間をいかに楽しんで参加してもらえるかを考えました。そこで、カカオの重さ体験や劇にクイズと、さまざまな動きを取り入れました。また、児童労働の子供たちの映像や話に入ると、にぎやかだった教室がシーンと静まり、真剣な眼差しで私たちの話に耳を傾けてくれる子供たちに、感動しました。

来年は私たちにとって、初めて高校生を対象にワークショップを行うので、今まで以上に濃い内容にしたいと計画中です。新潟にあるフェアトレードショップ紹介や、参加者にフェアトレードチョコレートを味わってもらおうと思っています。今から高校生の反応がとても楽しみです。前回の課題点を克服し、さらに進化したワークショップに期待してください。(冨永由賀)

国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

平成21年度事業報告

学生の声——平成21年度の活動を振り返って

敬和学園大学

「砂嵐がやって来た!」

敬和学園大学が国際交流インストラクターに参加して3年が経ちました。私がこの企画に参加したきっかけは先生の紹介でした。当初はワークショップという言葉さえも初めてで、右も左も分からないスタートでした。今思えば、私にとってインストラクターの経験は大学生活そのものでした。本校で初めての取り組みということで1年目は先生方から声のかかった学生たちで参加しました。「水と食」というテーマを基に学校給食から見える世界でワークショップを行いました。夏休みを利用しフィールドワークとして韓国の小学校への訪問も実現することができ、とても貴重な体験をすることができました。日本の子供たちは私が作った韓国の小学校のDVDを見ると、自分たちと同じ年の小学生に興味津々で目をキラキラさせながら画面に釘付けでした。その笑顔を見たときインストラクターをやった良かったなあと感じる瞬間でした。私たちが試行錯誤し、時間をかけたワークショップを楽しんでくれて、一緒に世界の問題に向き合ってくれ子供たちの考えや発想は、今後のワークショップの参考になるので、私たちも毎回勉強になることばかりでした。

私は4年生なので今年で最後の活動になりますが、悔いの残らないよう今まで準備してきたワークショップで、訪問先の子供たちと一緒に楽しい時間を送りたいと思います。

インストラクターの活動においてたくさんの先生方、グループのみなさんにお世話になりました。本当にありがとうございました。
(比企桃子)

「人口ドカン!定員オーバーなんですけど」

私たちのグループでは「人口爆発」という国際社会が抱える問題を理解してもらおうと同時に、国際社会そのものに関心を持ってもらうことを目標にして、「人口ドカン!」というワークショップを行いました。この目標を達成するために様々なゲームをワークショップに盛り込みました。例えば「ジャングル」という「フルーツバスケット」と同様のゲームにアレンジを加えて、発展途上国と先進国の人口比を小学生にわかりやすいように可視化したり、紙芝居を用いて「人口爆発」とはどのようなものなのか、また人口爆発はどのようなことが原因で起こってしまうのかを説明したり、「ゴミ拾いリレー」というゲームで発展途上国の子どもたちが行なっている労働の1つであるゴミ拾いの疑似体験をしたりしました。

計画を立てる段階では、私たちがワークショップを通して何を重点的に伝えたいのか、どうやって伝えるのかなど、様々な課題がありました。新潟国際情報大学での研修や、グループ内の打ち合わせ、他のグループとの練習会などを経て、徐々に課題を乗り越えていくことができ、グループ内でのチームワークやワークショップの技術などを高めることができました。

しかし、まだ課題はいくつか残っています。例えばワークショップにおけるインストラクターとしての積極性などが課題として挙げられます。残された課題を冬季の派遣では克服できるよう、打ち合わせや練習を重ねていき、万全を尽くしたいと思います。(押見和也)



県立新潟女子短期大学

「あなたが今1番ほしい物はなんですか？」

今年度、私たちのグループは、「あなたが今1番ほしい物はなんですか？」というテーマでワークショップを行って行きました。今、世界各地で数多くの支援活動が行われています。しかし、それは本当に相手の為になっているのか、疑問に思った私たちは、アフリカで行われたスニーカーと粉ミルクの2つの支援を例に挙げて、世界の現実を知り、本当の支援とは何なのかを、子どもたちと一緒に考えていきました。

実際に、今年はこれまで2校でワークショップを実施しましたが、参加してくれた子どもたちが熱心に話に耳を傾けて、真剣に意見を出し合い発表してくれる様子が、とても印象的でした。私たちは子どもたちに教えている半面、子どもたちに教えられる事も多かったように思います。

私たちのメンバーは全員今年卒業するため、後輩である新潟県立大学の皆さんに、今後の課題を伝えたいと思います。この活動はやりがいがある半面、とても大変な活動です。自分が相手に何を一番伝えたいのか、それをハッキリさせる事が一番大事だと私は感じました。自分が一番伝えたいことならば、内容も相手へのメッセージも自ずとついてくると思います。今後も新潟国際情報大学、敬和学園大学、新潟県立大学がさらに連携してこの活動が発展していくことを願っています。(竹内晴香)

新潟県立大学

県立大学は新設校ということもあり全員が初参加で、知識が何もないところから始まりました。何をテーマにするのか、どう情報を集めるのか、そもそもワークショップとは何なのか。本当に全てが手探り状態でした。

大きなテーマとして異文化理解を取り扱うことは早い段階で決定していました。ですが、子供たちに伝えたいことに関して、互いに食い違う意見持っていたり、文化に根付く抽象的な概念をうまく説明できなかつたりと、メンバー間で混乱することも少なくありませんでした。そこで経験者である県立新潟女子短期大学や新潟国際情報大学の先輩方、先生方にも意見を仰いで議論を重ねた結果、最終的には日本では見られないような他国の文化や風習を例として提示し、その根幹にある考え方を紹介することにより、世界にはさまざまな考え方が存在していることを知ってもらう、という構想にたどり着きました。さらに情報の選別や道具の準備・製作などの過程を経て、ようやく一つのワークショップを完成させることができました。

教える立場に立つことの難しさと楽しさを実感した点、また私自身が文化間の考え方の違いを理解できたという点で、非常に有意義な経験をすることができました。(佐藤葉奈)



国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

平成21年度事業報告

国際理解講座のプログラム——平成21年度の「進行シート」から

国際理解講座のプログラム——平成21年度の「進行シート」から

今年度、新潟国際情報大学の7グループが作成した国際理解講座の進行シート(教案)です。国際交流インストラクターによる国際理解講座は、この進行シートに記載された手順に沿って実施されます。なお、進行シートは、原則として派遣先学校のニーズに合わせて個別的に決定される性質のものであり、本報告書に掲載したものは一例であって、決定版ではないことを付記致します。

うたがって気づく自分の“世界”	25
パレスチナ・ナウ	29
石油と私たち	34
世界をみ茶おう!知っ茶おう!	39
ファーストフードから見える異文化	43
学校に行けないってどういうこと?!	47
甘くて辛いチョコレートの真実	51

ワークショップ進行シート

作成日： 2009年9月17日

テーマ： うたがって気づく自分の“世界”

ファシリテーター（グループ）： 情報チーム

1：本テーマの趣旨

本ワークショップを通じて、様々な提起された課題・情報に対し、参加者とファシリテーターが共に考え、自分とは異なる価値観が存在することをまずは確認する。また、自らの価値観形成のプロセスの一端について特にマスコミュニケーションにスポットを当てて、それらがいかに限定された情報の上に成り立っているのか感じてほしい。

2：本テーマの目的

一つの事柄にも様々な捉え方があり、自分の捉え方がすべてではない、と考えるきっかけのワークショップにする。

また、こうした物事の捉え方に影響を与えているものは何なのかということを考える。具体的にはテレビや写真を取り上げ、私たちは常にそのような媒体からは物事の全体ではなく一部分しか見ることができないという情報の限界性について論じる。

その上で、こうした限定された情報の上に作られた個々の価値観に対し疑いを持つ必要性を感じてもらう。

3：本テーマをとりあげる理由

情報を媒介するメディア媒体は極めて身近に存在するものであり、それらは時に限定された価値観を作り、様々な誤解を生んでいることを知らせたいため。

国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

平成21年度事業報告

国際理解講座のプログラム——平成21年度の「進行シート」から

4：活動過程 (使用時間： 90分 参加人数： 20~40人)

過程 (所要時間)	活動内容とそのねらい	ファシリテーターの支援活動(教材、発問、説明、指示)	使用する教材	生徒の予想される反応、その他、注意事項
自己紹介 (3分)	ファシリテーター全員の顔と名前を簡単に覚えてもらう。	名札シールを配っておき参加者の名前を書いてもらう。 全員めがねをしていてそれぞれが違う色にする。	名札シール メガネ	名札カードが全員にわたるように注意する。 生徒が机や椅子にぶつからないように注意する。
アイスブレイキング (15分)	チーム分け自己紹介 (5分) ジェスチャーゲーム (10分)	ファシリテーターの言った数字の数のチームを作ってもらい、挨拶と自己紹介、握手をする。 何度か行い、緊張をほぐしてもらう。 ファシリテーターの出すお題に合わせてジェスチャーをしてもらう。 個人の見方・感じ方の違いを見つつ緊張をほぐす。		
展開 (50分)	導入(25分) ブタハートの説明 写真連想ゲーム 写真を配る→想像して絵を書いてもらう →いじる→ネタバラシ メガネの説明	それぞれ各部分が切り取られた写真を配って、その写真の見えない部分を想像して描いてもらう。 ・メガネとは自分の経験や環境などの色が入っている		「人によって色ん

	展開 (25分) 伝言ゲーム	<p>自分独自の視点のこと。これを色メガネとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人はそれぞれメガネをかけている。 ・自分はメガネをかけていることを実感してほしい。 		<p>な見方ができるんだ！」</p> <p>「色メガネを通すと違う意見・考え方になるんだなあ」</p> <p>僕は色めがねをかけてるんだなあ」</p>
	ブタの勘違い	<p>N次情報。正解から遠ざかれば遠ざかるほど正解が変わる。そのため正解に近づくためには前に人に当たることが大事であることを感じてもらう。</p>		
	ツバル	<p>一部分しかものごとを見ていないことを紙芝居形式で見せる</p>		
	メガネの説明	<ul style="list-style-type: none"> ・メガネをかけるとなぜ悪いのか 		
まとめ (2分)	全体流れを振り返る。	<p>インストラクターは全員前へ。</p>		

5：会場のセッティング
(略)

6：使用する教材

- ・スクリーン
- ・プロジェクター
- ・ノートパソコン
- ・スピーカー

国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

平成21年度事業報告

国際理解講座のプログラム——平成21年度の「進行シート」から

- ・ 手作りメガネ
- ・ 世界地図
- ・ 磁石
- ・ マジックペン
- ・ 紙
- ・ 画像のプリントアウト

7: 参考文献

ツバル2003年取材レポート: <http://www.tuvalu-overview.tv/problem/tuvalu2003/index.html>

ゴミに埋まるツバル: <http://blog.livedoor.jp/fujij8776/archives/51047850.html>

読売年鑑2002: http://www.yomiuri.co.jp/nenkan/2002_01c.htm

Geoscience Australia: <http://www.ga.gov.au/geodesy/slm/spslcm/>

ツバル写真集: <http://ncc1701d.bufs.jz.jp/01/01.html>

8: その他

・ 情報の作り手と受け手という難しい題材ですが、今後、情報の与える影響が大きいのと思われるため、ワークショップを通して情報の受け手と作り手の知識のつけてもらいたいと思います。

ワークショップ進行シート

作成日：2009年 12月 4日

テーマ：パレスチナ・ナウ ～サッカーボールにこめられた願い～

ファシリテーター（グループ）：紛争チーム

1：本テーマの趣旨

暴力の連鎖ということについてどれだけ身近に感じ、また理解をしてもらえるかが本筋。ユダヤ人に対する迫害（暴力）とパレスチナ人に対する暴力、それらの暴力に終わりが見えないことが問題である。暴力以外の解決方法は無いのか。なぜ争わなければならなかったのか。ワークショップを通じて知識を身につけてもらう。

2：本テーマの目的

イスラエル・パレスチナ問題をテーマに、暴力の連鎖について、身近に感じ理解してもらう。ユダヤ人が歴史的に受けてきた迫害（暴力）と、彼らが現在のパレスチナ人に対して行っている暴力。この暴力の連鎖を断ち切る方法はないのか、ワークショップを通じて検証する。

3：本テーマをとりあげる理由

「暴力の連鎖」とは世界を取り巻く仕組みである。そのテーマを身近に感じてもらうことにより、世界に対する見方を変えることができるのではないかと思う。また、ニュースなどで流れる情報に自分なりの理解を示せるようになれば、そこから新しい発見があると思う。

国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

平成21年度事業報告

国際理解講座のプログラム——平成21年度の「進行シート」から

4：活動過程 (使用時間： 90分 参加人数： 15人)

過程 (所要時間)	活動内容とそのねらい	ファシリテーターの支援活動(教材、発問、説明、指示)	使用する教材	生徒の予想される反応、その他、注意事項
・チーム自己紹介 ・名札づくり(5分)	・ファシリテーターの名前を知ってもらう。 ・名札シールと、名札についている色でグループ分け ・グループ内で自己紹介	・好印象を与える挨拶を心がける。 ・スムーズに進行しているか確認する。	・名札シール ・ペン	・迅速に名前を書く
アイスブレーキング(8分)	「進化じゃんけんゲーム」 みんなで楽しくゲームをし、緊張をほぐす。	・参加者の様子に注意しつつ見回る。ファシリテーターもゲームに参加する。 ・進化過程(石→剣→銃→バズーカ) 同じ進化過程(石は石同士、銃は銃同士)の人とじゃんけんし、勝てば一つ上の過程に進化、負ければ一つ下の過程に退化し、それを繰り返してバズーカを目指す。		・黒板に進化過程を書いておく ・進化過程のジェスチャーやじゃんけんをしてくれなかった際に素早く対応する
導入I(35分)	・各チームごとに異なった道具を配る→イメージを書く ・イスラエルとパレスチナの基本情報3択クイズ	石、銃、サッカーボール、タクトについて。 ・教室のすみを3か所使ってクイズをする 「世界地図からイスラエル・パレスチナの場所を探す」	・石、モデルガン、サッカーボール、タクト ・紙 ・ペン ・世界地図 ・矢印マグネット ・エルサレムの写真	「武器」「音楽」「遊び」「スポーツ」など 答えだと思ふところに移動してもらう

<p>休憩 (4分)</p>	<p>・基本情報のまとめ ここまで基本情報を理解してから、その先に進んでもらうため</p> <p>歴史すごろく ・すごろくを用いて、その中でパズルや紙芝居をし、ユダヤ人の歴史を知る</p>	<p>「写真の場所の名前（エルサレム）を聞く」 「そこで戦っている人々が信じている宗教は？（ユダヤ教、キリスト教、イスラム教）」</p> <p>・全体で上記の内容を軽くおさらい ・各グループでもおさらい</p> <p>・1つのコマをみんなで進めていく 旧約聖書（約4000年前の話＝アブラハムが神からの啓示を受ける） →ローマ帝国に負けたユダヤ人は故郷を追われてちりちりになる。「ここから放浪と追害の生活が始まります」 →パズル×3（迫害されるユダヤ人、ユダヤ人の去ったパレスチナ地方に住み着くアラブ人） →1914年 第一次世界大戦 →第二次大戦時のホロコースト →1948年イスラエル建国</p>	<p>・各グループに復習シートを配る</p> <p>・すごろくグッズ ・紙芝居小道具 ・パズル</p>	<p>・カタカナの単語が多数出てくるため、生徒が混乱する可能性</p>
--------------------	--	--	---	-------------------------------------

国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

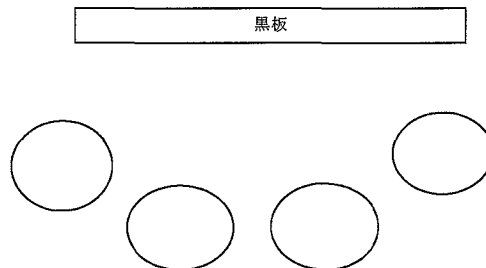
平成21年度事業報告

国際理解講座のプログラム——平成21年度の「進行シート」から

<p>導入2 (15分)</p>	<p>・イスラエル・パレスチナ問題の現状の説明</p> <p>・写真の中のパ人、イ人の気持ちを考える 彼らの立場に立って考え、身近に感じてもらうため</p> <p>・「暴力の連鎖」</p>	<p>・写真(戦車や銃など、武力による破壊活動、爆弾テロなどで現在起きていることを紹介 ・イスラエルの地図を使って領土の移り変わり(イが武力でパを追い出して領土を拡大している)を説明</p> <p>「彼らは一体どんな気持ちでいるのでしょうか。その人になりきって考えてみましょう」 「彼らはきっと、本当にそんな気持ちでいるのだと思います」</p> <p>「こうやってやられたらやり返すことを、『暴力の連鎖がある』といいます」 以上の現状から。また、ユダヤ人の迫害の経験と、今彼らがパ人に」やっていることも。</p>	<p>・写真</p> <p>・イ・パ領土移り変わり地図</p> <p>・ふきだし</p> <p>・ポストイット</p> <p>「暴力の連鎖」</p>	<p>「何やってるんだろう」「ひどい」</p> <p>「憎い」「嫌い」「あっちが悪い」「悲しい」「痛い」など</p> <p>すごろくに現状の写真(マス)をブラスする</p>
<p>展開 (5分)</p>	<p>・問題解決に向けて活動している人たちの紹介。</p>	<p>・ユダヤ人指揮者の活動 ・デモなどで呼びかける活動家 ・パレスチナのサッカーチーム</p>	<p>・写真</p>	

<p>まとめ (8分)</p>	<p>・導入2、活動する人 たちをふまえてすご ろくの続きの絵を考 えてもらう</p> <p>まとめる</p>	<p>「イ・パの未来はどうなる でしょう。あなたはどうな ってほしいですか？よくす るためには、私達や他の人 たちは何ができるだろう」 「こうやって考えてくれた ことがもう武器になるんで す!!!」</p>	<p>・マス形の紙 ・ペン</p>	<p>「話し合いする」 「武器で戦う」「停 戦」など</p> <p>すごろくに未来の マスをプラスする</p> <p>すごろく完成</p>
---------------------	---	---	-----------------------	---

5：会場のセッティング



6：使用する教材

名札シール、世界地図、マグネット、ストップウォッチ、矢印マグネット、イスラエル・パレスチナ説明用紙、紙芝居用小道具セット、イスラエル・パレスチナ写真（画像のプリントアウト）、用語マグネット、解決しようとしている人たちの写真（画像のプリントアウト）、ポストイット、ポストイット貼り付け用台紙、すごろく、武器の現物（石、銃、サッカーボール、タクト）

6：参考にした資料

まんが パレスチナ問題 2005、講談社現代新書
現地ルポ パレスチナの声、イスラエルの声 憎しみの“壁”は崩せるのか 2004年、岩波書店

7：その他

国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

平成21年度事業報告

国際理解講座のプログラム——平成21年度の「進行シート」から

ワークショップ進行シート

作成日： 2010 年 1 月 8 日

テーマ： 石油と私たち～資源と環境の行く末は～

ファシリテーター(グループ)： 環境チーム

1：本テーマの趣旨

三大エネルギー資源である石油、石炭、天然ガスのうち、石油は世の中のありとあらゆるモノに姿を変え、私たちにとってもっとも身近な存在であるということを認識する。

また、石油は有限資源であること、その大量消費による影響を踏まえ、「今私たちには何ができるのか。何をしなければならぬか。」を考えてもらうことを軸にWSを組み立てていく。

2：本テーマの目的

現在、石油は世界で大量に使用されている。当然のことながら、石油をこのまま使い続けていけば、いつかは無くなってしまふ。私たちの生活の中でモノを使用できることや手に入れられることは、決して当たり前なことではない。石油が無くなった私たちの生活はどうなってしまうのだろう。このようなことを通して、資源が私たちにとっていかに重要なものであるかを参加者に感じ取ってもらった上で、資源の大量消費を止めるための意識改革を促す。

3：本テーマをとりあげる理由

石油の大量消費という問題は深刻で、参加者にとっても身近な問題である。また、この問題は環境問題とも密接な関係がある。石油という身近なところから環境問題を考えてもらうことで、参加者自身が環境問題について積極的に考えてもらえるのではないかと考えた。

4：活動過程 (使用時間： 90分 参加人数： 15人)

過程 (所要時間)	活動内容とそのねらい	ファシリテーターの支援活動 (教材、発問、説明、指示)	使用する教材	生徒の予想される反応、その他、注意事項
アイスブレイク (10分)	「自己紹介ゲーム」 「ケータイ危機一髪」 ・開いている状態の携帯電話を順番に少しずつ押していき、自然と閉じたらアウト。	・それぞれのチームについて、ファシリテーターも参加。	・名札シール ・ペン ・携帯電話	改めてお互いを知ってもらおう。 チーム内の雰囲気盛り上げる。
導入 (17分)	・ワークショップタイトルクイズ ・石油クイズ ・原油と石油の実物を見せる	「私たちの生活になくてはならないものについてワークショップをします！」 →「石油」が私たちにとって身近で必要不可欠であることを再認識する。 ・石油の生産国に加え、国内の石油総生産No1の県クイズ、石油をほぼ海外に依存していることもクイズに出す ・実際に石油精製工場の見学をした話も盛り込む	・石油 ・石炭 ・A, B, Cの紙 ・パソコン ・プロジェクター	

国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

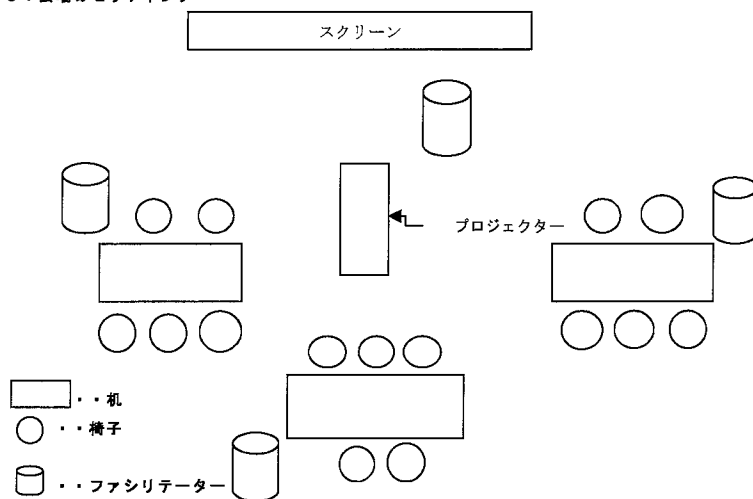
平成21年度事業報告

国際理解講座のプログラム——平成21年度の「進行シート」から

<p>展 開 (36分)</p>	<p>・「衝撃の事実！！ 20XX年石油がなくな る！？」 グループワーク (5分)</p> <p>発表(3分)</p> <p>・ショート劇 ・食べ物Ver. ・移動Ver. ・戦争Ver.</p> <p>・世界が取り組んでい る省エネルギー</p> <p>・日本が取り組んでい る省エネルギー</p>	<p>・参加者に20xx年に石油が 無くなったら、私たちの生 活はどうになってしまうの か。また、世界はどうなっ てしまうのかを考えてもら う。</p> <p>・石油が無くなったら、ど うになってしまうのか。考え られる状況を劇で参加者に 伝える。</p> <p>・ここではドイツでの事例 を視覚資料を用いながら紹 介</p> <p>・日本がどのような省エネ ルギーを行っているかを紹 介</p>	<p>・太洋紙 ・ペン</p> <p>・パソコン ・プロジェクター</p> <p>・50/50 の資料 ・マグネット</p> <p>・視覚資料 ・マグネット</p>	
----------------------	---	--	--	--

<p>まとめ (10分)</p>	<p>「あなたならどのような取組を考えますか？」 グループワーク (3分)</p> <p>発表(3分)</p> <p>まとめ</p>	<p>・世界、日本の取組を聞いた上で、「自分ならどのような取組を考えるか」を考えてもらう</p> <p>・いままでのワークショップを簡単に振り返りつつ、「個人でできることもあるんだ」ということを伝える。</p>	<p>・太洋紙 ・ペン</p>	<p>・考えが出てこない可能性アリ。 ファシリテーターがサポートをする。</p>
----------------------	--	---	---------------------	--

5：会場のセッティング



国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

平成21年度事業報告

国際理解講座のプログラム——平成21年度の「進行シート」から

6：使用する教材

- ・タイマー ・ストップウォッチ ・マグネット ・スクリーン ・プロジェクター ・パソコン
- ・石油、石炭(実物)

7：参考にした資料

『世界地図2008』

BP(http://www.bp.com/liveassets/bp_internet/globalbp/globalbp_uk_english/)

『地球を、もっと、好きになる本』(九州電力)

池内了『エネルギーがなくなる?』(フレーベル館、2009年)

本木洋子、茂手木千晶『こわされる地球の子どもたち』(新日本出版社、2005年)

8：その他

原油、灯油はビンに入っていますが、実物ということで生徒も強い関心を持つことが予想されます。何かの拍子に液体物がこぼれないよう注意を払います。

ワークショップ進行シート

作成日： 2010 年 1 月 8 日

テーマ： 世界をみ茶おう！知っ茶おう！

ファシリテーター（グループ）： 異文化チーム

1：本テーマの目的

ここでの文化とは、特定の地域で伝達される実際の生活様式や習慣を指す。しかし各地域の文化はその地域だけで形成したのではなく、長い時間をかけ、他の文化と影響し合い、自文化のスタイルと折衷して変化していくものである。私たちはお茶を題材にして、文化と文化のつながりを見ていきたい。

2：本テーマをとりあげる理由

世界中で広く日常的に飲まれているお茶という身近な題材を取り上げることで、異文化理解についてだけでなく、文化のつながりをわかりやすく学ぶことができる。

3：活動過程 （使用時間： 90分 参加人数： 人）

過程 （所要時間）	活動内容とそのねらい	ファシリテーターの支援 活動（教材、発問、説明、指示）	使用する教材	その他、注意事項
自己紹介 （5分）	「ファシリテーター自己紹介」 ファシリテーターの顔と名前を覚えてもらうことで、少しでも親しみを持ってもらう。	名札シールを配っておき、参加者に名前を書い てもらう。	名札シール	始まる前に世界地図を張っておく。 名札カードが全員に渡るように注意する。 生徒が机や椅子にぶつからないように注意する。
名札作り （3分）		ホワイトボードに説明を書 いておく。		

国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

平成21年度事業報告

国際理解講座のプログラム——平成21年度の「進行シート」から

アイスブレーキング (15分)	「仲間集めゲーム」 グループ分け	例「目玉焼きに何をかけるか？」などの質問を出し、自分と同じ答えの人を探して集まり、その場に座る。 実際にゲームを行う前に、インストラクターが見本として模範演技をしながら説明し、その後で参加者全員で行う。 名札シールに色をつけておき、その色でチームを決める。 各グループに均等にインストラクターが散らばる。		様々な答えが出るはずなので、インストラクターが混じるなどして対応する。 チーム名として、 ・ 緑茶 ・ 紅茶 ・ ウーロン茶 ・ 抹茶 ・ 麦茶 ・ 花茶 を利用する。
導入 (5分)	「いつもどんな飲み物を飲んでいるの？」	普段飲んでいる飲み物を模造紙に書き出してもらい、取り上げる。	模造紙 マジックペン	各グループに模造紙とポストイット、マジックペンを配っておく。
展開 (55分)	飲み方、茶葉、お茶うけなどの紹介 ロシアのティータイムを紹介する (20分) お茶の歴史 ・ お茶がどこから来て、どんな風に広ま	実際の茶葉、淹れてみたお茶の色やにおいなどを見て、感じてもらう。 世界地図やお茶の年表を用いて、説明をする	写真資料 実物(茶葉) ポット コップ 世界地図 地図(手書き) 年表(手書き)	写真資料はグループの数分用意しておく。 お茶を飲めたら実際に飲む。

	<p>ったのか</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本にいつ来たのか？ <p>(5分)</p> <p>クイズ (4択クイズ) あらかじめ、部屋の四隅に番号を張っておき、答えだと思ふ番号の所に移動してもらおう。</p> <p>(15分)</p> <p>お茶を取り上げ、お茶をあらわす単語 (チャ、ティー、チャイ、その他)ごとに白地図を色塗り</p> <p>(15分)</p>	<p>「お茶の生産量が多い国はどこ？」 「お茶の消費量が多い国はどこ？」 「世界で一番値段が高いお茶はいくら？」 「苦いお茶ってどれ？」 など、数問出題する。</p> <p>どの地域、国ではお茶をどう呼ぶかを予想して (どの国はチャと呼び、どの国はティーと呼ぶかなど) グループごとに地図を色分けしてもらおう。</p>	<p>写真 茶器</p> <p>白地図 マジックペン</p>	<p>クイズに正解した人たちに拍手するなどして盛り上げる</p> <p>クイズの内容は変わる可能性あり</p> <p>各グループに白地図を配っておく</p> <p>チャ→青 ティー→赤 チャイ→緑 その他→オレンジ</p>
<p>まとめ (2分)</p>	<p>全体の流れを振り返りながらの落とし。</p>	<p>お茶を通して、文化と文化のつながりを見ました。</p> <p>このように文化はある国、地域のみで発生したのではなく、様々な交流の中で混ざり合い、影響しあって変化しています。</p> <p>今回はお茶でしたが、別</p>		

国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

平成21年度事業報告

国際理解講座のプログラム——平成21年度の「進行シート」から

		のものから文化のつながりを見ると、また新しい発見があるでしょう。ぜひ、いろいろ調べてみてください。		
--	--	---	--	--

4：会場のセッティング

机、椅子は使用しないので、端に寄せるなどして広いスペースを作る

5：使用する教材

- ・世界地図（1枚）
- ・名札シール
- ・模造紙
- ・ポストイット
- ・白地図
- ・マジックペン
- ・写真資料
- ・実物の茶器、茶葉
- ・コップ（生徒用／見せる用）
- ・ポット
- ・小皿
- ・スプーン・ゴミ袋

6：参考文献

- 大森正司監修『お茶の大研究』PHP研究所 2005.6
南広子監修『日本茶・紅茶・中国茶』新星出版社 1999.4
池田智子『中国茶とルビアの泉』メタ・ブレーン 2006.10
伊藤園「お茶百科」 <http://ocha.tv/index.html>
伊藤園「茶畑日記」 http://o-iocha.cocolog-nifty.com/chabatake/2006/07/post_b327.html
武夷岩茶 大紅袍 肉桂 <http://www.uloncha.com/buicha.htm>
キリンビバレッジ http://www.beverage.co.jp/about_tea/tale_of_tea/tale/story4a.html
サントリー <http://www.suntory.co.jp/enjoy/desktop/tea/index.html>

テーマ：ハンバーガーから見る異文化理解

ファシリテーター(グループ)：ファーストフードからみえる異文化 ハンバーガーサプライズ

氏名 本田加南子、土田陽子、高橋智子、吉田美由希、石井郁子

派遣先：新潟県立新潟翠江高等学校

派遣日：平成 21年 12月4 日 (金)

目的：各国のファーストフードのメニューから、それぞれの地域や文化の宗教を見ていく。とくにインドを取り上げ日本との違いに気づいてもらう。また文化の違いが原因で起きた事件を取り上げながら、異文化の大切さや難しさに気づいてもらう。

活動過程 (使用時間：約90分 参加人数：28~9人)

過 程 (所要時間)	活動内容とそのねらい	ファシリテーターの支援活動 (教材, 発問, 説明, 指示)	使用する教材	生徒の予想される 反応, その他, 注意 事項
名札づくり 10分	生徒に名札を書いてもらう	呼ばれたい名前をかこう！と誘導	ペン 名前シール	間違えたら予備も準備しておく
あいさつ3分	生徒に名前と顔を覚えてもらう	英語、ヒンドウー語、韓国語、中国語、ロシア語、タイ語…で自己紹介。		
アイスブレイキング 10分	候補1：国旗パズル 候補2：他個紹介 候補3：伝言ゲーム *どれか1つ選んで下さい		国旗パズル 国旗パズルの見本	困っている生徒がいたら誘導してあげる

国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

平成21年度事業報告

国際理解講座のプログラム——平成21年度の「進行シート」から

導入 25分				
マクドナルド(MD)のイメージ(2分)	MDのイメージ(CM、味、値段、雰囲気、などなんでも思ったこと)紙に書く	写真を貼ってイメージをしやすいようにする。 書きにくいようだったら、なるべく質問する	質問の書いた画用紙・ペン・PC・プロジェクター・スクリーン・延長コード 拡声器	
グループごとに発表(5分)	各グループの意見を発表	ヘルパーは紙を持って生徒が言う		声が小さかったらヘルパーが言う
クイズ(5分)	MDの基本情報を盛り込んだクイズ	パワーポイントを使って4問出題する ①MDの発祥地はどこだろう? ②世界の何ヶ国にMDはあるか? ③日本MDの店舗数は? ④新潟県にはMDは何店舗ある?	パワーポイント パソコン プロジェクター	
実際にいったMDの紹介(5分)	タイ、韓国、フィリピン	パワーポイントを使って写真を見せながら紹介する	PC、プロジェクター	
世界のマクドナルド(10分)	アメリカ、オランダ、カナダ、インド…の国の珍しいメニューをクイズ形式にして国名を当ててもらおう 代表の生徒に国名を覚えてもらおう *どこのメニューかはチーム名(国名)から選んでもらう	主な紹介メニュー カナダ…ロブスター オランダ…ユーロ インド…マハラジャマック ハワイ(USA)…ヌードル	世界地図 マグネット ミニ国名プレート ロブスター画像	

<p>展開 30分</p>				
<p>インドを詳しく見 ていこう(8分)</p>	<p>インドの基礎知識を つけてもらう</p>	<p>実際インドへ行ったことのある 学生が話をする</p>	<p>PC、スクリーン、プロ ジェクター、スクリーン、 拡声器、 写真</p>	
<p>3つの宗教比較(7 分)</p>	<p>イスラム、ヒンドウー 教、ユダヤ教の比較 →3つの宗教の特徴 を知る</p>	<p>Google Earth(インターネット へ接続)でインドの確認と沐浴 の写真か映像を見る</p>		
<p>インドMDで起こっ た牛脂事件の新聞 を使用しながら見 ていく(5分)</p>	<p>要約された新聞を読 みながらミニ劇をす る</p>	<p>ミニ劇をしながら以下のことを 説明↓ ・牛脂をつかったことでこの暴 動が起きたということの説明 をしなければ自分と比べられ ないからしっかり説明する。 ・牛脂が入っていた、入ってい ないじゃなく”暴動”がおきた という真実を知ってもらう。</p>	<p>要約した新聞 劇に使う人形</p>	<p>この内容をよく理解 していない子にはわ かりやすく教える</p>
<p>グループワーク 6分</p>	<p>「日本とインド”暴 動”が起きた行動の違 いを比較してみる(自 分自身 対 インド)</p>	<p>ミニ劇を見て ①暴動の感想②ヒンドウー教側 にたつて事件のことを考える</p>	<p>質問事項を書い た大洋紙 ペン</p>	<p>紙になかなか書かな い場合は意見を聴き だしてヘルパーが書 き込む</p>
<p>発表</p>	<p>グループごとに発表</p>	<p>ヘルパーが紙をもってグルー プの生徒に読み上げてもらう</p>		<p>小さな声の場合はヘ ルパーが大きな声で もう一度言う</p>
3				

国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

平成21年度事業報告

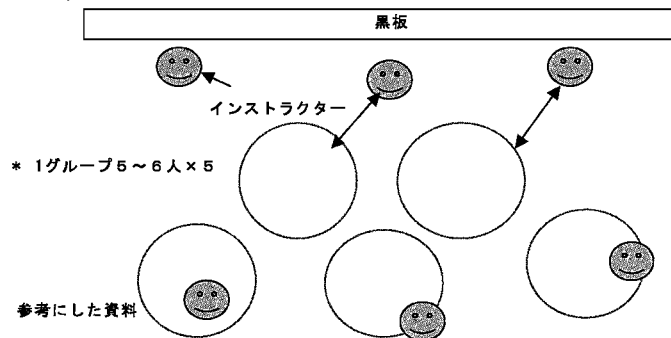
国際理解講座のプログラム——平成21年度の「進行シート」から

まとめ	5分	今日してきたことを振り返りながら今後どのように異文化と付き合っていくか。	生徒と一緒にまとめを聞く		最後は集中
-----	----	--------------------------------------	--------------	--	-------

先生に確認していただきたいことリスト！

- ①グループを先生にお任せして考えていただくか、私たちが適当に割り振ってグループを作った方がよいか。
- ②3つの中からアイスブレイキングを1つお選びください。
候補1：国旗パズル — 人数分のばらばらになった国旗のパズルを組み合わせて、ついでにグループも作る。
候補2：他価紹介 — グループでペアを作り互いに趣味などを聞く。それが終わったらグループ内で友達のことを紹介する。
候補3：伝言ゲーム — お題をひと筆で書いてそれを同じグループの人に順々に伝えていくゲーム。
- ④ワークショップをする教室はインターネットが使用可能でしょうか。

5：会場のセッティング



作成日：平成21年11月20日
新潟国際情報大学 2009年度
ワークショップ 国際交流インストラクター

ワークショップ進行シート

作成日： 2009 年 11 月 25 日

テーマ： 学校にいけなくてどうということ？！

ファシリテーター（グループ）： 「学校」グループ

対象：小学生

1：本テーマの趣旨

世界にはさまざまな理由で学校に行くことができず、教育を受ける機会奪われている子どもたちがいることを知ってもらい、教育を受けられることが当たり前でないことを知ってもらおう。

2：本テーマの目的

今回のワークショップに参加してもらうことで、貧困や児童労働などの理由で学校に通えず、自らが直面している悪循環から抜け出すことが出来ずにいる子どもたちのついて知ってもらおう。

3：本テーマをとりあげる理由

世界には学校に行くことが出来ない多くの子どもたちがいるという事実を知り、彼らと同世代の日本の子どもたちにもそういった事実があることを知ってもらいたかったから。

4：活動過程 (使用時間： 90分 参加人数： 30人)

過 程 (所要時間)	活動内容とそのねらい	ファシリテーターの支援活動(教材、発問、説明、指示)	使用する教材	生徒の予想される反応、その他、注意事項
準備 あいさつ (3分)	グループ分け 自己紹介	参加者に名札を配布		

国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

平成21年度事業報告

国際理解講座のプログラム——平成21年度の「進行シート」から

アイスブレイキング① (7分)	ピンポンバンゲーム 目的: 参加者の緊張の緩和	①一緒にゲームに参加しメンバーになる。	特になし	恥ずかしがる子ども予想されるのでファシリテーターも参加しそばに付く
導入 (30分)	1:「もし学校行かなかったら(行かなくてよかったら)どうなる?」 (グループワーク) ・作業:4分 ・発表:5分 目的: 自分たちが7才の子どもだった時学校がなく、勉強しなくてもよかったらどうなっていたかたまたま自分たちの年齢まで成長したらどうなってしまうかを考えてもらう。 2:「リサの大冒険」(紙芝居) 劇:15分 発表:3分 目的: もし勉強が出来ないとどうなるか(文字が読めない、計算が出来ない等)を劇を通して理解してもらう	序盤: 司会は前に一人、それ以外は各グループにつく。 グループワーク: グループごとにワークシートを配る。各班のヘルパーはワークシートへの記入を行い、参加者がアイデアを出せるよう促す。 劇: 参加者を劇の見やすい位置に移動させる。	用紙 ペン 世界地図 磁石 紙芝居	総ての参加者が均等に参加できるようにし、あまり発言していない子がいたらファシリテーターの方から話題を振ってみる。 ワークシートは後に発表するので記入時は極力ひらがなで行う。
休憩 (5分)				
展開 (40分)	①:世界の学校に行けない子供たち(グループワーク) 目的: 世界の学校に行けない	各地図の配布 参加者のファシリテーターのサポート	ペン 写真 就学率の地図 戦争の地図 児童労働の地図 ストリートチルドレン	三カ国の紹介をし、各国の子どもたちの状況をワークシートを書いてもらい、復習をする。

	<p>子ども達の地図から読み取れることを考えてもらいどのような理由で学校に行けないかを知ってもらい、世界の子ども達の実情を知ってもらおう。</p> <p>②：自分たちはどう思ったのか？（グループワーク）</p> <p>目的： 世界の子どもたちの実情を知ってもらい自分たちはどう思ったのか何をしたらよいかというアイデアを出してもらおう。</p> <p>③：具体例となる活動の紹介</p> <p>目的： さまざま組織の活動を紹介し、自分たちの考えをより深くしてもらおう。</p>		<p>の地図 用語説明のための資料 黒板用資料</p>	<p>やることに困っていたらヘルパーが教える。</p> <p>発表中は静かにしてもらい注目できるように仕向ける。</p>
<p>まとめ (15分)</p>	<p>今日行ったワークショップを振り返る&まとめ</p> <p>目的： 学習内容の確認 まとめ</p>	<p>前にまとめ役ファシリテーターがでてワークショップの振り返りとまとめを行う。</p>	<p>特になし</p>	

国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

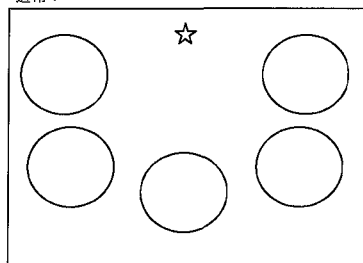
平成21年度事業報告

国際理解講座のプログラム——平成21年度の「進行シート」から

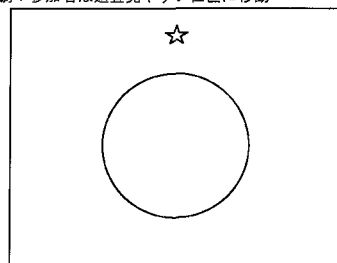
5: 会場のセッティング

☆: ファシリテーター ○: 参加者

通常:



劇: 参加者は適宜見やすい位置に移動



6: 使用する教材

ペン

世界地図

磁石

各種資料

劇用道具

6: 参考にした資料

Webサイト:

- ・日本ユニセフ協会 <http://www.unicef.or.jp/>
- ・NGO ACE <http://acejapan.org/>
- ・ILO駐日事務所 <http://www.ilo.org/public/japanese/region/asro/tokyo/index.htm>
- ・インドチャンネル <http://www.indochannel.jp/index.html>
- ・NPO フリー・ザ・チルドレン・ジャパン <http://www.ftcj.com/index.html>

書籍:

- ・学校に行けないはたらく子供たち: 汐文社 2004年発行
- ・くらべてわかる世界地図2 学校の世界地図: 大月書店 2004年発行
- ・くらべてわかる世界地図1 暴力の世界地図: 大月書店 2004年発行
- ・カラシニコフ: 朝日新聞社 2004年発行

ワークショップ進行シート

作成日： _____ 年 _____ 月 _____ 日

テーマ：甘くて苦いチョコレートの真実

ファシリテーター（グループ）：児童労働

メンバー 長瀧綾乃 富永由賀 茅原高生 藤崎貴行 石橋妃奈子 中村綾美

1：本テーマの趣旨

身近なお菓子・チョコレートを通して、世界の貿易システムとその背後にある「不平等」、「児童労働」の実態を明らかにする。導入部分ではカカオの産地や効用などに触れ、最終的には普段何気なく口にかけているチョコレートがどのようにして作られ、日本の私たちに届けられているのかを考えていく。このように商品の購買と世界とのつながりを見ていく中で、不平等を解決するひとつの可能性としてフェアトレードの説明も行う。

2：本テーマの目的

チョコレートができるまでの生産過程をめぐり、カカオの生産者と私たち消費者とのつながりを理解する。また、その中に内包される問題点を明らかにし、解決策を考える。チョコレートの真実を知り、チョコレートをかう際に思い出して買ってもらいたい。

3：本テーマをとりあげる理由

身近なチョコレートを取り上げることで、世界の貿易システムとその背後にある「不平等」、「児童労働」の実態を明らかにしたいから。カカオの基本的な知識を始め、どのようにして私たちの元に届けられているのかを知ってほしいため。購買と世界とのつながりを見たうえで、不平等を解決する方法を考えさせるため一つの方法としてフェアトレードを挙げる。そしてチョコレートという身近なお菓子を通じて、自分の選択で世界を変えられるかもしれないということを理解してもらう。

国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

平成21年度事業報告

国際理解講座のプログラム——平成21年度の「進行シート」から

4：活動過程 (使用時間：70分 参加人数：15人程度 対象：高校生)

過程 (所要時間)	活動内容とそのねらい	ファシリテーターの支援活動(教材、発問、説明、指示)	使用する教材	生徒の予想される反応、その他、注意事項
自己紹介 (2分)	私達のことを生徒たちに知ってもらおう。呼びやすい名前でも呼んでもらおう。	自己紹介が始まる前に、生徒たちには、ニックネームを名前シールに書いてもらおう。好きなチョコの名前を書いてもらおう。	・名札 ・名札シール ・ペン ・マラカス	チョコレートアレルギーの子がいなければ先生に確認しておく。
導入 (10分)	カカオクイズ (教室全体を利用した4択クイズとグループワークでカカオに関する基本的な知識を得、生徒のモチベーション、関心を高める)	・カカオって何？ ・カカオってどこでできているの？ 国の場所を地球儀で調べよう(ガーナ、コートジボワール、エクアドル、ベネズエラ、カメルーン)	・4択の数字を書いた紙 ・問題を書いた紙 ・答えを書いた紙 ・世界地図 ・地球儀 ・国旗マグネット	楽しくカカオ、チョコレートについて学ぶ。
問題提起 (3分)	2つのチョコレート (市場には様々な種類のチョコレートがあることを知り、その違いが何か問いかける) →実際にどっちを買うかを選んでもらう。	安いチョコ、フェアトレードチョコ(秘密のチョコ)の2つを見せる	・チョコの模型	
ロールプレイ (15分)	カカオができるまで (ガーナで行われている不当な取引のカカオ生産を疑似体験する)	カカオ畑の労働者(ファシリテーター) ↓ 農場主(ジュニア) ↓ 運び屋(ボチ) ↓	・カカオの木と実 ・役名の札 ・チョコレート ・お金 ・ダンボール(工場のハリボテ)	ここではカカオの収穫をゲーム感覚で楽しむ。

<p>視聴覚 (4分)</p>	<p>ビデオ (普段目にするこ のできない児童労働 を、視聴覚でリアル に感じる)</p>	<p>チョコレート会社(まさや) ↓ 私たち(参加者) ・日本の子どもたちはチョコ コをもらう ・コフィはお金をもらえな い</p> <p>劇とビデオを見ての感想を 日本の子どもとコフィたち に分けて考える</p>	<p>・ビデオ「カカオ農 園で搾取される子 供」(世界がもし100 人の村だったら) 2007年フジテレビ</p>	
<p>GW(7分)</p>	<p>このチョコレートの 作り方どう思う? グループごとに発表</p>		<p>・模造紙 ・マジック ・ポストイット</p>	
<p>解説(5分)</p>	<p>児童労働とは (ロールプレイの内 容が現実のものであ ることを説明し、児 童労働の存在を知ら せる。また、それが 自分たちの生活と繋 がっているというこ とに気付かせる)</p>	<p>・カカオ畑の労働者となっ ているのが、参加者と同じ 年代の子供たちであること を明かす。 ・児童労働の存在を教え、 その実情を説明する。 ・ペットボトルによるカカ オの重さ体験</p>	<p>・米袋</p>	<p>児童労働などの専 門用語を覚えさせ ることが目的では ない。 難解な表現は避 け、簡単な言葉で 理解させる。</p>
<p>解決策 (5分)</p>	<p>フェアトレードと は</p>	<p>児童労働の解決策の一例と してフェアトレードを挙げ る ・フェアトレードの説明 ・フェアトレ商品紹介</p>		

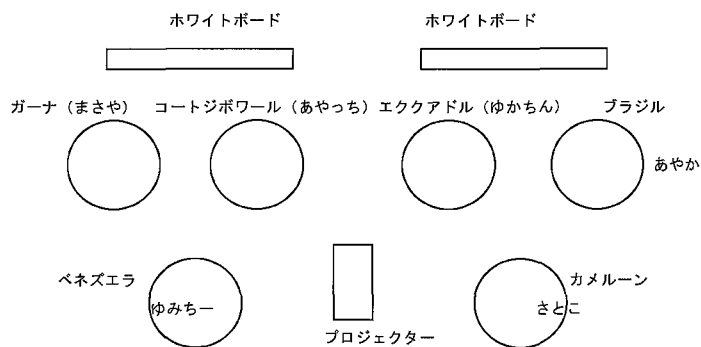
国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

平成21年度事業報告

国際理解講座のプログラム——平成21年度の「進行シート」から

GW (7分)	あなたはどっち？ い つものチョコorフエ アトレードチョコ グループ内で発表	どっちかを選んでもらい、 その理由を書いてもらう	・コピー紙 ・マジック	
まとめ (5分)	メッセージ&チョコ の試食			

5：会場のセッティング



※WSを通して机は使わず、生徒には床に座ってもらう。

6：使用する教材

・ビデオ『世界がもし100人の村だったら』2007年フジテレビ

7：参考にした資料

・『アフリカを知る辞典』岩谷純一 平凡社 1989年

・『季刊at8号』柄谷行人(他) 太田出版 2007年

・『コーヒー、カカオ、コメ、綿花、コショウの暗黒物語 生産者を死に追いやるグローバル経済』
ジャン・ピエール・ポリス 作品社 2005年

- ・『私8歳、カカオ畑で働きつづけて。 児童労働者とよばれる2億1800万人の子どもたち』
岩附由香（他） 合同出版 2007年
- ・『チョコレートの真実』 キャロル・オフ 英治出版 2007年
- ・『子どもたちのアフリカ “忘れられた大陸” に希望の架け橋を』 石 弘之 岩波書店 2005年
- ・『フェアトレードの時代』 長尾弥生 日本生活協同組合連合会 2008年
- ・N-VIC ホームページ
- ・日本外務省 ホームページ
- ・在日ガーナ大使館 ホームページ
- ・ふえあういんず ホームページ
- ・日本チョコレート・ココア協会 ホームページ
- ・ILO駐日事務所 ホームページ
- ・People Tree ホームページ
- ・ACE ホームページ
- ・フェアトレード情報室 ホームページ

B：その他

臨場感あふれる劇と愉快なマラカス担当に注目してください。全力を尽くします!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

平成21年度事業報告

実施後の自己反省——平成21年度の「評価シート」から

新潟国際情報大学は、国際理解講座の実施後に、「評価シート」の記入を担当グループの学生に指導しています。これはインストラクターの学生に、派遣先学校での実施内容を振り返らせて、当初設定した目標の達成度や、成果と課題について考えさせることによって、今後の活動をより充実したものにするを目的としています。

ワークショップ評価シート

ファシリテーター(グループ): 情報チーム

テーマ: うたがって気づく自分の「世界」

日時: 9月4日 14:00 ~ 15:30

学校・学年: 加茂市須田小学校 6年生

Q1: 進行シートに記入した「目的」は、今日のWSで達成できましたか?

人それぞれの価値観があることに気づく

きっかけにはなったと思います。それ以外に関してはあまり上手くいかなかったように感じます。

Q2(課題): 目的が達成できなかった場合、それはどうしてだったと思いますか?

また、目的が達成できた場合でも、今後に残された課題はありませんか?

私には目的が達成できませんでした。内容が小学生に対して難しい内容であり、伝える側の私たちも焦って小学生の理解を待たずに進んでしまったためです。

Q3(成果): 今日のWSにおいて、評価できる点は何ですか?

また、新しく気づいた点は何ですか?

ワークショップ初体験の人にアスプレキが導入をまかせ、上手くいったこと。

情報の受け手(生徒)のことを考えながら進める必要があること。

個人的な感想など自由に記入して下さい。

今回、学ぶことがたくさんあるワークショップで、こういう経験ができて嬉しく思います。

次のワークショップでは今日の経験を活かし、小学生に合わせてワークショップをしたいと思います。

ワークショップ評価シート

ファシリテーター (グループ): 絵筆チーム

テーマ: パレスチナ・イスラエル問題

日時: 2009年9月16日

学校・学年: 佐渡市立羽茂中学校 3年生

Q1: 進行シートに記入した「目的」は、今日のWSで達成できましたか?

はい。 「身近に感じ理解してもらおう」という点については、あと達成できなかったと思う
身近に感じる要素がなかった。 「和と国家」は、上手にいかれた。

Q2 (課題): 目的が達成できなかった場合、それはどうしてだったと思いますか?

また、目的が達成できた場合でも、今後に残された課題はありませんか?
 この問題を身近に感じてもらう要素が欲しい。
 もっとわかやすく、簡単に言う、整理する。
 - 要所、要所で「パレスチナ」の「声」が「大事」。
 - 言葉をもっとわかやすくする。「激しい」「等しい」など。
 - 写真など、配る物にいちいち「イスラエル」「パレスチナ」と書くべき。
 - 練習は、準備が間に合わなかった。
 - インビュが長い!!
 - パレスチナが他のパレスチナから見ると、生徒を動かせる時間が少なかった。
 - 和の生活と、②③人の生活がうまくつなげられていない。

Q3 (成果): 今日のWSにおいて、評価できる点は何ですか?

また、新しく気づいた点は何ですか?
 - 紙レインゴはわかやすくかつ、らく、女子評定。
 - 時間調整がうまくできた。
 - 月かたの話をみんな聞いてた! → だが、もっとインパクト強くなるべき。
 - 「和、青木 態度 → 手と視線がよく動いて good.

個人的な感想など自由に記入して下さい。

- 今回の敗因は練習がちゃんとできなかったこと。WSは作って持っていくもの。みんなが生産的にやるといって、もっと良くする。WSは楽しいものだ!
- 生徒が一番参加しやすい状態で受けてもらえたら、押しつけては引いてみる。
- 1日のアクティビティから2日のアクティビティへのつなぐのが、パレスチナが欲しいね。
- 現状の写真は、配るために配った方がいい。衝撃的だから配るといいよ。石投げてるのか。
- 石から始まるのはオカシイ。
- 「パレスチナ問題」のワードが突然出てきた。

パレスチナ前に出ては難しい。
 9:30から
 引くことか。
 次回からはどうするか
 一番ほしいの、自分自身
 「和、激しい」という点。

国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

平成21年度事業報告

実施後の自己反省——平成21年度の「評価シート」から

ワークショップ評価シート

ファシリテーター(グループ): 環境チーム

テーマ: 石油と私たち

日時: 2009, 9, 17 (木)

学校・学年: 吉田南小学校 / 6年2組

Q1: 進行シートに記入した「目的」は、今日のWSで達成できましたか?

8割程度

環境の言語委員にあまり触れられず
資源と環境のつながりを言えなかった

Q2 (課題): 目的が達成できなかった場合、それはどうしてだったと思いますか?
また、目的が達成できた場合でも、今後に残された課題はありませんか?

次は、アイスブレイクは(本を動かすものにして)いいと思う。

(課題) 説明が多く、生徒をあまませないように
今後工夫していく。(席や紙芝居を使う ecc.)

Q3 (成果): 今日のWSにおいて、評価できる点は何ですか?
また、新しく気づいた点は何ですか?

- ・ 時間帯を気にして、(おぼえてしまった)臨時対応に「対応」できたと思う。
- ・ 声がよく出ている。うるさくならない時に、集中するように声を掛け、対応できた。

個人的な感想など自由に記入して下さい。

- ・ 紙を見ながらWSを行って、生徒の顔を見れない場面があった。
- ・ 全体におとなしいクラスだったので、そういうクラスをどう盛り上げるかが課題だと思った。
- ・ 初WSで緊張したけど生徒の方からあいさつしてきてくれてよかった。

ワークショップ評価シート

ファシリテーター(グループ): お茶チーム

テーマ: 世界をみ茶あ'う! 知, 茶おう!

日時: 9月16日

学校・学年: 二葉中学校 1~3学年

Q1: 進行シートに記入した「目的」は、今日のWSで達成できましたか?

完全には達成できなかった。

Q2 (課題): 目的が達成できなかった場合、それはどうしてだったと思いますか?

また、目的が達成できた場合でも、今後に残された課題はありませんか?

表現のし方が弱い。伝えたい事とと強くアピールする。

Q3 (成果): 今日のWSにおいて、評価できる点は何ですか?

また、新しく気づいた点は何ですか?

説明が長く、生徒がきいてくつてきていた。

個人的な感想など自由に記入して下さい。

よりたいてくつしないように説明していきたい。

・実際にWSとして、内容の難しさが明らかになって良かった。

・説明すること(言葉)が思った。

国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

平成21年度事業報告

実施後の自己反省——平成21年度の「評価シート」から

ワークショップ評価シート

ファーストフードから見える異文化理解

ファシリテーター(グループ): ハンバーガーサライズ

テーマ: ハンバーガーから見る異文化理解

日時: 平成21年12月4日

学校・学年: 翠江高校 3,4年

Q1: 進行シートに記入した「目的」は、今日のWSで達成できましたか?

最後の生徒の感想から、達成できたと思う。

「楽しかった」「OOOが気に入った」「日本人が牛肉が食っている様子を外国の(牛乳にエルトウ-孝文)の人とどう思ふか、などの

Q2 (課題): 目的が達成できなかった場合、それはどうしてだったと思いますか?

また、目的が達成できた場合でも、今後に残された課題はありますか?

糸田がいっぱい、お取りをおこたった。

最後のまとめ。

人数が予定より多かったときの最初のため。

国旗パズルがなかなかできなかった。

見るときに見るものを事前に準備しておいておいた。

Q3 (成果): 今日のWSにおいて、評価できる点は何ですか?

また、新しく気づいた点は何ですか?

雰囲気良かった。

それぞれみんなが質問とくに対応できた。

友達同士が離れるのが嫌そうなお人(チーム分けのときに配慮した)。

臨機応変が大事。

個人的な感想など自由に記入して下さい。

- ・アイスブレーキングのジェスチャーゲームが予想以上に盛り上がった。
- ・用意したフィリピンのマックのメニューに " 食いついてた。
- ・楽しかった。
- ・ネカメはあせたけど真余りに聞いてくれて、自分たちのペースに持っていくけた。
- ・ヘルプがうながして良かった。

ワークショップ評価シート

ファシリテーター (グループ):

テーマ: 学校に行けないうってどうしたこと?!

日時: H22年2月2日 14:10~15:45

学校・学年: 見附市立新潟小学校 5,6年生

Q1: 進行シートに記入した「目的」は、今日のWSで達成できましたか?

- ・半分半分
- ・生徒によって違っていた

Q2 (課題): 目的が達成できなかった場合、それはどうしてだったと思いますか?

- また、目的が達成できた場合でも、今後に残された課題はありませんか?
- ・5年生と6年生の差?
- ・WSの段どりが良かった。

Q3 (成果): 今日のWSにおいて、評価できる点は何ですか?

- また、新しく気づいた点は何ですか?
- ・ゴウラマさんの穴うめワークシートが良かった。
- ・ポストイットの使い方が良かった。
- ・構成が良かった。
- ・「学校に行けないうってどうしたこと?!」を、ボードをつけてやったのが良かった。
- ・ゴウラマさんの答えあわせを、生徒に読んでもらった方がいい。

個人的な感想など自由に記入して下さい。

- ・アイスブレイキング成功!!
- ・劇が楽しかった。
- ・具体例がもっとあった方がわかりやすい。
- ・5・6年生は、ひかえめな子が多くて、どう接すればいいかわからない。
- ・役割分担を決めてたから、ハプニングがあっても大丈夫だった。
- ・学校チームのWSで、今までで一番良かった。

国際理解講座(ワークショップ)の成果と課題

平成21年度事業報告

実施後の自己反省——平成21年度の「評価シート」から

ワークショップ評価シート

ファシリテーター(グループ): 富永・長瀧・荻原

テーマ: 甘くて苦いチョコレートの真実

日時: 2009.9.14 14:00 - 15:30

学校・学年: 新潟市女黒崎南小学校 6年生

Q1: 進行シートに記入した「目的」は、今日のWSで達成できましたか?

子ども達に、チョコのどちらを買うのか、買ったらいいのかわからないので、他案がいいのかと考えるきっかけを与えた。しかし、解決策を考えると33までは達成できませんでした。

Q2 (課題): 目的が達成できなかった場合、それはどうしてだったと思いますか?
また、目的が達成できた場合でも、今後に残された課題はありますか?

- WSの中に解決策を考えた部分が含まれていなかった。
- Yes, NOの質問結果に対して、子どもがもっと深く考えをめぐらせたりするように資料準備や入力カードを身に付ける。

Q3 (成果): 今日のWSにおいて、評価できる点は何ですか?
また、新しく気づいた点は何ですか?

- アイスブレーキングの盛り上がりが増えた。
- ハプニングがあったときもみんなよく受け合えた。
- みんな真食りにとっこんでいて、よかった!!!

個人的な感想など自由に記入して下さい。

初のチョコWSということで、子どもたちがどんな反応をするかわかりませんでした。自分たちが思った以上に子どもたちは活発で、グループ分けはスムーズに行え、子どもたちに助けられた気がしました。今日のWSでの課題点を克服し、より良いWSにしていきたいと思っております!!!

現代GPシンポジウム「国際理解教育におけるワークショップの導入」の記録

平成21年度事業報告

日時：平成21年11月14日(土) 13時～16時

会場：クロスパルにいがた 映像ホール

主催：新潟国際情報大学

共催：新潟県国際理解教育推進協議会(構成団体:新潟県知事政策局国際課、新潟県教育庁義務教育課・高等学校教育課、新潟市教育委員会学校支援課、(独)国際協力機構広尾センター、新潟大学、上越教育大学、新潟国際情報大学、NPO法人にいがたNGOネットワーク、(財)エイ・エス・エフ日本協会、青年海外協力隊新潟県OB会、(財)新潟市国際交流協会、長岡市国際交流センター、(社)上越国際交流協会、(財)新潟県国際交流協会)

平成21年度事業報告

プログラム

1. 開会の挨拶

新潟国際情報大学 情報文化学部長 梶木 公一

2. 講演「新潟に求められる国際理解とは何か」

長岡市国際交流センター 羽賀 友信 センター長

3. 国際理解教育プログラムの紹介

国際交流インストラクターの新潟国際情報大生

①「石油と私たち——資源と環境の行く末は」

②「こんなもの食べるの?食から見える世界」

③「甘くて苦いチョコレートの真実」

4. 講評

上越教育大学大学院学校教育研究科 釜田 聡 教授

(休憩)

5. パネルディスカッション「国際交流インストラクターによる国際理解教育の成果」

パネリスト:	新潟県教育庁高等学校教育課	橋本 敏郎 指導主事
	新潟市教育委員会学校支援課	高橋 直彦 副参事
	新潟市立巻南小学校	井口 昭夫 教諭
	新潟市立二葉中学校	鈴木 佐榮子 教諭
	新潟市立万代高等学校	平井 望 教諭
	上越教育大学大学院学校教育研究科	釜田 聡 教授
	長岡市国際交流センター	羽賀 友信 センター長
	新潟日報社読者ふれあい部	渡辺 英美子 部長 (兼 編集局編集委員)
コーディネーター:	新潟国際情報大学 教授	佐々木 寛

6. 「今後の国際交流インストラクター事業について」

(財)新潟県国際交流協会 土田 純一 事務局長

7. 閉会の挨拶

新潟国際情報大学 学長 平山 征夫

開会の挨拶



新潟国際情報大学
情報文化学部 学部長
槻木 公一

新潟国際情報大学では、地域社会の国際化・活性化の推進を目標として、「国際交流インストラクター」として認証された大学生を、新潟県内の小中学校・高校に派遣して、ワークショップ形式による国際理解教育を実施するという「国際交流インストラクター事業」を行っています。

この事業は、新潟県国際交流協会をはじめとする県内国際交流団体や、教育機関との密接な連携によって、平成17年度よりスタートしましたが、平成19年にはその実績が認められて、文部科学省の大学改革推進等補助金の1つ「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(通称、現代GP) に採択されました。

幸いにも、この事業は、県内の学校教育関係者の皆様よりご高評価頂いており、これまで県内の60以上の小中学校・高校に派遣され、受講した児童・生徒数は4,000人を超えます。

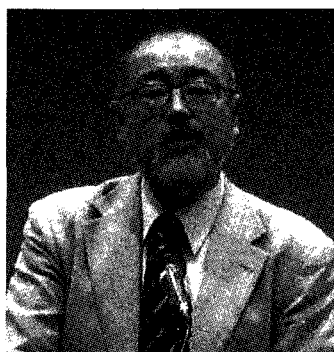
このように、ご高評価頂くことができましたのも、ひとえに関係者の皆様のご理解とご協力のたまものと、深く感謝申し上げます。

本学では、この国際交流インストラクター事業を来年度以降も続けてまいります。文部科学省の補助事業、つまり現代GPとして実施するのは、今年度が最終年度となります。つきましては、この事業のこれまでの成果を広く県民、国民の皆様にご公表するとともに、今日お出で頂きました皆様から、忌憚のないご意見・ご批判を頂くことを目的として、シンポジウム「国際理解教育におけるワークショップの導入」を開催する運びとなりました。

ご多用のところご出席下さいました皆様には、心より御礼申し上げます。いろいろとご教示賜りますようお願い致しまして、開会の挨拶と致したいと思います。

平成21年度事業報告

基調講演「新潟に求められる国際理解とは何か」



長岡市国際交流センター
羽賀 友信 センター長

長岡市国際交流協会のセンター長をしております、羽賀と申します。よろしくお願ひします。

今、私に求められるものは、「新潟に求められる国際理解とは何か」ですが、実は昨夜、私、長岡市の方であるシンポジウムに出ました。それは渋沢栄一、福沢諭吉、大隈重信、この3人が明治という潮流の中でどういう位置を担い、あの激動の時代にどういう人材が必要なのか。何か国際理解に通じるものがあるなあ、と思わされたことがあります。実は福沢諭吉は海外に留学に行っております。それは渋沢栄一しかりですね。ところが大隈重信は出てないんですね。出てないけど何でも知っている。実はそれこそまさに国際理解ではないのか。

時代の閉塞感とよく言われるのですが、今、わたしたちは右肩上がりの社会から右肩下がりの社会の中で、世界と自分たちの関わりというのを見たときに、子供さんが非常に保守的になるんです。今、私は防災ということで、いろいろなところに関わりを持っているんですけども、私が一番ひしひしと感じるのは、一番の災害というのは無関心ではないかな、と思うんですね。これは豊かさの裏返しでもあります。

私たちが世界を見る時の目線というのは、2つの流れがあります。一つは先進国としての欧米です。もう一つは途上国としての、今進行過程にある国家です。私たちがどういう風子供たちにそれを伝えるべきなのかっていうときに、私はこの国際交流インストラクター事業というのは非常に大きな意味を持つと考えます。まず閉塞感の中で一番必要とされるのは視点の開発、ロジックの開発だと思っんです。今日は学生諸君もたくさんおられるんですが、多分このインストラクター事業に関わって、ご自身が一番変わったなあって自覚されているんじゃないかなあと思います。それは、自分が今まで当たり前だと思っっている日常が、実は当たり前ではない視点を獲得すると同時に、可

能性に変わる。そこが大きな意味を持つものではないかなと思っっております。

それから、勉強をするといっても、私はいろんなレベルがあると思っのですが、今、3つのレベルということが私の中では課題になっています。一つは知る力、それから考える力。でも、この国際理解は、実はその先の思う力を身につける手法ではないかなあと思います。世界の中に何が起きているか。目で見える、知識で見える、それと自分の思いがなければ見えない世界。

私は何十年か国際協力という仕事に関わってきていますが、そこでは語学の位置づけが非常に重要になります。これは当然、私たちがツールとして、コミュニケーションのベースとして、語学を外すことはできません。ただし、その彼方にある思いがきちんとなければ、何を伝え、何を理解するのかということが全く立ち上がってこないのではないかなあと思います。そういうものを通して考えると、新潟に求められる国際理解というものが、おぼろげに見えてくるのではないかなあと思います。特に、日本が今世界に出ていって、自分が世界の中の自分、世界の中の地域という見方を出来るのか、客観的に自分を見られるのか、見たときに何を自分が取り入れていったらいいのか。

よく、世界は3つの文化圏に分かれるといわれます。欧米の、1つは牧畜型。これも気象と地理条件から来ると言われていますが、冬に雨が降る。そうすると牧草と、1つは小麦文化っていうのが抱き合わせで牧畜文化がある。家畜を持つっていうのは常に財産が保全されるためには土地の確保、牧草の確保がいるから、領土というものに非常にこだわりを持つとも言われていますし、その牧草地への入会権の契約関係でロジックが非常に進化したとも言われています。

もう1つは、アルカイダが悪い1つの例と化してしまっているのですが、中東は遊牧文化だということですね。これはいわゆる属人主義であって、属地主義じゃないんですね。砂漠は何万平米持っいても、

砂っばらです。あそこにオアシスがある。そのオアシスを中心とした人間のつながり、絆というのが実は遊牧文化の基層をなしている。

そしてもう1つが、私達の置かれている状況、アジアモンスーンの穀倉地帯ですね。ここでは農業という1つの基盤が出来ている。農業の特色は何かというと、自分が与えられた土地という限定された中でエネルギーの集約を始めると、文化としてやはり勤勉だとか、内向きだとか。負の遺産としては同じものを求めるところがあると思います。ですから、日本のお子さんに、私がよく海外に同行して連れていった時、質問されるとびっくりされることは、日本の子は目を見て答えないんですね。横の子をこうやって「あなたはどう思う?」と聞いてから答える。すると、皮肉屋さんは「あなたの脳みそは隣りに貸してあるの?」と、そういうことをおっしゃる方はいらっしやいますね。私たちはやっぱりきちっと人と向き合う、それから多様性と向き合う、そういうことが大きな課題ではないかと思います。私たち日本の文化って均質化しやすい。それから違ったものを非常に怖がる、嫌うという、社会的に何かこう、いじめの構造を持ってしまっている。いわゆる減点制社会ではないか。多様性の社会というのは逆にいえば、加点制の社会。これをやり、あれをやり、こう考えるから信頼に足る、というところから、自分がその人に何かをしてあげる。日本の場合は黙って人の意見にうなずいていると、実は花丸がもらえて、人と違うことを言うことで減点されて、ついにはどこかへ放り出される。この日本の社会と世界の社会とをすり合わせ、比較できる人材っていうのは、非常に大きなポイントではないかと思います。

その時に、私は国際理解というものは、世界にはいろいろな価値観がある、いろいろな人がいる、人間というものはアイデンティティを持っている、日本という社会も実際は本当に日本人なのかという問題がたくさん出てきている。これは流動人口というテーマで出てきていることなのですが、移民という言葉がありますよね。例えば宇多

田ヒカルさんは日本の国籍を持っていますが、彼女の文化的アイデンティティというのはどこにあるのかということややっぱりアメリカですよ。そうすると、こういう帰国子女と呼ばれる人たちはどういうふうに扱ったらいいのか。それから今、日本では国際結婚が進行しています。20組に1組、東京では10組に1組が国際結婚ですからそういう方が、片方が日本の親で、片方が外国籍の方だとしたときに、外国籍の方は一つの民族だけのアイデンティティを背負っているわけじゃないのです。広いところでは10カ国くらい背負っている方もおられて、おじいさんとおばあさんが全くルーツの違う人が出会って、ということで考えると、単に人種とかいうことではなくて、人としての価値観が非常に大事である。ただし、集団になった時の社会的な価値観ということが非常にこれからは大事な見方の1つになるのかなと思います。

もうひとつ、日本のお子さんに一番欠けている視点は、社会性ということではないかと思います。過去10年、アメリカでもって立ち上がった財団の中で、これは助成財団なんですけど、助成というのは助ける方の助成です。ビル・ゲイツさんもそうですが、なんと3000の財団が立ち上がったのです。日本はどうかというと、たった21しか立ち上がらない。風土が違うといえばそれだけのことなのですが、実は社会貢献という目線が違うのです。成功した人は、自分の財団を立ち上げて社会貢献をするという基礎文化を持っているところと、自分のお金を投入してそれを自分のために使うという概念では、社会に貢献できるという点では非常に大きな違いを生むのではないかと思います。

そうすると私たちが子どもさんになぜ国際理解教育をするのか。1つは自分の目線を変えて、自分の当たり前をもう一度息を吹き込んで、違う視点からおさらいをしてみるという目線が出来る。それから、違うということが見えた瞬間に自分の可能性がいろんな形で伸びていく。

現代GPシンポジウム「国際理解教育におけるワークショップの導入」の記録

平成21年度事業報告

私は実は大学を出て最初に勤めたのがインドの会社だったので、あそこで仰天したのはやっぱり議論の激しさでした。私は当時、今みたいに皆さんの前でこうやってしゃべるような力はありませんでした。非常に奥手というか、信じられないくらい内気でした。それで、初めて出て行ったときに、なぜインド人はこんなに激しいんだと思って、そのショックでちょっとへこんだ時期がありました。その次に実は私はユダヤ人とアラブ人の世界に4年間いました。ユダヤ人というのはお聞きのとおり、2人集まったら政党が3つ出来るという例えがあるくらい激しく議論します。私が行った瞬間に5人くらいと話をしました。私は一生懸命、日本のマナーでもってお話を聞いていたんです。うなずいて。そうしたら、その5人がいきなり怒りだしました。なぜ怒っているのか私には全然わからなかったのですが、「お前は失礼なやつだ」と言われたのです。「なぜ？おれは日本のマナーを最高にいいところで表現しているのに」と反論したのですが、「お前ね、人の話を聞くと、質問をして反論することだ。うなずくということは聞き流すことだ」と言われた時、「はー、こういう見方が世の中にあるのか。なるほど、弁証的な考え方をするとこういうことだ」と思いました。そこで自分の人生がぐっと音を立てて変わったんです。違う意見の人がそこに入るということ、それを尊重することが、実は自分が力をつける手段にもなる。ですから、5人の違う意見を聞いた瞬間に、5倍の能力を自分がとりこんだということですよ。こういう仲が、今あるヨーロッパ系の人たち。それから、昨年私は国連の会議で北京に行っていたのですが、私は持ち時間20分でちゃんと20分ピタッと終わったんです。しかしインドの方は、40分たってベルを鳴らしても知らない顔をしていました。それで120分。短い人でも30分はしゃべりましたね。この前、鳩山さんが首相に就任されてすぐに国連の方で演説されました。彼の前はリビアのカダフィだったのですが、なんと1時間半。カストロさんはギネスブックに載るといって、4時間半しゃべっている。こういう人に私は聞きました。なぜそんなにしゃべるのか、と言ったら、「理解されようとは思っていない、と誤解されたくない。納得いくところまでしゃべりたい」。ああ、こういう価値観が世界にはあるのか。それがわかっていけば、世界に出て行っても、自分がへこむことはないのですが、知らないで行くと、「なんなんだ、この世の中は」というところでつまづいてしまうと思います。ですから、国際理解教育というのは、ある種の学校教育の中のシミュレーショ

ンである。要するに、思う力、考える力、知る力をトータルで鍛えていくことではないかなと思っています。

それから、後々このインストラクタープログラムの方は、お話をさせて頂くと思うのですが、こういう形で学生さんが関わるというのは、私は非常にいいと思います。社会が見えます。私は、大学生というのは本来国費で育てるべきだと思っています。高校まではいい、でも大学生というのは、社会を担うようになる自覚を持った人を育成していく、そういう教育機関ではないかなと思います。

ですから、社会に対して自分はどうの貢献ができるか、まさにこれから皆さんはこの学校を巣立って、出て行ったとき、社会人になるわけです。是非覚えてほしいことが、「衣食たりて社会貢献」ということです。私は親父に言われたんですけど、なるほどと思うのです。私たちはいま社会によって育てられています。でもこのインフラがもしなければ、本当に私たちは社会で通用できるのか。

実は日本のすさまじさというのは明治以降、というよりもそれ以前の藩校教育、寺子屋教育も含めた、教育という人材の開発機関があったということですね。そこに日本人は重きを置いて、日本の文化として、教育という風土を作ってきました。しかし、私も外交官の方とキャリアの方と一緒に仕事をしましたが、国際会議でお話をされる姿を見ると、やはりスリーエス(3S)。つまり、スマイル(smile)、サイレント(silent)、スリープ(sleep)。こんなのはちょっと残念ですよ。

それでやっぱり今、鳩山首相はああやって英語を喋られますけれども、最低限私たちが世界につながるのには、国際語としての英語を身につけなければいけない。私は英語教育にも不満があるのですが、私たちは英語という国語をやっているわけじゃないんです。今、日本に来られている留学生の方も最初に習うのは、国語ではなくて国際語としての日本語のほうです。文化を理解して、言葉も掘り下げられたときに、私は国語になってくると思うのですが、そういうことも実は国際理解の中の位置づけで、自分たちの言語の定義付けもやっていかなければならないのではないかと。防災の中で、私はずっと多言語、多言語と言われてきたことに疑問を持ちました。実際に、「やさしい日本語」というものを防災で使ったところ、これは多文化という枠が広がったのです。1つは、私は外国籍の方だけに意識を持っていたのですが、誰が一番よくそのラジオを聞かれたかということお年寄りだったのです。もう1つは、子供でも分かる。「やさしい」というの

基調講演「新潟に求められる国際理解とは何か」

は、1つはゆっくりしゃべるといことがあります。災害時に、アナウンサーはだんだんハイになりますから早口になって、私でも聞き取れないぐらいになるのですが、ゆっくりしゃべって、伝えようという意識が働くだけで、日本語はかなり明確になります。

でも、もっとすごいのは、文化がわからない人。例えば私たちは「地震」というと、震度がポンと、だいたい日本人なら1か2ずれくらいで予測がつかますね。物が落ちたら4だ、家が崩れたら6だというくらいは分かるわけです。1や2なら知らん顔していいと。ところが、私はブラジルの方が来られて、「羽賀さん、世界が壊れた」と言われて電話をもらいました。彼女は初めて体験したこの世界は、自分のキリスト教の世界観で見たんですね。そのときに、終末だと思った。また、フィリピンの方から電話が来ました。「羽賀さん、今クーデターが起きました」、「え、どこで?」、「あなたの周りでもなかった?」、と言われて、あの崩れたのは爆撃の音だと思ったんですね。それで自衛隊が出たので、「ほら軍人がいる。でもどうして銃を持ってないの?」っていう笑い話のようなことがいっぱいあったわけですね。

災害の現場で私が一番困ったのは、実は文化の物差しがいくつもある人は国際人なのですが、自分の物差ししかない人は非常に衝突が多かったです。日本の場合もそうです。中国の方、実は私のところには相談員というのがありまして、日ごろ皆さんの問題に関して相談を受ける役割なのですが、災害が起きて、さあ助けにいくぞと言ったら、いきなりその彼女が、「羽賀さん、中国人はほうっておけばいいのに」と言われて、「え! どうして?」と聞いたら、実は中国には昔からことわざがあります。まず官は信用しない。上に政策があれば下に対策があると言いましたが、だいたい2000年来、事が起きたら自分以外信用するな、という文化がある。それはどういうことかという、自分一人で自立していくということなのです。

それから避難所に行くとか何が起きるかという、中国人は、お殿様のように毛布をひとり占めして、おにぎりをその下にこっそり入れて、これに対して日本人は目を吊り上げて、「中国人は!」とやっているんです。触発状態です。私が呼ばれて行って、「違うんだよ! 日本の皆さん聞いてください!」と。まさに生きた国際理解教育を、そこで私はやったと思います。「中国の方はこういう思いでこういうことをやっています」、「中国の皆さん聞いてください! 日本には、みんなでこういときには分かち合うという文化があるから、心配しなくてもみんな

が均等に分けてあなたにも分けてくれるから、ひとり占めしないでください」と。それで、そこで一緒にボランティアをしたら、和解できたんです。でも、これって実は学校教育の中でそういう素地があれば、現場でできたことなのですが、うちのスタッフ含めてそういうことに思い至ったのは、残念なこと僕1人だけなんです。どう解決したらいいかわからない、ということは相手の価値観がわからない、文化がわからない。

そういう意味で私は、新潟は特に災害がありますから、これから外国の方もたくさん来られます。今1万数千人がこの新潟県内におられるんですね。長岡だけでも2500人です。なんと国籍にすると50いくつもあるんですね。そうすると、それだけ価値観が違う。ましてやそこに個人の価値観が入ってくるとしたならば、やはり学校教育の基本の中にこれが入る。それから早期教育として英語がとり入れられたとき、単に私たちはその英語をツールとしてやっても、世界ではソーシャルスキルがついてこなければそれを使いこなせないのではないか。ですから、一つのマナーとしても、自分のありようということと、相手を尊重して人間としてみる、という視点が一番大事なのではないかなと思っています。

是非皆さんにお伝えしたいのは、この「思う」という力。知る力、考える力の先の「思う」という力。それから無関心という壁を壊さない限り、私たちは何も認識が出来ないということです。世界が広がる、世界がつまらないというのは、実は自分の視野ではないのかと思います。自分が心を動かした瞬間にだけ、私たちはそこにモノが見える、人が見えるわけで、それ以外は風景と呼ぶのではないか。ですから、その感性を鍛える。感じて、考えて、動くところまで、実は私はこの国際理解というのが、社会に出た時にどう役に立つかということまで鍛えてほしいと思います。ですから、単なる知識ということではなくて、私は、これは知的基礎体力をつけるということだと思います。それが、世界でも難題にぶつかる、壁にぶつかったとき、自分でこじ開けて答えを出す。そういう力に変わるという希望を持って、実は考えております。

非常に短い話だったのですが、これをもって私の話とさせていただきます。ご静聴感謝致します。

国際交流インストラクター事業の概要と成果

新潟国際情報大学
研究推進員
宮下 豊

新潟国際情報大学が、新潟県国際交流協会様をはじめとする県内の教育関係団体ならびに国際交流団体などと密接な連携の下でこれまで実施してきた、国際交流インストラクター事業について、その概要と成果を説明致します。

まずは、このインストラクター事業の概要です。

国際交流インストラクター事業とは、大学内での一定の研修を修了して、(財)新潟県国際交流協会より〈国際交流インストラクター〉として認証された大学生を、派遣要請のあった新潟県内の小中学校・高校に派遣して、国際理解教育をワークショップ形式で行う事業です。

新潟国際情報大学は、平成17年4月から平成19年9月まで、新潟県国際交流協会の委託事業として本事業を実施しました。なお、本事業には、平成19年度より敬和学園大学、平成20年度より県立新潟女子短期大学も、国際交流協会の委託事業として参加しています。

こうした新潟国際情報大学の取組は評価されまして、平成19年に、文部科学省の大学改革推進等補助金の1つ「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(略称：現代GP)に採択され、同年10月より現代GP事業として実施されています。

この現代GPの補助は今年度で終了となります。以下では、これまで現代GPの補助を受けたことにより、どのような成果があったかを3点に絞って説明します。

第1に、研修の充実化があげられます。この研修は、平成20年度より、正規の授業科目「国際交流インストラクター演習」として実施されていますが、参考資料①にありますように、そこに、多数の学外講師を招聘することができました。また、敬和学園大学および県立新潟女子短期大学と合同で、合宿研修を実施することが可能となりました。なお、昨年度は東京の独立行政法人・国際協力機構(JICA)に2泊3日の日程で実施しました。

第2に、学生への教育効果が挙げられます。新潟国際情報大学で

は、本事業の専任スタッフを採用することにより、意欲ある多数の学生を〈国際交流インストラクター〉として養成することができました。また多数の学生が参加したことによって、国際理解講座として実施するテーマが増えることになりました。なお、各年度のインストラクター数と、実施した国際理解講座の内容につきましては、参考資料の②をご覧ください。なお、〈国際交流インストラクター〉が取り扱うテーマは、学生自身が主体的に発見するとともに、関係教員の指導の下、学生自身が内容を策定します。

第3に、広報活動を充実させることにより、県内の多数の学校から派遣要請を受けるとともに、実際に派遣することが可能となりました。なお、現代GP事業採択前および平成22年2月実施予定分を含めて、〈国際交流インストラクター〉は、県内の20市町村、61校、1公民館に派遣され、受講した児童・生徒数は、5,470人を超える予定です。このデータの内訳につきましては、参考資料の③と④をご覧ください。

なお、この参考資料③にありますように、派遣回数へのピークは平成19年度であり、それ以後、減少傾向にあります。この理由につきましては、後で行われるパネルディスカッションのなかで検討されることになると思います。

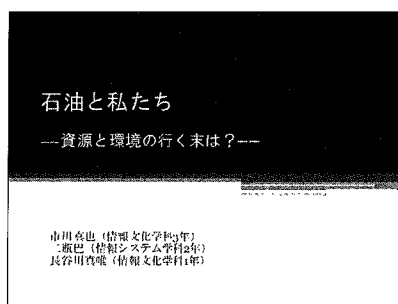
ところで、国際交流インストラクターによる国際理解講座は、学校で実施して、それで全て終了というわけではなく、フィードバックを行って、次年度における取組の改善につなげてきました。そのフィードバックの1つが、国際理解講座の終了後に、担当教員および受講した児童・生徒に記入して頂くアンケートです。このアンケートの内容につきましては、参考資料⑤と⑥をご覧ください。また、この他に、毎年3月に、評価委員会という会合を開催し、学校教員をはじめとする学外有識者に各年度の取組の評価をお願いしてきました。このアンケートの結果や評価委員会での指摘をふまえて、次年度に取組の改善を試み

できました。

具体的には、平成20年度には、「進行シート」という国際理解講座の教案のフォームを、従来以上に精緻化するとともに、〈国際交流インストラクター〉と派遣先学校教員の事前打ち合わせを制度化しました。また、国際理解講座を行った学生が、その内容を事後評価する「評価シート」を新たに導入した。平成21年度には、各グループを担当する専任アドバイザー制度を導入し、これまで以上に学生に対するきめ細かな指導体制を確立しました。

国際交流インストラクターの学生による国際理解講座の紹介

司会者：続きまして、国際交流インストラクターの学生による国際理解講座を3つご紹介致します。まず、「石油と私たち——資源と環境の行く末は？」からです。

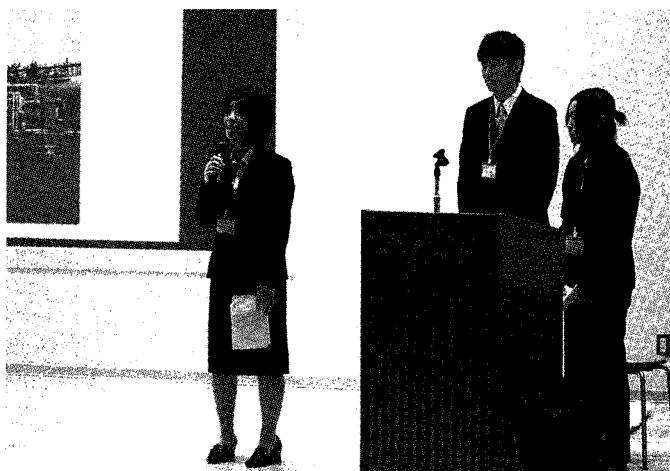


「石油と私たち」を担当する二瓶巴（情報システム学科2年）、長谷川真唯（情報文化学科1年）、市川真也（情報文化学科3年）です。よろしくお祈いします。

（二瓶）「世界の現実」を学ぶには、いろいろな素材がありますが、

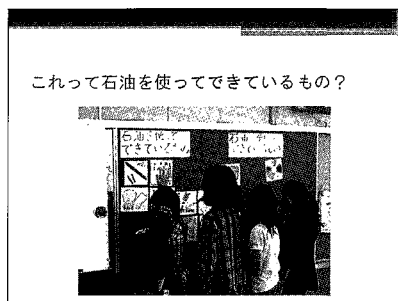
私たちは「地球環境問題」を取り上げて、世界の現実を知ってもらうことを目的として、ワークショップを行っています。その切り口として私たちは、「石油」を取り上げて、有限資源である石油をめぐる世界の現状を知ってもらい、今私たちに出来ることは何か、何をしなければいけないか、を考えてもらうことを軸にして、ワークショップを組み立てています。

導入では、聞き手である参加者に、ワークショップの内容を確認してもらうために、「ワークショップのタイトルクイズ」を行います。その際に、参加者に石油への興味を持ってもらうように、こちらにあるような原油の実物を見せることもしています。その後、参加者に石油についての基礎的な知識を得ってもらうために、「石油についてのクイズ」を3択形式で出題します。クイズの内容に、私たちが住む地域の情報も取り入れることで、石油との繋がりをより身近に考えてもらう工夫もしています。例えば、「日本で1番多く石油が取れる場所はどこ?→答えは新潟県」といったようなクイズを出題しています。

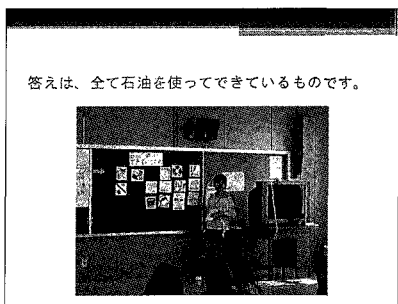


平成21年度事業報告

次に、私たちが石油とどのような関係があるか、日常生活でどのようなつながりがあるか、を知ってもらうため、「これってどっち?ゲーム」を行います。このゲームはグループごとに、私たちが用意した日用品を、「石油を使ってできているもの」と「石油を使ってできていないもの」に分けてもらうゲームです。



そのときに使用する日用品は、例を挙げると、消しゴム、ペットボトル、絵の具、フリース、歯ブラシ等があります。私たちが用意した日用品は全て石油を使って出来ているものであることを説明することで、身の回りは石油製品であふれており、私たちの生活と石油は深い関係があるということを皆さんに印象づけているようにしています。



(長谷川) さらに私たちは、石油がこのような日用品に姿を変えるまでの過程を、まず自分たちが知るため、新潟県内にある石油精製工場に見学に行きました。すでに本やインターネットで情報は得ていましたが、実際にヘルメットを被って施設を見たり、器具を触ってみたり、職員の方から話をうかがったりすることで、より実感が得られ、知識が深まりました。このようにまずワークショップを行う側が、五感を使って学ぶことによって、参加者により自信をもって伝えることができます。



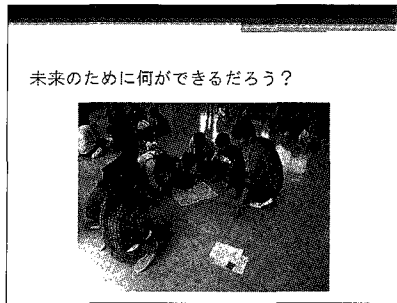
これらの導入を踏まえ、展開では「衝撃の事実! 20XX年石油がなくなる」ことを告げて、私たちの生活にもはや欠かせなくなっている石油がなくなったら、私たちの生活はどうなるのかを想像してもらいます。



こちらが実際にワークショップの参加者に想像してもらったものです(略)

さらに日本人が使用する石油の99%以上が輸入に依存しているという事実から、石油がなくなったら、世界がどのように変わるのかも、各グループで考えてもらいます。将来起こり得る事例として、①石油を燃料としている船や飛行機が動かなくなり、食料自給率が低い日本では食物が不足する、②同じく船や飛行機が動かなくなるため、海外旅行ができなくなる、③少ない石油をめぐる戦争が勃発する、などの可能性を、ショート劇を用いて、わかりやすく提示します。さらにオイルショック等、過去に実際起こった事例も紹介することによって、有限資源である石油をめぐる世界の現状を深く伝えることができます。

国際交流インストラクター事業の概要と成果

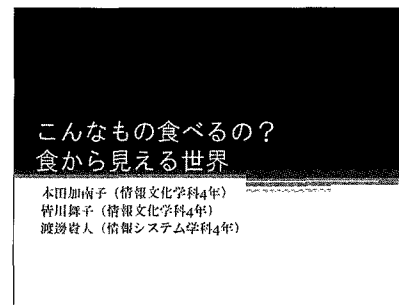


(市川) さらに、まとめでは、石油がなくなるという事態の深刻さを強調しつつ、生徒たちに、自分に何が出来るのか、何をしなければならぬか、を考えてもらいます。考えてもらうための材料として、日本を含め世界が、実際に取り組んでいる省エネルギーや、代替エネルギーへの試みを、視覚資料を使いながら紹介します。例えば、私たちはドイツの「フィフティー・フィフティー」という取り組みを紹介しています。これはドイツの一部の小・中学校で行われており、電気や水の無駄遣いをやめて、実際に節約されたお金のうちの半分を、実施した小学校、中学校に還元するといったものです。還元されたお金は、教材やサッカーボールなどの遊具に使う費用として用いられます。このように、実際に行われている取り組みを知ってもらった上で、自分は何が出来るのか、何をしなければならぬのかということ、を、生徒自身に考えてもらいます。

これは実際ワークショップで使ったものですが、こちらから答えを提示したのではなく、生徒自身で考えてもらったことです。実際に教室でこれをやる前は、もしかしたらそんなに答えは出ないんじゃないかと、私たちは思っていました。嬉しいことに、この大洋紙がいっぱいになるくらい考えてもらいました。この下に地球の絵が書いてあるのですが地球の絵を埋めるくらいに考えてもらって、中には「人口石油を開発」するとか、あと「車乗らないデーをつくる」といったもので、あと、「人間がいるからこんなことが起こるんだ」という、けっこう過激な意見もありました。これを通して子どもたちが、自分が思っている以上に環境について考えているんだということが分かりましたし、あと、自分たちもそれを考えてもらう上で、手助けできたんじゃないのかなとも思っております。

これで「石油とわたしたち」の紹介を終わりたいと思います。

司会者：続きまして、「こんなものを食べるの——食からみる世界」の紹介です。



「食から見る世界」を担当する、本田可南子 (情報文化学科4年)、皆川舞子 (情報文化学科4年)、渡邊貴人 (情報システム学科4年) です。よろしくお願ひします。

(本田) 「食から見る世界」は異文化理解をテーマにしたワークショップです。異文化理解の目的は、自分とは異なる文化を持つ人、自分以外の人に対する配慮を育てることを目的とします。その異文化理解を促すには、いろいろなアプローチがありますが、ここでは1つのアプローチとして、児童・生徒が身近に感じる「食」を取り上げます。



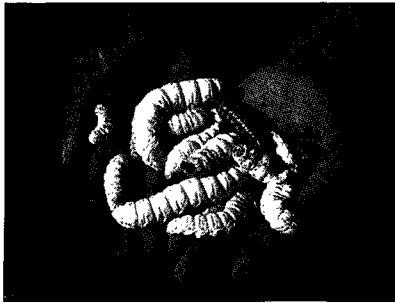
このワークショップで重視するポイントは、2点あります。第一に、「自分ではあり得ない食べ物が、相手にとってみれば貴重な場合もあるのだということ、そして自分たちの好きな食べ物が相手にとっては奇妙な場合もあるのだということを感じ取る」、ことです。第二に、「食文化はそれぞれの地域の特色によって、つくられたものだということを知る」、ということです。

ワークショップの流れと詳細は、資料に記載しましたのでそちらをご覧ください。本日は、資料の5ページ目の「2. 転校生から学ぶ異

平成21年度事業報告

文化」と、6ページ目の「3.好きな食べ物連想ゲーム」の重要な点にしぼって、実演を交えて簡単に説明をします。

(皆川) ワークショップの中では、劇のなかで、転校生の「タムタム」が自国オーストラリアに住むアボリジニーの生活について説明していく中で、タムタムが普段食べている食べ物の一つである幼虫を日本の児童・生徒に紹介するという流れです。ここで、5ページ目の幼虫の写真をご覧ください。



ここで私たちが児童・生徒に、「みなさんこの食べ物を食べてみたいですか?」、と訊きます。このようにして、児童・生徒が他の食文化の写真を見たときに、それをどのように感じたのか?を問いかけます。そしてなぜ、そのように感じたのか?と問いかけをすることで児童・生徒自身で、各々の考えを認識することができます。次に、児童・生徒たちが好きな食べ物を自由に挙げてもらい、その中には他国、日本以外であまり食べられていないものがあるといことを説明します。ここでは、具体例としてタコを挙げて、あまりタコを食べる文化のない国から、タコを食べる文化を持つ私たちがどのように感じとられているのかを客観的に見ていきます。



自分の食文化を認識するとともに、私たちが食べているものが否定される場合もあることを見ていきます。加えて、「それでも私たちがそのような食べ物を食べているのはなぜ?」という問いかけをして、グループワークを考えていきます。この問いの目的は、児童・生徒に食文化はそれぞれの国や地域の特徴によってつくられたものであることを認識してもらうことです。補足として日本でも、例えば長野県のある地域では蜂の子やざざ虫、イナゴなどの虫が貴重なタンパク源として食べられているということもワークショップの中で説明していきます。まだ実際に児童・生徒に試食してもらう時間を設けています。

そしてふりかえりとして、「タムタムが幼虫を食べているのはなぜ?」という問いかけから改めて他国の文化について考えていきます。

この問いに対して求めている答えは、「その地域の文化だから」、「おいしいと知っているから」、「生きていくための知恵だから」、などです。最後にワークショップのまとめで、もう一度5ページと6ページの写真を見てもらいます。それぞれの写真を見て、日常生活で幼虫を食料としているアボリジニーの人々にとっては、幼虫は食料として受け入れられていますが、日本の多くの人はその見た目からも食料としては受け入れられません。

一方タコの場合、タコを多く食べている日本では、タコを食べ物としてすぐに受け入れられますが、ある地域、特に欧米では、映画作品の「リトルマーメイド」や「パイレーツオブカリビアン」などで、タコのキャラクターが悪役として登場しているように「悪魔の魚」と呼ばれ、食べ物としてあまり受け入れられていません。こちらのキャラクターのものが実際にワークショップのなかで使ったものです。



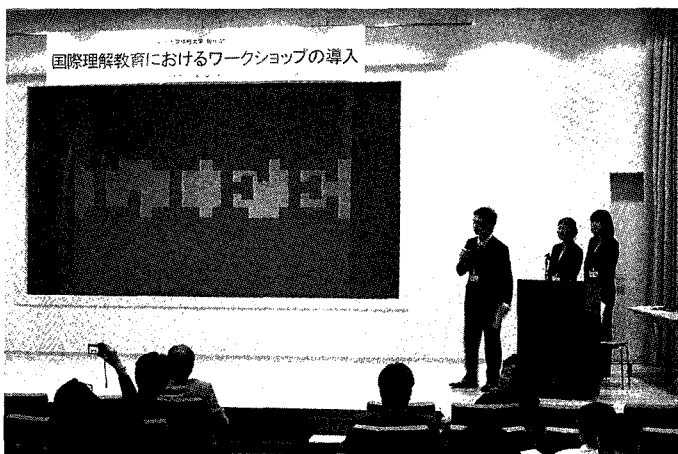
次に、お遊びになりますがモノの見方は一通りではないということを経験し、児童・生徒により分かりやすく体感してもらうために、だまし絵を使った方法を紹介いたします。

国際交流インストラクター事業の概要と成果



(渡辺) 皆さん、こちらを注目してください。見えにくい方がいらっしやったら、お手元の資料の6ページ目をご覧ください。これは、みなさんには何に見えるでしょうか。ちょっと考えてみてください。こちら、これは何か塊が並んでいるように見える方もいると思いますが、少し見方を変えてみると「LIFE」の文字が見えてきませんか?上と下の青い部分を、こう手で隠してみると分かりやすくなります。お手元の資料でもいいのですが、手でこの青い部分を隠して見ると、こう真ん中が白を背景として青を文字としてみると「LIFE」という文字が浮かびあがってきます。

一つの絵でも、見方は一通りではありません。これは、世界のことがらにも共通することです。異文化を考える上で非常に大事なものは自分の価値観、見え方に偏りがあることを知ることだと考えます。写真は文化、騙し絵はトリックということで状況は異なりますが、言葉

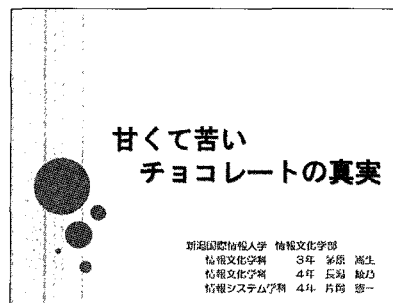


で説明するよりは、単純化した騙し絵を使って物の見方の違いを体験してもらったほうが、より分かりやすく伝えることができます。また、気づきを与えることができるので、あえて騙し絵を使用しました。この騙し絵はもちろん食にも通じますが、異文化理解で使われている手段です。

「食」ひとつをとってみても、その地域の特色から、異なった食料や調理方法が存在します。異文化を見る時、それを否定したり、自分の持っている文化を基準として相手を判断したりするのではなく、色々な考え方や見方が存在してその背景には文化があるということ、そして相互理解が必要だということを、児童・生徒に自ずと気づいてもらいます。それが異文化理解をする一歩になるはずですが。

以上で、「こんなものを食べるの——食からみる世界」の発表を終わります。

司会者:最後に、「甘くて苦いチョコレートの真実」の紹介です。



「甘くて苦いチョコレートの真実」を担当する、茅原崇生(情報文化学科3年)、長瀬綾乃(情報文化学科4年)、片岡憲一(情報システム学科4年)です。よろしくお願ひします。

(茅原) 私たちのワークショップ「甘くて苦いチョコレートの真実」の目的は、チョコレートという身近なお菓子を糸口にして、「世界の不平等」という大きな問題を学ぶことです。特に、チョコレートの原材料となるカカオ豆を採集するのが、ガーナという途上国の子供たちであり、彼らが学校にも行かせてもらえず、安い賃金で働かされているという事実、つまり児童労働というものに重点を置いています。そして、私たちが安いチョコレートを購入することによって、この搾取の構造を支えていることに気付かせるとともに、解決策の一つとしてフェ

平成21年度事業報告

アトレードという考え方を教えます。なお、私たちのワークショップのタイトルである「甘くて苦いチョコレートの真実」には、甘くておいしいチョコレートには、ビターな現実が隠されているという意味が込められています。

ワークショップの目的

1. チョコレートを通して「世界の不平等」を知ってもらう
2. 自分たちも搾取の構造を支えているかもしれないということに気づいてもらう
3. フェアトレードのメリット、デメリットの両方を理解してもらうことで、多様な選択を促す

まず、導入では、アイスブレイキングで緊張をほぐした後、カカオの概要について、クイズを通して、産地や効用、歴史について学んでいきます。

アイスブレイキング～カカオクイズ



最初にアイスブレイキングを行い参加者との親睦を深める
その後、導入部分であるカカオクイズを行う

その後、みんなはどんなチョコレートをよく買うか、と質問します。ここでは、いつも私たちが食べているチョコレート、つまり安いチョコレートと、高いチョコレートという2つのチョコレートから選択してもらいます。ちなみに、今までの派遣先では、8対2くらいの割合で、いつものチョコレート、つまり安いチョコレートの方を選択する生徒が多かったです。

次に、日本が最も多くカカオを輸入しているガーナという国を取り上げて、カカオ畑から私たちのところまでチョコレートがやってくるまでの現状、つまりガーナで行われている不当な取引や、生徒たちと同じくらいの年齢の子どもも、カカオの生産に関わっている現状を、劇

を通して知ってもらいます。この際、生徒たちにもカカオの実を採る「コフィ」という男の子の手伝いとして働くことで、疑似体験をしてもらいます。こちらの左にある木は、百均ショップで売られている材料で作った木ですが、そこにマジックテープで付いているカカオの実を取るといった疑似体験をしてもらいます。そして、その他の生徒たちは、日本でチョコを待っている子供たちになってもらいます。このようにチョコレートを欲しがる子どものキーパーソンとして、「タロウ」という子どももいます。

ロールプレイ



ロールプレイを通して子どもたちに
ガーナの現状を疑似体験してもらう

劇の最後ではガーナで取られたカカオが、日本に来てチョコレートになって完成するシーンを演出します。そこでは、日本で待っている子供たちには、チョコレートを渡しますが、コフィたちにはチョコレートを渡しません。そこで、劇のナレーションが、「ちょっと待って!コフィたちは、このままでいいの?」と聞きます。というのは、日本の子供



国際交流インストラクター事業の概要と成果

たちの「おいしい」という思いと、コフィたちの「くやしい、つらい」という思いの違いに気付いてもらうためです。この思いの差を解決するのが、緑色のチョコレート、つまりフェアトレードのチョコレートなのだということを伝えます。しかし、ここでは、フェアトレードチョコレートということは言わずに、「後々明らかになるからね」とだけ伝えておきます。

その後は、ガーナの首都アクラのカカオ農園で働かされている子供たちを撮影したドキュメンタリービデオを見てもらいます。普段見ることの出来ない現状を視覚的に見てもらいます。

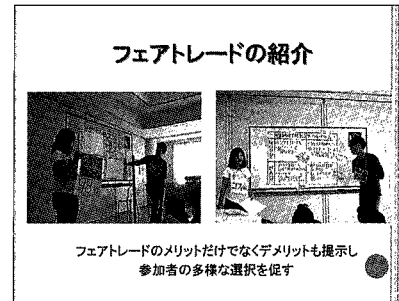


ビデオを見終わってから、グループワークを行います。内容は、劇やビデオを見てどう感じたか、何か思ったことはなかったか、何か変だなあと感じたことはなかったか、をテーマにして、グループ内で話しあってもらいます。次に劇で自分たちが体験した労働、児童労働が、現実に今でも存在すること、つまり児童労働の実情を説明します。



次に先ほど選択してもらったチョコレートが登場します。もし、みんながこっちの緑色のチョコレートを選んだらどうなるんだろうということを紹介します。実はもう1つのチョコレートはフェアトレード、つ

まり「公正な取引」という理念の下で取引されているということを伝えます。これを詳しく説明するとともに、生徒たちに、問題は、今のよう、ガーナにおける児童労働の現実に目を閉ざして、安いチョコレートを買いつけるか、あるいは、児童労働をなくすために、高いチョコを買うか、の選択であることを理解してもらいます。

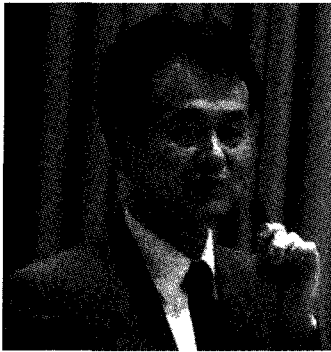


最後に、もう一度生徒たちに、チョコレートを選択してもらいます。そして、その理由を紙に書いてもらいます。もちろん、やっぱり安いチョコレートのほうがいいという生徒もいます。しかし、最初の選択では、いつものチョコだったけど、お小遣いが1000円アップしたら、フェアトレードのチョコレートを買うと言ってくれる生徒たちもいました。この変化は、これからの世界を担う子どもたちにとってはとても大切なことではないかなあと感じました。生徒たちが、この先、チョコレートをお店で買うとき、今までみたいに何気なく買うのではなく、このチョコレートは誰が作ったのかなあなど、チョコレートの裏に広がるストーリーを考えながら買って欲しいという願いを込めて、このワークショップは終わります。あえて全てをまとめあげたりはせず、自分の選択で、世界の構造が変わるかもしれないと気づかせることで、このワークショップを終わります。

これで私たちの「甘くて苦いチョコレートの真実」チームの発表を終わりたいと思います。

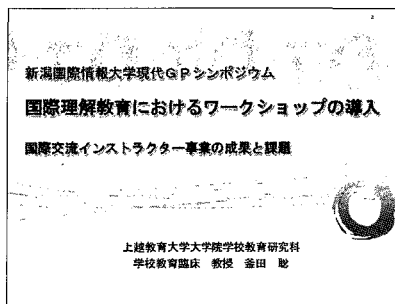
平成21年度事業報告

講 評



上越教育大学大学院学校教育研究科
釜田 聡 教授

只今紹介にあずかりました、上越教育大学の釜田聡と申します。
よろしくお祈りします。



まず、最初に、皆様に御礼を述べさせていただきます。平成17年
でしょうか、この事業が立ち上がり、平成19年のGP採択、それか
ら本日のシンポジウム迎えるにあたりまして、機会がある度に私に
お声をかけていただき、ありがとうございました。本事業が、毎年、
進化していく様子を学ぶことができ、大変勉強になっています。

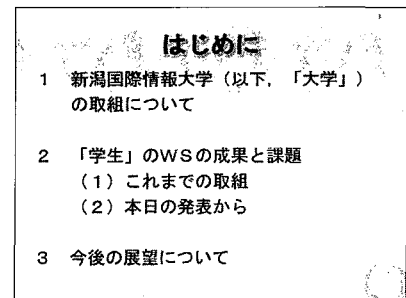
そして、本日、このようなシンポジウムを開催するまでにご尽力さ
れた新潟国際情報大学の教職員の皆さん、本当におめでとうござい
ました。

先ほど学生の生き生きとした発表の姿を見まして、本当に実りある
事業に育てられたものと再認識いたしました。本日は、私が本事
業の講評をすることになっていますが、とても私が講評できるレベ
ルを超えた事業になったと感じています。本日は、私の感想というこ
とでお聞きいただければと思います。

私は、上越教育大学において、教師教育といって学部生1年生か
ら4年生までに、どんなふう段階を追って成長していくかを実証的
にとらえることを、研究対象としております。もう一つは国際理解教育、
多文化共生教育ということで、私自身の専門ということで取り組んで

いるところです。

実は昨夜、ソウルにいました。何をしていたかという、中国と韓
国と日本の研究者、それから学校現場の先生方と、先ほどの学生の
発表と同じようなことをしていました。具体的には、小学校、中学校、
高校、それから大学で使う教材、それから学習指導案の検討です。
本当にこれが3カ国の共通教材として可能なかどうか、もしかした
ら誤解を生み出すのではないかと、ということで、侃々諤々の話しあい
をしてきました。私とそのコーディネートをしていた関係で、私が提
案書を持っていったのですが、中国と韓国の方々から、「それは困る、
こんな教材では中国の偏見が日本に広がる」、とか、韓国の方は、「こ
れはフェアじゃない」とか、いろんなことで一つの教材を作るだけ
でも大変だということも私も実感しております。先ほどの学生の皆さん
の発表、1つの教材だとは思いますが、そこに至るまでにたくさん
の時間をかけられたことと思います。それを思うと本当にここまで素
晴らしい活動をしてきたのだな、ということを感じてお祈りしてい
たと思います。



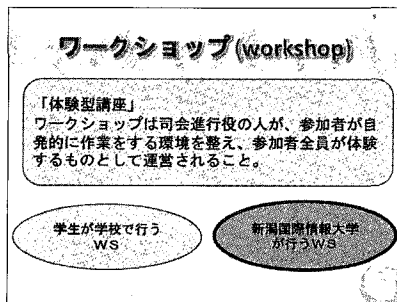
本日の講評ですが、次のように進める予定です。

1つ目は、新潟国際情報大学さんの取り組みについて、大学の取
り組みについて少し感想を述べさせていただきます。

2つ目は、今日の発表もありましたけど、学生の皆さんのワークショップの成果と課題。本日取りまとめたものもあったわけですが、私が見た限り、あるいは実際ワークショップを見た限りということでご理解いただければと思います。これまでの取り組みと、それから今日の先ほどのステージ上での発表、これについて少し感想を述べたいと思います。

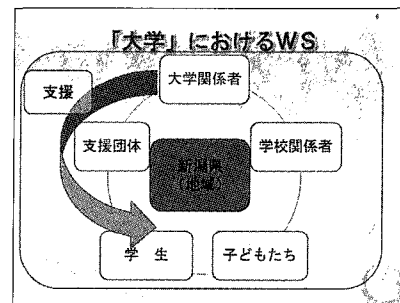
3つ目は、余計な事かと思いますが、今後の発展ということで、今後の予想と言いますか、皆さんの活躍の場ってこんなふうになるんじゃないかな、ということで少し話を紹介したいと思います。

それでは、大学の取り組みということで見ていただけたらと思います。スクリーンに映し出された項目を中心に話を進めます。



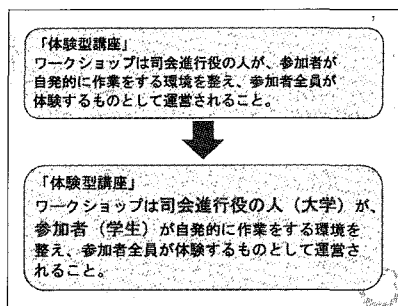
ワークショップについては、皆さんの方がよくご存知かと思いますが、最初に確認しておきたいと思います。ワークショップは、ファシリテーター、いわゆる司会進行役が、参加者が自発的に作業できるようにいろいろな条件を整えていく。先ほどのビデオでもありましたし、それから学生の説明でも出てきたかと思いますが、それから、子どもたち、参加者、学生自身もそこに主体的に参加し、1つの目的に向かってみんなで協力しあって学習活動を作っていく。これらが、ワークショップでは大切にされてきたかと思いますが、

これまでの取組を総括すると、大学自体が上手にこのワークショップを行っているんだなあと感じました。何かといいますと、スクリーンを見ていただければと思います。

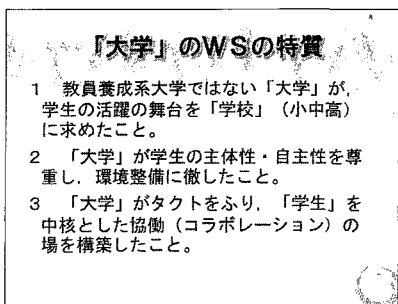


新潟国際情報大学さんを一番上に位置付けます。各種支援団体、それから学校関係者、それから学生と子どもは下のほうに位置しておりますが、司会進行役、大学関係者を司会進行役あるいはファシリテーターとしますと、上手にコーディネートして、しかも皆さんが1つの目標に向かっていく。そしてそこに学生が学校に向く、そして子どもたちと一緒に作っていく。たしかに学校で行っているワークショップなんですが、その場に限らず広く緩やかに連携していく。そうしたワークショップのような形を、大学は実は意図的といいますか、意図しなかったのかもしれませんが、上手に柔らかくつないで作られている。もちろん、それぞれの団体、それから学校関係者の皆さんがそれに協力したからこそだと思いますけれど、結果的にこうしたワークショップが作り上げられたのではないかなと思われま。実はこうやって見ていきますと、見事に新潟県の地域に幅広く展開されているワークショップであることが分かります。それからもう1つ放任しているわけではなく、大学の関係者の皆さんが学生に対して適切に支援している、放任して好き勝手やらせるのではなくて、学生の自主性・

主体性を活かしながら陰でいろいろなプログラムを準備し、皆さんでスクラムを組んで仕上がってきたのではないかな、と思います。



それで、ここでもう一度大学の役割はどういうことかと思直していきたいと思います。ワークショップは司会進行役の人、先ほどの定義ですが、ここに大学と位置付けられていると読み替えていただきますと、分かりやすいと思います。参加者学生が自発的に作業する環境を大学が整え、参加者全体が体験するものとして生み出されること。先ほど言った、いろんな団体の方々、それから学校関係者の皆さん、いわゆる教育委員会の方々を含めてですが、そうした方々と共に緩やかに連携しながら主体的に学生たちが学べるようにこのワークショップを作られていったのではないかなと思います。



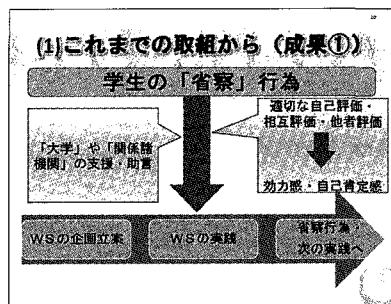
それから、私なりに少し感想を述べさせていただきます。

1点目は、教員養成系でない大学が、学校を活躍の舞台として選んで、しかも小中高幅広くワークショップの舞台にしていることが驚くべきことですし、特筆すべきことだと思います。

2点目ですが、大学が学生の自主性・主体性を尊重し、環境整備に徹したことです。私も学生のいろんな活動のとりまとめをしま

すが、教員あるいは大学が、ある程度枠組みを決めて、こちらがプログラムを組むと比較的楽です。それ以上学生も幅が広がりませんし、私たちの目の届くところに収まりやすいのですが、学生の自主性・主体性に任せますと、何が出てくるかわからない。そんな中でいろんなトラブルも出てくると、逆に大学側が大変になってくるのが少なからずあります。そういうことも考えてみますと、この大学の皆さんが、学生の自主性・主体性を活かしながら、とにかく生き生きとできるようにとご苦労されていることが、毎年毎年伝わってまいりました。これも素晴らしい取り組みだと思います。それから先ほどの説明との重なりがありますが、結果的に大学がタクトをふりながら学生を中核とした協働の組織、これも後程大事なことになるわけですが、今の若者にとってこうしたコラボレーション、協働するっていうことがいかに大切かっていうこともいろんなところで言われておりますし、このコラボレーションにつきましては、学生の中の仲間関係だけでなく、教職員と学生、それから学生と地域社会、学校も含めてですが、そうしたものにどんどん広がって、確実なものになっている、と感じています。

続きまして、本題に入りますが、学生1つ1つの活動を少し見させていただいた感想を述べたいと思います。いくつか成果を私なりに導き出したわけですが、ひとつ素晴らしかったのは学生の省察行為、いわゆるリフレクション、反省、ひとつひとつの実践を通して、そこで導き出していったものを、しっかりとみんなの共有財産としていることです。



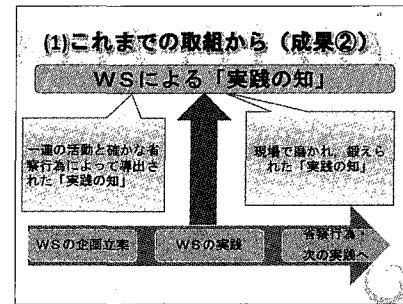
たとえば、スクリーンの下の方を見ていただくと、ワークショップの企画立案、それから実践、そしてそれを通して省察行為を行っています。

私も事前にいただいたプリント見させていただいて、本当に心が熱くなりました。学生は真摯に反省している。失敗したら失敗したで、みんなそれを受け止めて、じゃあ次はどうしたらいいのだろうかと考えていく。プロの教員でも失敗します。

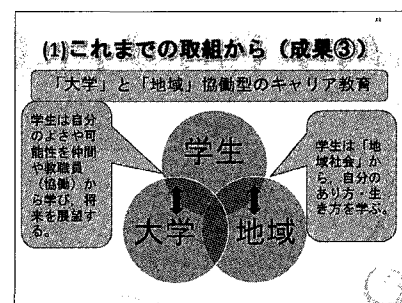
学生は学校に行っているんな失敗して、どうしようかと頭抱えるわけですが、その若者がほんとに自分の実践について真摯に反省して、みんなそれを次の実践に生かしていこうということで、いろんな批評をする。それに対してまた大学が色々なところがかかわっていくという姿も見えました。受け入れ先の各学校も、時には温かく、時には厳しい指摘をしながらほんとにワークショップを作り上げてきたなというふうに思います。

それを学生の皆さんがしっかりと的確に反省して、みんなの財産にしていく。もちろん学生は毎年卒業していきますが、その組織として、まとまりとして財産にしていっているという姿も見えてまいりました。

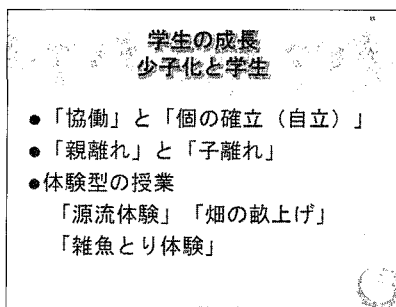
それから、適切な自己評価、相互評価、他者評価が大切です。自己評価は実践した人が評価をする、つまり学生自身が評価を行うのです。それから、仲間同士、それからそこにいた先生同士も含めてですが、他者評価っていうのは主に学校が行います。そうした評価を全部トータルしながら1つ1つをとらえていこう、という学生の姿が見えておりました。それから、レポート感想文。ほんとに落ち込んでいる学生の姿も一部分見えました。ただその後、またどどんいい実践をしている姿も見えてまいりましたので、多分、効力感や自己肯定感、これは今の若者に大事なことです。失敗しても次やってみよう、それから失敗した中でもこういうところ上手いから今度これを使ってみよう、これは国際理解教育の中でも非常に重要なものになっております。いろんな価値観、多様な文化に出会ったときに、揺らぐ、それから挫折をする、それから自分自身のアイデンティティーが崩壊する。その中でも何か残っている、自分自身を何とかやっつけよう、そうしたものを自分自身も培っていている、学生自身が培っていているというようなことも見えてまいりました。もちろんその背後、あるいは横から、正面から大学やそのほかの関係諸機関の皆様がその学生を引っ張り、ひき出して、適切な助言があったからこそだと思えます。そして、学生たちが省察行為を日々の実践を通じて、的確に行ったのだらうと思えます。



次に成果の2番です。これも、先ほど話をしましたが、ワークショップによる実践の知。ワークショップについては、いろんな出版物が出ております。そうしたものを参考にしながら結構ですが、学生の皆さんが素晴らしかったのは、先輩たちあるいは仲間たちがやってうまくいったもの、それから失敗したものを上手に整理していきながら次に活かしていていることです。同じく実践の流れが下に出てきておりますが、今度はそこから導きだされていったもの、先ほど省察行為と説明しましたが、そこから導き出されていったもので知を作っていく。最終的に自分たちで編み出してきた知をしっかりと整理していていると思えます。これらは、一連の活動と確かな省察行為によって、先ほどのものですが、統一された実践の知で、これは本当に素晴らしいものだと思います。皆さんの汗と涙が、染み出るといってか染み込んだ素晴らしい知だと思います。それから、さらに素晴らしいのは、現場でたたかれる、いろんな批判を受ける、それから磨かれる、そんな実践の知だからこそしなやかで、強い知なんです。もろさはなく、いろんなところで鍛えられてきているっていう知が積み重なって、この大学、それから仲間の皆さんの中に蓄積されてきているということです。



それから、これは意外かもしれませんが、本事業は大学と地域が連動する、協働しながら、実は学生一人一人の成長、キャリア教育の一環になっています。これも間接的な成果としてあげてもいいのではないかなと思っています。具体的にはこういうことです。大学、地域、学生がそれぞれ連携する、協働型。そして学生が大学にも支えられ、地域にも支えられ、そして自分で自分の生き方を見つめていく。もちろん常に生き方生き方というよりも日々の実践ということが中心となっていったんでしょうけれども、その中でも、たとえば、Aさんは子どもたちの前で、あるいは学校へ行っても堂々としている、私は人の前で話せない、そうした姿を見ながら、自分自身どのように改革していこうかということも全部含めてです。こういうやりとりをしながら、学生が自分自身を見つめていっている。ここで、学生は地域社会から自分のあり方・生き方を学ぶ。学生の皆さんにしてみると、そんな大きなこと考えていないよ、と言うかもしれませんが、先ほどのような小さなレベル、人と自分、自分自身、今後どうしたらいいだろうか、という積み重ねが大きな成果につながっているということです。それからもう一つは、これは学生にとって言いますと、学生は自分の良さとか可能性を仲間や教職員、これも協働だと思いますが、自分自身が気づかないものを、教職員あるいは学校関係者から、いろいろ教えてもらう、示唆してもらう、そして自分自身が学びとっていく。で、将来を展望していく。そうした意味を全部含めてキャリア教育と呼んでもいいと思います。



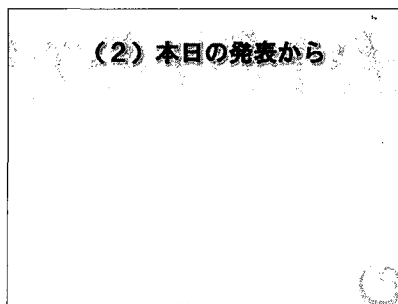
なぜこのような話をしたのかといいますと、私の大学での経験からです。私は上越教育大学で学部生の教職関連の教育に携わっています。学生の様子を見ていて、なかなか大変な時代に入ったなと思っています。この、まず「少子化と学生」です。少子化で何が変わっ

たかと言われますけれど、とにかく昔何人も兄弟がいた時代とは違って、親が子どもを大事に育てます。子どももどちらかというと甘えてきているという傾向が最近強まってきております。そしてさらに協働となってくると、普段であれば、昔であれば地域、社会の中でいろんな人々から叩かれて、それから兄弟関係でもまれ育てられていたかと思います。しなやかな強さもはぐくまれたかと思いますが、今ではそうした場合は少なくなりました。ということで、大学であえてそういう協働の場、ちょっとつらい、頑張れば何とかなるけれどもなかなか一人ではできないよという課題をあえて設定する。で、協働の場を作っていく。

そしてもう一つ、バランス感覚も大事だと思うんですけど、やはりその中でも自分の主張をしっかりと。ゆるぎないものを作っていく。しなやかな自分を作っていく、というわけで個の確立が求められています。それを上手にバランスよくカリキュラムに位置付けていくという必要性が最近言われております。それから、親離れ子離れ。親も20歳になってもまだまだ子どもだと思って、いろんなところで自立を促すのが遅れてきている。子供も親に依存している、ということが最近出てきております。

そんな中で、上教大の話で悪いのですが、これらはどうしたらいいかということで、実は私たちも悩んでおりまして、入学当初の学生たちに源流体験と言いまして、川をどんどんどん登ってってほんとの山の底まで行っておいで。それから、畑の畝あげ。なんで教員なるのに必要なのかっていうと、土と一緒に汗だくになって、牛糞まみれになって作業する。それから雑魚とり体験。これ昔だったら大学でこんなことする必要なかったのですが、とにかく原体験がなくなってきた。そういうところから、もう根底からやらなきゃいけないんだということでやっております。

そうしたことを考えていきますと、先ほどのワークショップの場を作りながら、協働の場を大学に位置付けて、学生たちが入学当初から上級生、下級生とともに作っていく、そこに教職員が入る。地域の方々が入って、いろいろもみあげていく。そういう中で、自分の考えというものを作っていく。そういうことで、少子化の学生と問題点を書きましたけど、そういうことにすることによって、さきほどのキャリア教育の目的にも達することができるのではないかなというところなんです。



それから、本日の学生の発表についてです。プリントの方を見ていただけますか。先ほど学生が、たぶん寝ないで練習してきたんだろうと思いますが、緊張した中でほんとに生き生きと発表して、わたしも感動いたしました。簡単にコメントだけさせていただきたいと思います。

「石油と私たち」の発表ですが、この問題は、学校現場でも非常に難しい問題だと思います。どうやって教材化するかっていうことで非常に難しいことだと思います。学生たちの取組は見事でした。石油を子どもの身近なところに落としていく、そしてさらにこれも、学習活動としては非常に優れているといえますが、模範的な計画だったと思います。最終的に事実を確認させ、未来の選択までもっていく。なかなか1つのテーマのなかでここまでっていくことは難しいことですが、学生は限られた時間の中でプログラムを工夫しながら、そこまで導いていった。それから、何よりも素晴らしかったのは、学生自身が本物に触れていく。実際に見学して行って、石油そのものに触れていく。非常に有意義な体験をされて、そうした思いと感動をワークショップにもっていく。だからこそ、あれだけ多様な意見だとか、子どもたちの意見を引き出したのではないかなと思います。

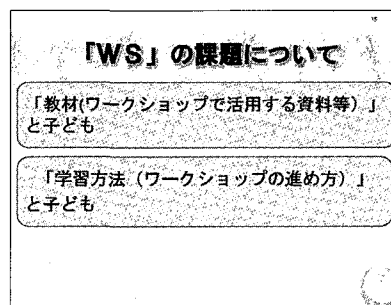
次は「食べもの」です。これ、実は国際理解教育のところでは3Fと呼ばれていまして、Fashion、Food、Festivalですか、それを出すと比較的学校では喜ばれる。衣服、服ですね、それから食べ物、それからお祭りなどです。そのうちの1つなんですけれど、非常になかなか手に取ることがない、できないようなものまでも、ちゃんと映像化し、それで実践をしているということで、素晴らしいなと思いました。今後ぜひやっていただきたいと思ったのは、ここまできたら、欲張りです。申し訳ないのですが、小学校・中学校・高等学校でクラス段階

がありますので、ぜひ中高くらいまでは、自然環境、社会環境あるいは宗教の問題、そうしたものと食文化の関係まで踏み込むことも可能だろうと思いますし、そこが、新潟国際情報大学の先生方の出番だろうと思います。そういうご専門の先生方たくさんおられますので、そうした先生方が、学生とともにそうした教材を作成し、学校現場でそうした教材をどんどん公表していくと、学校の教員も勉強になるんじゃないかなと思います。ちょっと余計な要望だと思いますが、学校関係者としてみますと、お願いしたいなという気持ちがあります。

3つ目の発表ですが、こちら3Fのうちのチョコレートを使っているわけですが、昔からよく言われている開発教育と貿易の問題を使う典型的な事例だったと思います。典型的な事例の中で、学生の皆さんたちのほんとに熱い気持ちだとか、そうしたものが加味されて独特の学習過程が立案されていました。私が注目したのは、ただ「知る」だけでなく、授業場面での選択、そして実際の実生活での選択等を区分したこと、学生が「実際にはなかなか実生活の行動にはつながらないかもしれないけれど、買う時に少しでもそうした子どもたちの思いとか、不公正な貿易の問題について考えが及んでくれるとうれしい」とコメントを残したことです。まさにそうだと思います。小学校・中学校・高校それから大学生、それぞれ発達段階が違いますので、どこまで踏み込んでいいのかということもしっかりと理解しながら実践されてきたのではないかなと思います。

以上が本日の発表についてのコメントでした。

ここまで、成果について話を進めてきましたが、少しやはり課題、今後の展望ということも含めて紹介させていただきたいと思います。



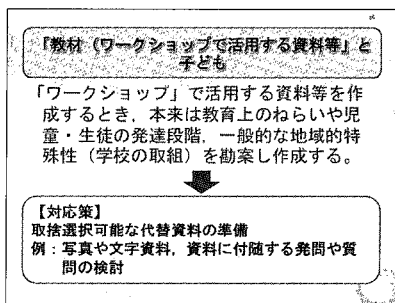
教材、これはワークショップで活用する資料等と定義させていただきます。「教材と子ども」ということと、それからもう一つ「学習方

現代GPシンポジウム「国際理解教育におけるワークショップの導入」の記録

平成21年度事業報告

法（ワークショップの進め方）と子ども」の2点について、課題ということで少し紹介させていただきます。実はこれは普通の学校現場のプロの教員も、難しいことです。あえて紹介させていただきます。

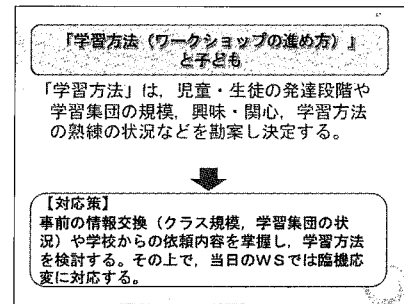
これはどういうことかという、ワークショップで活用する資料等を作成するとき、本来は教育上のねらい、それから児童・生徒の発達段階、先ほどから発達段階という話をしておりました。学習指導要領のねらいも含めてです。それから一般的な地域の特長性、学校の取り組みなどにも関して作成する。本取組については、学校現場と何回か連絡を取り合いながらという、かなりそうしたものがシステム化されてきているわけですが、そうしたのも非常に大事です。ただ、なかなか十分ではないところも正直なところで、今後の対応策としては、こんなふうになると手っ取り早いかになっていくことです。



取捨選択の可能な代替資料の準備。たとえば小学生用になんとかわかりやすい写真、高校生でも十分対応できる写真、あるいは読み物の資料。それから本物。多様なものを用意してやって、実際にいろんな情報を学生あるいは先生方が手に入れて、取捨選択してさっさと使える。このようにしておく、それでもかなり、教材が子どもたちの状態に応じたものを使えるだろうと思います。

その次です。学習方法に関しても、ワークショップ型の限界というものがあります。

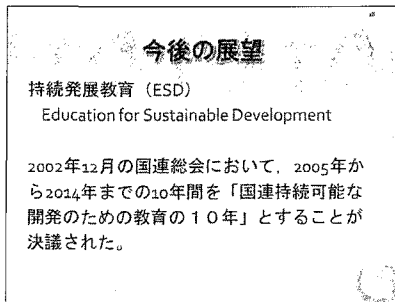
どんな人たちに対しても同じような形式にもっていくわけですが、実際には児童生徒の発達段階や学習集団の規模、人数、興味・関心や学習方法の熟練の状況などに関して決定する。これも非常に難しい熟練した技能が必要ですが、それをワークショップの中でどこまでできるかっていうと、なかなかこれも難しいと思います。やはり、



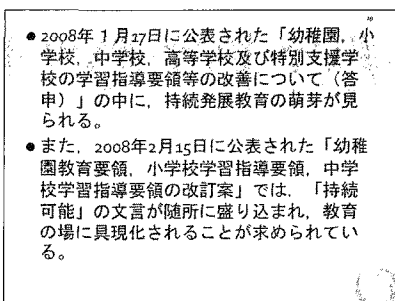
本事業でも取り組まれておりました、事前の情報交換、クラス規模・学習集団の状況。たとえば、グループ学習が可能なのかどうか、それから特別な支援が必要な子供は何人くらいいるのか、そうしたものがある程度把握できて、それから依頼の内容、そうしたものを掌握していきながら、学習方法を検討していく。これもなかなか難しいのですが、臨機応変と最後までまかしてあります。ある程度場数を踏んだ学生だったらわかると思います。ちょっと空気が変だぞとか、いつもうまくいっているのに今日はうまくいかないなというときに、目配りでさっさと動き、数人でいつもと違うところを補充していく。あるいは延長していく、ということが起こっていくわけです。これ、普通の学校の教員であれば、何気なくやっていくわけですが、ワークショップの場合は複数で動いていくことが多々あるかと思っています。皆さんの取り組みですと、その場合の連絡の取り方などを、先ほど言ったように「実践の知」として、皆さんならではものをぜひ作っていただければよいと思います。

最後になります。実は、これも余計なことなのですが、皆さんの発表とそれから今後の取り組みの可能性ということで少し話をさせていただきたいと思います。ESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育) というのは皆さんどこかで聞いたかと思いますが、参考文献にもあがってありました。

まさに今日ここであがってきている国際理解教育が今後生き残っていく、生き残っていくということとはとても変なことですが、文部科学省からは実は国際理解教育という言葉がいったん消えかかりました。国際教育に変わりつつありましたが、もう1回国際理解教育に戻りました。その際にですが、ちょっととらえ直しが入っております。具体的には2002年12月の国連総会、小泉首相の演説だったんです

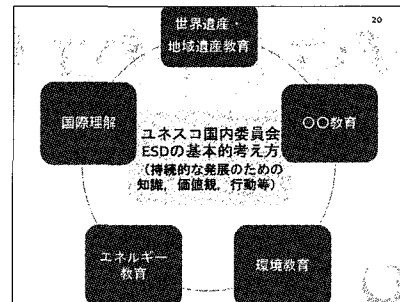


が、そこで、これからの10年、つまり2005年からの10年を「国連持続可能な開発のための教育の10年」とするということを宣言して、日本がその責任を負いました。国際公約です。おかげで、学習指導要領に実はこのESDの精神が結構盛り込まれています。



指導要領についてはここに書いてある通りで、2008年1月17日に公表されたもの、それから2008年2月15日に公表されたもの、これに文言が随所に盛り込まれております。それを受けてユネスコ国内委員会が実際に動いております。文部科学省の直轄になっておりますけれど、このように表現しました。

国際理解教育については左側に位置づいておりますが、たとえば世界遺産、地域遺産教育、エネルギー教育、それから環境教育、それから〇〇教育というごまかしがありますが、実はなんでもオーケーということなんだそうです。なんでもいいですよ。たとえば、人権教育、ジェンダーも含めて、なんでもいいですよ、ということなんだそうです。その根底には、持続的な発展のため、先ほどの貿易もそうですし、背伸びすることなく長く続くもの、それでもう一回緩やかに見ていこう。これらをとりえ直ししていきながら国際理解教育も含めて



狭い枠組みでいくんではなくて、緩やかに、みんなで連携していこうではないかというようなとらえの中で、ユネスコの国内委員会が動き始めています。

以上、本事業の講評というところには迫りませんでしたけど、私が気づいた限りということで少し説明させていただきました。ご静聴ありがとうございました。

平成21年度事業報告

パネルディスカッション 「国際交流インストラクターによる国際理解教育の成果」

パネリスト：	新潟県教育庁高等学校教育課 新潟市教育委員会学校支援課 新潟市立巻南小学校 新潟市立二葉中学校 新潟市立万代高等学校 上越教育大学大学院学校教育研究科 長岡市国際交流センター 新潟日報社読者ふれあい部	橋本 敏郎 指導主事 高橋 直彦 副参事 井口 昭夫 教諭 鈴木 佐榮子 教諭 平井 望 教諭 釜田 聡 教授 羽賀 友信 センター長 渡辺 英美子 部長(兼 編集局編集委員)
コーディネーター：	新潟国際情報大学 教授	佐々木 寛

佐々木：こんにちは。早速パネルディスカッションを始めたいと思います。今日は8名の本プロジェクトを支えていただいている方々にいらっしゃっていただいています。まずはお1人お1人ご紹介したいと思います。左より、

- ・新潟県教育庁高等学校教育課・指導主事の橋本敏郎（はしもと・としろう）様、
 - ・新潟市教育委員会学校支援課・副参事の高橋直彦（たかはし・なおひこ）様、
 - ・新潟市立巻南小学校・教諭の井口昭夫（いぐち・あきお）様、
 - ・新潟市立二葉中学校・教諭の鈴木佐榮子（すずき・さえこ）様、
 - ・新潟市立万代高等学校・教諭の平井望（ひらい・のぞみ）様、
 - ・上越教育大学大学院学校教育研究科・教授の釜田聡（かまだ・さとし）様、
 - ・長岡市国際交流センター・センター長の羽賀友信（はが・とものおぶ）様、
 - ・そして、インストラクター事業についてこれまで新聞記事でご紹介下さいました新潟日报社から、販売事業本部読者ふれあい部長兼編集局編集委員の渡辺英美子（わたなべ・えみこ）様、
- 以上8名のパネリスト、非常に多いですが、ご発言いただきたいと思います。私は本プロジェクトの責任者である佐々木でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

新潟県内の学校等における国際理解教育の実施状況

佐々木：まず、大きな話から始めたいと思うのですが、新潟の県立高校と新潟市内の小中学校における国際理解教育の実施状況、今どのような状況かを、おうかがいしたいと思います。まず橋本様、高橋様にそれぞれ1分ぐらいで、お話しして頂きたいと思います。よろしくお願い致します。

橋本指導主事：県立の高等学校についてご説明したいと思います。高校生は、当然のことながら世界の出来事に関心を持って、各学校においても国際理解教育は、さまざまな形で行われています。総合的な学習の時間で年間を通してというのは、少ないかもしれませんが、ロングホームルームであるとか、英語の授業の中で、英語を交えながら、国際理解教育をしていくという形が一番あるのではないかと思います。

また、学校において、特色のある国際理解教育をしている学校では、海外に修学旅行、研修旅行しているところがあります。昨年であれば、8校の県立高等学校・中等教育学校後期課程の生徒が行っております。学校独自で、英語のキャンプとして敬和学園大学と協力したりとか、ブリティッシュ・ヒルズに行ったりですとか、英語以外の言語として中国語、韓国語、ロシア語、ドイツ語をしているところが、現在県内5校あります。

スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールという文部科学省の事業がありまして、今年度柏崎中等教育学校が指定されていまして、県内に英語教育を広めているということです。

また、今の学校それぞれいろんなことをしていると思いますが、県教育委員会として国際理解教育を進めることとして、4つの事業をやっています。1つは、ALTを県立の高等学校、中等教育学校、中学校すべてに配置をしております、さらに特別支援学校にも配置をしております。以前に比べると予算の関係で人数がかなり減っているのですが、それでもなんとか国際理解を進めるために活用して頂こうということで行っております。2つ目は、夏休みに2泊3日のイングリッシュセミナーというのを行っております。ALTが7～8名に、生徒が50～60名、70～80名で行っています。2泊3日英語漬けということで、寝食ともにして勉強するという機会を設けています。スピーチコンテストでは、上、中、下越で予選を行って本選を新潟市で行

うという形です。今年も約70人の生徒、25校から参加しました。

最後に海外研修として、3月に1週間サンフランシスコに5名の高校生を派遣しまして、ホームステイや学校の授業を一緒に受けるというものをしています。

県のほうは、なかなか予算がないので、外務省あるいは文部科学省の事業に乗ってというものがあまして、外務省の東アジア青少年

大交流計画、ジェネシスプログラムというのですが、その計画に手をあげまして、昨年から中国の高校生を受け入れまして県内の各高校の生徒のところにホームステイをさせたり、逆に昨年50名の高校生を中国に、本年度は10月に中等教育学校の前期課程の生徒50名を、韓国に1週間派遣をしました。他の計画も活用しながら、県の国際理解教育を進めていきたいと思っております。



現代GPシンポジウム「国際理解教育におけるワークショップの導入」の記録

平成21年度事業報告

高橋副参事:市内の小中学校における国際理解教育の状況を説明する前に、市の教育委員会の取り組みについて簡単に触れさせてもらいます。

新潟市は、政令市新潟の教育を目指す方向のあり方を明らかにするために、新潟市教育ビジョンというものを平成18年3月に策定しております。そこで、世界と共に生きる力の育成というものを基本政策の1つとしておりまして、それに基づいて国際理解教育の充実というものを事業として行っております。

その国際理解教育を充実させる事業としては2つありまして、1つは諸外国の青少年と新潟市の青少年との相互交流をして、友好親善を図るという事業です。この事業は平成4年度、最初にロシアに派遣しましたが、そこから始まりまして、ロシア、アメリカ、イギリス、中国、韓国の姉妹都市、友好都市との相互交流を通して、友好親善を図るとともに国際社会に寄与する青少年を育成していく方針です。

もう1つは、全ての学校にALTを配置する事業ですが、子どもたちが外国の生活や、文化に慣れ親しんだり、外国語に触れたりする活動を推進しています。この事業により、児童・生徒の英語や言葉に対する興味・関心が高まり、成果がでていと聞いています。

また、学校外でも、県のようにイングリッシュキャンプというものを、夏休みに集中的に体験活動として実施しています。また、中学生には、英語発表会でコミュニケーションを図ろうとする積極的な態度を育てるような観点で、スピーチまたはスキットという形で参加してもらっています。

さて、各小中学校の国際理解教育の実施状況でございますけど、先ほども話がありましたように、ほとんどの小学校では、総合的な学習の時間の中で、国際理解教育の時間を取っています。その中では、世界の国について知ろうというような内容で、ゲストティーチャーに来てもらって、その国について学習したり、それに絡めて日本との違いを比べてみるというような取組などがあります。中学校段階では、いろいろな国の歴史や文化、暮らしを学ぶことを通して、他国の文化、伝統を学習する取組などが取り入れられていると思います。簡単ではございますが、新潟市の状況でございます。

佐々木:ありがとうございました。そういう新潟県の多様な国際理解

教育の中で本プロジェクトがどのような位置づけになるのかは、後ほど話していただくということでお願いします。さて今日は、新潟日報の方から、長年にわたって新潟の教育を見つめられてこられた渡辺様がいらっしゃってますので、新潟における国際理解教育をどう見てらっしゃるか率直にお話し頂ければと思います。

渡辺部長:新潟日報では、新潟国際情報大学の取組を何度か取材させていただき、記事にしています。その他にも県内のあちこちの小学校・中学校で、国際理解教育を随時取材して報道させていただいています。

先ほどの羽賀さんのお話を興味深く聞かせていただきました。子どもたちに身につけて欲しい力というものを、私なりにあらためて考えてみると、やはりまず、人と関わって生きていく力を身につけてほしい。それから、さまざまな物事を多角的に捉えて、自分の考えを持てる力がほしい。さらに、さまざまな価値観を認めて、色々な人とコミュニケーションができる力。そういうことがまさに国際理解教育を通じて育めると感じました。

もう1つ、国際理解教育の大切な目的が世界の平和、それも積極的な意味での平和を目指すということだと思えます。平和の棚の会という出版社の集まりがあるそうです。それに参加する書店で平和の棚というものを設けるという動きがあると新聞の記事でみました。普通本屋さんに行くと、ビジネスとか小説・雑誌とか文芸とかジャンル別に並んでいますが、それを平和という切り口で集めている棚ということで、東京だとジュンク堂さんなどにあるそうです。その平和の棚の平和の定義というのが、単に戦争がない状態ではなくて一人一人の命が脅かされず衣食住が確保でき、人種や性別で差別されない社会、つまり積極的に平和を実現することにある、ということです。つまり、広い意味で言えば、戦争をしないということではなく、争いや差別なく暮らせる社会。雇用も福祉も医療も、広い意味で全て平和に関わるテーマだと思います。そう考えると、学生さんの発表にもありましたように、地球環境と国際理解教育の切り口はかなり幅広く、工夫のしがいがあるように思います。

小学校でも英語を学ばれていると思うのですが、さあ、英語を勉強しましょう、さあ、国際理解をしましょうといっても、子どもたちの関心を持続するのは、けっこう難しいと思います。何かをするため

パネルディスカッション「国際交流インストラクターによる国際理解教育の成果」

に外国語が必要だ、何かを一緒にするために外国語が必要という仕組みがあればいいなと思います。

宮浦中学では総合学習の取り組みとして、パノラマガイドという取り組みを行っています。朱鷺メッセを訪れる観光客を、中学生自身がガイドになって案内する取り組みです。朱鷺メッセの展望室は外国人の観光もかなり多くて、実際に外国人をガイドする体験をした中学生たちは、もっと英語を話せたらとか、もっと英語を学びたい、と言っていました。英語を学んで実生活で使う場面がある、そんな日常があるといいと思います。

また、南魚沼市では全市内全小学校に国際科が導入され、市民のボランティアを先生役に募っているそうです。中国の方から太極拳を習ったり、料理を習ったりできるのはいいと思いました。

今お話にありましたが、新潟の場合は対岸との関係・交流が長く、姉妹都市交流も長年やっていますので、大いに国際理解教育に生かせるのではないかと思います。大学同士でも長年の交流があると思いますので、留学生と一緒に調査する、研究する、遊ぶことを通し、相互理解が進んでいくのではないかと思います。

佐々木: ありがとうございます。今日はですね、会場にも国際理解教育に多くかかっていたいただきたい方もいらっしゃるの、後ほど質疑応答の時間を設けていますので、是非いろいろ質問を考えておいていただければと思います。さて、本日お出で頂きました井口先生および鈴木先生は、平成19年から毎年度、本事業のインストラクターを授業に呼んで頂いていて、実際にご覧になっています。ここからは本事業の講評を具体的にさせていただくという時間にしたいと思います。

国際理解講座に申し込まれた経緯

佐々木: まず、おうかがいしたいのは、どうしてこの企画に応募されたかということ、動機の部分を少しお話し頂ければと思います。井口先生からお願いします。

井口教諭: 動機部分ですね。私は小学校の教員をしているのですが、学生の頃1年間世界を放浪したり、青年海外協力隊で3年間、南米で働いた経験があるので、子供たちに世界のことを教えたいという

希望がありました。しかし、学校の現場では毎日が忙しくて日々追われる状態でした。私も時々国際理解教育のワークショップをするのですが、準備に大変手間がかかる、と。そんなときにこのお話を聞きまして、大学生がどんなふうにするかということで申し込みました。

佐々木: ありがとうございます。では鈴木さん、どうでしょうか。

鈴木教諭: 私は、二葉中学校で総合学習の国際理解教育を担当しています。国際領域の学習は、9月から12月という単元で、最後に新潟の高校で勉強しているAFSの留学生を招いて、新潟や日本の文化をもっと知ってもらおうという交流会を計画しています。それをワークショップ形式でやりたいということで計画をしているのですが、今井口先生もおっしゃったように、最初にワークショップやオリエンテーションがどういうものなのか、中学生にわかってもらうためのモデルという形でお願いしました。今までは、絵などで説明していたのですが、具体的に見せる方法がないかと思っていたところに、国際交流協会からの案内にこちらの講座があったので、まさにこれだと思って即申し込みをしました。

佐々木: ありがとうございます。今日はですね、万代高校の平井先生にもお越し頂いています。昨年度より参加されています。まずは動機をお願いします。

平井教諭: 万代高校には普通科の他に、英語コースと理数コースという特別なコースが設けられています。そして昨年度については2年生の英語コースの生徒を対象に、総合的学習の時間の1時間を使って実施することにしました。万代高校の総合学習の時間では、進路研究を活動の中心にしています。英語コースの2年生に進路を考えようといったときに、英語が好きでこのコースに入ったのに、その先英語を使って何をするのかとなった時に、想像が広がらなかったのです。なので、異文化理解や進路選択を考えるきっかけになって欲しいなということで申し込みをしました。ですので、国際理解教育プラス大学による出前授業ということで興味を持って申し込みました。

佐々木: ありがとうございます。つづいて、実際にご覧になっての

現代GPシンポジウム「国際理解教育におけるワークショップの導入」の記録

平成21年度事業報告

ご感想をおうかがいします。きれい事じゃなくて、率直なご意見を伺いたいのですが、井口さんは、敬和学園大学の学生による「スラムから考える世界ワークショップ」をご覧になりましたがどうでしたか。

平成19年度の講座についての感想

井口教諭:卒業間近の6年生が対象で、通常の授業のままならない時があるほど元気な子どもたちだったので、大丈夫かなと思っていました。ですが彼らは90分しっかりとやり遂げた。よく頑張っていたと思います。そのあとにフィリピンのパヤタスのビデオもしっかりと見ていた。ワークショップの参加型の授業がすごいなと思いました。普通の授業では彼らはそのようにきちんと関わらず、逃げ出したり、背を向けて勝手なことをしていました。そのようなことが印象に残っています。

佐々木:ありがとうございました。鈴木さんのところは、本学の「世界の不平等」というワークショップでしたが、いかがでしたか。

鈴木教諭:3年前なので、あまり鮮明に覚えていないのですが、その年はアメリカ・タイ・中国の3か国のAFSの高校生を招いての交流会が行われるということで、1～3年の学生が混ざった集団、縦割り集団での学習だったので、英語能力にも差があります。その中で、日本語がよく分からないかもしれない段階の高校生に、楽しんでもらって、よく理解してもらうためのワークショップ・プレゼンテーションを、どのようにするかモデルとしてお願いしました。その点については十分目標を達したというか、ありがたい内容でした。「世界が100人の村だったら」的な内容で、食べ物や飲み物を使って、体験的な学習をさせてくれたので、私が生徒にやらせたかった内容そのものでした。しかし、ストリートチルドレンの写真を見て「さあ、何ができますか」と考えさせるコーナーになりましたが、質問が難しかった。深く考えさせるのはいいが、難しすぎるのは控えたほうがいい。

佐々木:ありがとうございました。今のは平成19年度の授業についてですね。引き続きまして平成20年度、21年度の授業について、3人の先生から率直なご意見をいただきたいのですが、再度井口先生

をお願いしたいのですが、本学の「世界の家庭見つけた」、「世界の結婚式」、「世界のI Love You」ですけれども、いかがでしたか。

平成20・21年度の講座についての感想

井口教諭:実物を見せてもらったり服を着たり、楽しいクイズがあり、子どもたちはすぐ食いつきました。1つだけ食いつかなかったのは、グループワークでした。小学2年生にグループワークをさせて、発表させるのは難しい。子どもたちはそこまでうまく自分たちを表現できないですね。発達段階に応じた指導・方法を考えた方がいい。小学2年生と6年生では別世界なので、そのへんを考慮に入れた計画案でワークショップを開くといいと思います。

佐々木:ありがとうございました。小学生には課題が難しかったということですね。鈴木さんは、「ツバルが沈む」というワークショップでしたが、いかがでしたか。

鈴木教諭:内容が地球温暖化で、社会でも温暖化という流れだったので生徒も身近に感じて、学習しやすい内容でした。グループワークもよかった。ヘルプの方々も積極的に動いてくれてうまかった。よく考えて作ったのかな、と思いました。また、この年は前年に比べて、進行シートが非常にわかりやすくなっていて、発音のところやこのような資料を提示するとか、わかりやすくなっていました。なので、事前の打ち合わせも、イメージをもって具体的にお話のできたのでよかったと思います。こちらの要望にもうまく対応してくださって、アイスブレーキングもすばらしかったです。平成20年度は進歩したな、そう思いました。

佐々木:今年度の「世界を見ちゃおう、知っちゃおう」はどうでしたか。

鈴木教諭:今年の9月ですが、異文化がテーマの内容だったと思います。こちらも具体的に食べ物を食べさせたり飲ませてもらうたりしたので、中学生はとても和んで学習できたと思います。異文化理解で、「いろいろな違いがあるよ」、「今後どう接すればいいのか?」、というところを考えさせて欲しかったが、まとめがただ「違う

パネルディスカッション「国際交流インストラクターによる国際理解教育の成果」

よね?」で終わっていたので、その次が欲しかった。事前の打ち合わせでも、そこをもう少し、じゃあ自分はどのような姿勢で行こうか、というのを考えさせるグループワークがほしい、とお話しました。そこが授業の中では物足りなかった気がします。

佐々木: ありがとうございます。平井先生の万代高校では「学校に行けない子どもたち」でしたが、いかがでしたでしょうか。

平井教諭: 万代高校では、「学校に行けない子どもたち」というテーマで、インドの児童労働についてのワークショップでした。いい意味で期待を裏切られました。期待していましたが、それ以上で本当にしてよかったね、となりました。どんな点がよかったのかというと、3つあります。1つが事前に3回も打ち合わせしてくれた。進行シートがよかった。どんな質問、資料が書かれていて、それも流れだけではなく、具体的に書かれていたので、イメージがしやすく、予測ができました。ですので、それを踏まえて、事前に変更点もすぐに言えた。すごくよかったです。2点目は、テーマは難しかったが、話が上手かったのでわかりやすかった。アンケートで73%の生徒がとてもおもしろい、面白いと答えてくれました。教材のすばらしさや何回も練習を重ねてきたその様子が高校生に伝わり、素直に入ってきて、その結果70パーセントの生徒たちが面白いという感想につながったのだと思います。外の世界を見ることで、自分の中の当たり前ではないということがわかった。最後の点は、卒業生がインストラクターだったので成長した姿が見れて、よかったということです。

ワークショップ方式について

佐々木: 本事業の特徴の1つは、国際理解教育をワークショップ方式で行う点にあります。これについて、先生方はどのような感想をお持ちになりましたでしょうか。

井口教諭: 双方にメリットがある。大学の外に出てやっているのもみなさんの必死さが伝わります。私たちはそれを忘れませんし、みなさんもそうであると思います。

鈴木教諭: ワークショップ形式は国際理解教育に適した形だと思えます。交流会もワークショップ形式でやっていきたいと思っているのですが、やはり言葉の壁があるなかで、体験をしながら学んでいくことは大事です。準備も大変なので非常に助かります。そんななか、大学生が考えたものをもらえる、というのは非常にありがたいです。

佐々木: ワークショップの方が手がかかるということですね、準備に。

平井教諭: ワークショップ形式の利点は、「学びに気づきがある」ということです。総合的に学びがいきなり、教育効果が高いと感じています。まず他者との関わりがある。関わりの中で自分に戻って想像したり、考えたりする時間ももらえる。その中で答えを導く。ワークショップを通じて気づくことが多くて、もっと知りたいとか他人に伝えたいということにつながりました。またワークショップをしてから10ヵ月後にアンケートを取りました。少し減りましたが、66%がやはり面白かったと答えが出ました。大学生になったらこのような事業をしたいと答えてくれました。時間がたっても教育効果は高かったんだな、と感じています。

これまでの研修指導の改善点

佐々木: ありがとうございます。感無量という感じです。実は私たちのプログラムではテーマはどんどん変わっていきませんが、ワークショップからの反省を生かし、インストラクター演習を授業化し、研修を充実化しました。学外講師を呼んで生徒に刺激を与えました。敬和学園大学や県立大学との連携も深めました。進行シートも現場の先生に鍛えて頂きながら、精緻化しています。また本学ではアドバイザー制度を設けました。これはそれぞれの教員が学生にアドバイザーとして寄り添って、それぞれの内容についてきめ細かく指導をします。手前味噌ですが、頑張ったところがあります。成長したところをお聞きしたいと思います。

井口教諭: 子どものあつかいが良くなっている。流し方が良くなっている。カンペではなく、自分の言葉になっている。子どもたちが考え、変わっていくのがはっきりとわかりました。

平成21年度事業報告

鈴木教諭:平成19年度に比べて20年以降は、進行シートが非常に具体的になり良くなった。具体的なイメージがはっきりとでき、丁寧に打合せをしてくれます。来年もお願いしたい気持ちにつながっています。これはずっとなのですが、学生さんが一生懸命しているのが、はっきりと子どもにも伝わっていたので、子どもたちもそれに応えようと頑張っていました。

学校教員からのアドバイス

佐々木:インストラクター事業の今後の充実化に向けて、アドバイスをおうかがいします。

井口教諭:いい事業だと思います。3点挙げたいと思います。第1に、人は人によって一番影響を受けるので、いろいろな人に出会うことです。県内のNGOや諸外国に通じた人に話を聞く。合宿などを開いてもおもしろい。第2に、とにかく外国に出てみることです。個人、あるいは大学の教員が引率しても良い。できれば、ワークショップのテーマに関係した国に出かけてみる。第3に、学校外にも活動の場を広げることです。

鈴木教諭:データをまとめて、臨機応変に対応して、難しかったところを反省していくといいと思います。

平井教諭:みなさんは小、中、高、発達段階がばらばらで準備が大変だと思います。目的や年が違うので、進行シートの作成が大変です。だから事前の打ち合わせをしっかりと欲しています。担当の先生方との打合せを通じて、訪問先の目的や進め方、または運営の際のチームワーク、役割分担がしっかりできるといいと思います。

高校生は年齢が近いので、大学生は憧れや将来像になります。そのような点で大学生をシビアに見ることもあるので、高校生はシビアに見るので注意してほしいです。アンケートの中には、みなさんの言い方が小さい子に伝えるように言っている、と感じた人もいました。みなさんの活動はとても影響力があります。準備に準備を重ねてがんばってほしいです。

釜田教授:先ほどたくさん話す機会いただきましたので、手短かに1点のみ話をさせていただきます。私の大学で、「小学生向けの話し方練習」という授業内容があります。高等学校の免許を持った大学院生が小学校の免許を取りたいと言うことで、トレーニングしてテストをしたのですが。再三、追試をしました。なぜかと言うと、小学校1年生に分かる言葉が出てこない。高校生向けの、あるいは大学院生同士の言葉、本で学んだ言葉は出るのですが、小学1年生に対する受け答えができない。あるいは子どもの反応を予期できない。小・中・高の先生方、見事に並んでおられますが、たぶん皆さんもご参加された学生の皆さんは、それぞれの、子どもの顔を思い出しながら言葉が出てくるようになりつつあるんじゃないかなと思います。

これは、頭で理解してもなかなか上手いきませんので、是非、やっぱりその場でそのクラス、それからその学校の先生方から学んで、その場に合った言動、そういったものを身に付けていただければと思います。以上です。

総合学習の時間の減少は、国際理解教育の時間の減少につながる?

佐々木:どうもありがとうございました。最後に、少しシビアな話になりますけれども、実はご存知のように、文部科学省は平成20年3月に、新しい学習指導要領を施行しました。その中で総合的な学習、皆さんが使っていた総合的な学習の時間が最大で150時間縮小されるということです。

したがって小学校では平成23年、中学校では平成24年度より、これが完全に施行されるわけですが、今年度より先行実施されているわけです。総合的な学習の時間が減ると言うことは、もしかすると今後のインストラクターの注文が減るのではないかと、という不安があるわけです。実際に派遣依頼は、平成19年度が一番多くて、昨年度および今年度は、かなり減っています。それは我々としても、今後非常に問題になるのではないのか、と思うのですけれども、まず、県立高校で国際理解教育の時間はどうなっているのかというところ、あるいは新潟市の小中学校ではどうなっているのか、というところを、橋本さんに、まず高校の件をご説明いただければなと思います。

橋本指導主事:高等学校の学習指導要領ですが、今年の3月に公示

パネルディスカッション「国際交流インストラクターによる国際理解教育の成果」

されまして、全面実施が平成25年。総合的な学習の時間につきましては、来年度から先行実施されます。高校の部分につきましては、変わりませんのでこちらで国際理解教育やっているところは影響ないかと思います。また、現行の学習指導要領では、総則の一部に総合的な学習の時間が書かれていますが、新たに章立てされて、総合的な学習の時間が独立しましたので、そういう意味では逆にプラスなのかと思います。また、それ以外のところで、英語の授業でも国際理解教育をやっていますので、マイナスに働くことはないのではないかと思います。

高橋副参事:小中学校の方でございますけれども、学習指導要領の中には、国際理解教育は何時間入れなさいという規定はありませんので、総合的な学習の時間が減ることで、国際理解教育の時間の増減があるかどうかと言うのは言えないかと思います。ただ、今年度から先行実施になっておりますけれども、小学校は平成22年度まで、中学校は平成23年度まで移行措置ということで、小学校では総合的な学習の時間は、3、4年生で若干減っておりますけれども、逆に5、6年生では、外国語活動の時間というものが入っておりますので、今まで小学校の5、6年生で、総合的な学習の時間の中に入っていた外国語活動の時間が、別に設定されていることになるかと思います。

それから中学校に関しては、この3年間の移行措置においては、中学校1年生の時間だけが減っていますが、中学校2、3年生については、平成20年度までの時間は、変わってない状況であります。

実際、市内の小中学校の各学校から、総合的な学習の時間実施計画を各校から毎年出してもらっております。今年度の様子を拝見しますと、国際理解教育を行っている学校においては、どの学年で行うのかは学校によって違いますが、ある程度まとまった時間をとって実施しているようです。

佐々木:ありがとうございました。心配することはないということなのでしょうかね。また、色々ご指導いただければと思います。さらに大きい話なのですが、橋本さんと高橋さんに、今後の学校教育の中で国際理解教育の位置づけが、どのような形で行われていくのか、について、ご意見があればおうかがいしたいのですけれども。では、橋本さん。

学校教育における国際理解教育は今後どうなるか？

橋本指導主事:来年度から新学習指導要領に基づいてやっていくわけですが、中身を見てみますと、教育基本法が改定された際に、国際理解教育というものもやるという項目がありますので、それに基づいて学習指導要領が改訂されております。そういう意味でも高等学校において、どんどんこれからも進めていかなければいけないと思います。

ただ、全体としてなんですけれども、県立の高等学校におきましては、「特色ある学校づくり」というのを目指しております、各学校で「私の学校ではこういうふうな特色があります」、とか「こういう学校を作っています」、というのがあります。その中でも英語教育とか、国際理解教育に重点をおく学校は今後もさらにそれを進めて、どんどんアピールする計画書が出てきております。また、中等教育学校の中では地元や地域と、世界とを結びつけていくグローバルということで、進めていくところも多々あります。

また、他の学校についても外国語、英語をやっておりますけれども、英語の授業を通じて、国際理解の教育を進めたり、あるいは英語の科目で異文化理解という科目がありますので、そういうものを開講していることは、その中で異文化理解しながら、国際理解を進めていくところもあります。

先ほどALTの話もチラッとしましたけれども、特別支援学校においても、昨年以降、その前にも配置はしたんですが、うちにも週1回でもあってもいい、学期1回でもいいので、ALTを配置してほしいところが出ています。特別支援学校においても、国際理解教育を、どんどん進めていく形でどんどん深まっていくんじゃないかなと思います。

佐々木:先ほど打ち合わせの時、橋本さんからワークショップも英語でやったらどうか、とご提言いただいたのですが、そういう高校のニーズがあると考えたいと思います。

高橋副参事:国際理解教育ということでございますけれども、先ほどは羽賀さんの講演でもありましたように、やはりこういうことに関しては、一方向ではなくて双方向という考え方で行かなければならないと

思います。つまり、外国の生活や文化を知ることだけではなく、その知ったこと、理解したことを通して、自分の国の文化や生活についても、そういう部分に対する理解を深めて、尊重する態度を育てるということです。そのことが日本にいる外国の方とのコミュニケーションという形になりますので、基本的には一方向ではなく双方向という形で考えていくのが大事なと思います。そうすることによって、子どもたちの視野を広げ、それによって、国際理解を深めさせ、さらに国際社会に適応するような子どもたちを育てられればと思います。

それで、先ほど申し上げましたように、総合的な学習の時間が減ったから国際理解教育ができないということではありません。基本的には国際理解教育というのは教科横断型だと思いますので、ある時間だけ国際理解教育をやれば良いというのではないと思います。やはり、学校の中で、教科の中である部分が国際理解教育にあたるものもありますし、総合的な学習の時間に入るテーマもあるというように考えていかなければいけないのかと思います。

先ほど言いましたように、総合的な学習の時間が減りましたが、中学校の3年生の社会科の時間などが増えております。ですから、ある時間が減ったからできないんだという考えではなくて、教科と総合的な学習の時間とを関連させながら、進めていく必要があると思います。その中で、単に講義とかではなくて、問題解決や体験活動を通して、いろんな国の生活や文化を学び、そして自分の国について生活の理解をすることが大事だと思いますので、是非ともこういうことにおける人材の活用は大事だと思います。

今回のこのインストラクター事業につきましても、ここにいる3校の先生方は、毎年活用されておられますが、逆にこの事業を知らない学校の先生方もいますので、もっとPRしていただいたほうがいいのかと思います。そういうふうにして人材の活用は、これから活かされると思います。

それから、発達段階も言われましたので、小中高の連携というのは必要だと思います。小学校でこういうことをやった、学んできた子どもたちが中学校でどうであるか、そして高校に進学してからどうであるか。これが、長い期間の中で、子どもたちを育てる意味では大事な、と思いますので、その辺も考えていかなければならないと思っています。

佐々木: どうもありがとうございました。最後にですね、釜田先生の方、それから羽賀さんの方から、そして渡辺さんの方からもコメントをいただきたいのですが、釜田先生には、学校教育において国際理解教育はどうなっていくのか、ということをご専門の立場からまずお話をいただければと思います。

釜田教授: 先ほどの講評のところでもESDのことをお話ししましたので、それを省いて説明いたします。

1つは、現在、平成10年の学習指導要領を踏まえ、小学校、中学校、高等学校では授業が展開されています。私もその当時、学校現場にいましたので憤りを感じておりました。それは、自分の土台となる社会科の授業時数が少なくなったからです。とりわけ、国際理解教育に関することが大幅に削減されました。具体的には小学校の「世界」が抜けました。中学校の地理では世界の地域については世界の国々の2つから3つ程度、世界いろんな国があるのだと言うことを中学生で学びます。でもその程度しか勉強しません。わずか数時間ずつです。それから歴史の世界との関わりについては日本と関係のある歴史だけ。ということで、形式的には総合学習がその役割を担うことになりました。その結果、中学校の総合学習の中で国際理解教育が展開されたかどうか。

今、キャリア教育全盛期であります。実はそうしたキャリア教育、進路学習については総合学習ができる前からすでに行われていました。だから、もっと悪い言葉でいうと、中学校現場では国際理解教育は難しいが、キャリア教育、進路学習であれば可能であるということです。キャリア教育の先生に怒られるんですけども。そんなふうに捉えられかねないという状況になりつつあります。一方で平成20年度も学習の改訂が出されましたが、小学校でも大幅な変更があります。世界を体感して身近な地域と関わりながら勉強する。中学校でも世界の学習かなり取り込まれました。

しかも宗教についての理解を深めること。これは中学校の先生方には、非常に扱いにくい課題だと思います。私もできません。

このあたりをどうやって、展開するかというのが、まさにインストラクター事業の成果というか、ここでしっかりと、教材作って各学校に展開していただくと、学校関係者は非常に喜ぶかと思います。

ということで、学習指導要領の改訂に伴う総合学習の削減により、

パネルディスカッション「国際交流インストラクターによる国際理解教育の成果」

見た目には削減される国際理解教育については、大変な時代になるのかもしれませんが。一方では、学習指導要領の中にきちんと盛り込まれたともいえます。教育課程全体としてはマイナスにはならないのです。

2点目です。世界のことについて学習させる古典的な手法として、同心円拡大主義というものがあります。自分を知る、家族を知る。身近な地域、都道府県、日本、世界という段階をふんでいったものを最近、双方向の目で見えるようになり、新しい学習指導要領では、その中でもうすべて世界を関わらしている。世界と自分。世界と地域。世界と新潟。その手法を実は小学校に今度入りそうです。

今、教科書の改訂等が進んでいるかと思いますが、大幅な変更になるかもしれません。一方では、小学校の先生方がそれに耐えられるかどうか。今までやったことがない授業になりますし、教材を作らなければなりません。この教材を作るためには、小学校の先生方は膨大なエネルギーを費やすことになります。そこにこのインストラクター事業が乗り込んでいく。「これはこういうことをやるといいますよ」と具体的な教材を提言できたら、学校教育現場でも喜ばれる事業になると思います。

3点目です。実は私も研究の関係で、イギリスやアメリカに出向いたことがあります。イギリス、アメリカの国際理解教育に関心があり、学校関係者や有識者にインタビューをするんですが、大体はやっていませんでした。やっていないというよりも、当たり前すぎて、とりたててやる必要がないという回答が寄せられます。

そうした国々では、身近な幼稚園時代から宗教や文化的背景が異なる子どもとの交流がある。街中に行くと、多文化が当たり前。敢えて学校の中でやる必要がない。もう、日々、学級生活そのものが多文化。国際理解ということは「なんなのそれ」って逆に聞かれます。そんなことを考えるときに、まず、理解というよりは、やはり、交流、学習の場にいわゆる、同年代の異文化、多文化をもつ子どもたちがいた中で、このワークショップができたとしたら、すばらしい経験になると思います。

私も、よく大学生に次のように話します。

「今日の話し合いにおいて、いろいろな宗教や文化的背景を持つ人がいると、もっとすばらしい授業になったんじゃないかな」と。このような場を少しでも、一つでも、二つでも作れるといいかなと思って

います。以上です。

佐々木:ありがとうございます。羽賀さん、今後のですね、インストラクター事業の全般について、ご意見で感想いただければと思います。

羽賀センター長:もうなんか、皆さんのところで出尽くしたかなと思っているんですが。教員の方、はっきりおっしゃらなかったのですが、実は教員の方たちが、一番の課題が多文化なんですね。そこに、こういうユニットが入る。それからオプションもついてくる。教員が選ぶ側にあつたら、非常にありがたいことではないかなと。そういう意味のメリットが1つ。

それから子どもたちがやっぱり頭で理解する座学から、もう一歩進んで心で納得する。それは、やっぱり学校教育を単なる学校教育の場でやって評価しないで、生涯教育という目線で考えたとき、社会で役に立つという学校にならなければ、子どもには意味がないんですね。ですから、平井先生もおっしゃってたけど、何ヶ月か後が大切なんです。これから、大学に、社会に出て行ったときまで追跡ができれば、これは、長期的に非常に評価の高い、いい効果をうむのではないかなと、私は思っています。そういう方向でもしこの事業をとらえていただければと思います。期待しています。

佐々木:ありがとうございます。最後に渡辺さんの方よりコメントいただければと思います。

渡辺部長:インストラクター事業は大学での学生の教育と、小中高でのいわゆる国際理解教育を同時に行う、それも地域が連携して取り組む、その具体的な仕組みを作ったところが、これまでありそうでなかったし、面白いと思います。

学生の教育という面では、基礎体力をつけるという言葉もありましたけれども、大学の外で、いろんな大人との関わりの中で、力を付けていくことができる。たぶん自信だとか、これからの人生やっていけるな、という気持ちが出てくるだろうと期待をしています。

私は社会人として広い視野を持った人、的確な判断ができる人、そして豊かな発想を持った人たちと一緒に働きたい、そういった人たちに会社に入ってきてほしいなと思ってきていますけれども、イ

平成21年度事業報告

ンストラクター事業はまさに、そういう人たちをつくってきているのではないかと思います。

今、少子化で、大学も大変な時代だと思いますが、この取り組みの存在意義は、地域にアピールできると思います。地域に役立っているんだ、新潟国際情報大学があってありがたいという気持ちを、県民が持てるような取り組みを、これからも続けていただけたらと思います。

佐々木: 大変大きな宿題をいただきましたけれども、ありがとうございました。司会の不手際で、大変時間を大幅に経過してしまったんですが、ご質問、あるいはご意見、感想、何でもかまいませんので、最後に少し受け付けて、まとめてこちらからお答えしたいなと思っています。いかがでしょうか。

フロアとの質疑応答

越智教授: 新潟国際情報大学の越智です。僕はスタッフではないので直接かかわることはないんですけども、アドバイザーとして、いろいろ学生と直接かかわったりしてます。その学生に期待するのはやはり、自分で考えて、物を疑うということなんですね。このGPに参加する学生たちは、それがすくなくできていくようになっていると感じます。そういうものは、ある意味人を疑っていくことだと思うんです。世の中の常識とか、世間で言われていることは違う、自分で考えなければいけない。場合によっては大学の教員が嘘をつくとか、わざと嘘をつくことはないですけども、自分で考える。とにかく質問が来たとしても、こっちは答える前に自分で調べて、自分で考えて、そういうものがいきなり、とくに小学校や中学校という環境に来るのは、一種の秩序を乱したとか、邪魔じゃないですか。すぐそこが気になるというか。現場への意見です。

佐々木: じゃあ、まとめて答えていただくということで。他に。じゃあ、武藤理事長。

武藤理事長: 井口先生にご質問なんですけど、私は今、白山浦に住んでいるもので、鏡淵小学校の評議員になっていて、年に一回だけ

4年生に話をするのですが、その時例えば子どもですから、食べ物が入るというテーマがある。そのときに、そういうのは教わりませんから、腸の長さは大人だと8mありますと、こうやりますと笑いますね。それから、あなたがたのお腹の中に、例えば大人だったら1億だとか2億だとかいる。そんなに入っているのか、っていうことをいうんですが、それが終わりました、皆さんに書いてもらった感想を見ますとね、皆さんいろいろ書いてあります。そしてそれで見てもうと、次にこういうことができるっていうんですか、そういうような、個人的な感想と言いますかね、そういうものはとらないんでしょうかね。学生諸君は。

佐々木: それはうちの学生が、ですかね。

武藤理事長: はい。それを聞いて、どういう印象だったか、どういうことを聞いたかったんだ、ということは、もしとってもらえると、このレベルはこのレベルまですればいいんだな、ということが、わかるんじゃないかなと思います。

佐々木: ありがとうございます。これまで内輪ばかりで申し訳ないんですけども、他にどうですか。じゃあ、その前の方。はい。

松本様(女性): 協力隊OBの松本と言います。今、私は小学校の外国語指導員、外国語指導助手として小学校の英語の事業のお手伝いをしているんですけども、多くの先生が国際理解教育をしたいと思っていて、とてもこの国際インストラクター事業は魅力的なものであると思うんですが、先ほどおっしゃられたように依頼件数が減っているとかですとか、村上市の実施校が4校しかなかったんですけど、その原因と言いますか、ただのPR不足、他に何か原因がないのかな、というのがちょっと疑問に思いました。おねがいします。

佐々木: はい。ありがとうございます。あと2つくらい。じゃあ、そのお隣。

松本様(男性): 協力隊OBの松本と言います。戦争の話やチョコレートの話でフェアトレードのお話とかあったと思うんですけども、これ

パネルディスカッション「国際交流インストラクターによる国際理解教育の成果」

が本当に100%断定したお話をされない方がいいんじゃないかな、と。僕の実体験として、僕もいろんな国へ行って戦争のあった、紛争のあった国とか行ってですね、実際行ってみると、誰が、ニュースではこっちが悪いとかあっちが悪いとかいっているけれども、行ってみると実際どっちが悪いのか分からない。みんな悪いんじゃないか。戦争自体が悪い、というようなことで、先ほどフェアトレードもフェアトレード買ったことで、本当のその人たちが100%貰っているのかといえは、どうなのかな、というところまで考えてお話した方が。フェアトレードを選びましょう、というのだけだと、ちょっと弱いのではないのかなというところですね。あと、ちょっと僕も外部の人間なので率直に思ったことなんですけれども、学生教育が主なのか、国際理解教育が主なのか、ちょっとわかりづらかったかなというところですよ。

佐々木: はい、ありがとうございました。あと、じゃあ、学生から。

学生: 新潟国際情報大学、情報文化学科3年の茅原崇生と言います。ワークショップがそもそもなんで国際理解教育だけなのか、ということに結構疑問があって、ワークショップは自分の趣味とか地元とかなんでもいいと思うんですよ。なんで、ワークショップの幅をもっと広げてもいいのではないかなと思うんですが、その検討をお願いします。

佐々木: はい、ありがとうございました。じゃあ、後ろの方。

スモト・マルチネ様: 私は午前ここにこに來まして、フランス語の講師ですけれども、このクロスパルで。国際理解に興味があって28年新潟市にずっと生活してきて、一言で自分の気持ち、意見を言えないぐらいですけれども。私は本当にフランスで育てられたので、先ほどどなたかが説明しましたが、イギリスとアメリカで国際理解を研究した先生だったと思うんですけれども、私ももう国際理解はもう当然のことですね。小さい時からもう生活の中で外国人がいて当然なことだと思えます。そして、新潟に来て何が一番良かったかというのは、私は50カ国以上の友達が出来ました。学校で学ぶことだけでなく、やっぱり活かすことが大事ですね。新潟市は非常に外国人が結構多くなってきて、どんどん素敵な市民を呼んで、意見交換をして解決方法がたくさん見つけられると思えます。ここに初めてきて、あ、

外国人がほとんどいない、と非常にショックを受けました。もちろん言葉の壁が大きいと思いますけれども、最近は逆に日本語を出来る外国人も多いし、または英語でも、みんな英語を発言できるし、世界の中で生きていけて、世界人として育たなければならない、とあります。でも、自分の文化もとても大事だと思います。私は両方やってきましたので、フランス人って言いながら、外へいつも目を向けてきました。今日ちょっとその教育のことについて関係ないかと思えますけれども、私は子どもについて、自分の子どもを育てたときにとっても素晴らしい子ども、小学校向けの雑誌です。フランス語だったけれども、世界理解のための雑誌だったんですね。だから、それは新潟、日本ではありませんので、全然学校と関係ない。教科書ではなくて、本当に自分の子どもと一緒に生活といえますか、そこで習ったこと。平和のこととか、人種差別のこととか、社会の問題とかを上手に説明していたんですよ。私はいつも、毎週毎週その雑誌をいただいたときに、子供と一緒に座って世界のことを説明したんです。こういう教育が学校だけでなく家庭の中にも入ってくればいいなと思います。もっともっと意見がありますけれども、時間がないので、すいませんでした。

佐々木: はい、ありがとうございました。あと、2つばかり。はい、じゃあ前の。

長坂准教授: 皆さんお久しぶりです。私、実はこの事業に深く関わっておりまして、今年10月からちょっと別の大学に行って、外に出ると、我々すごく先を行っていたんだ、ということに改めて気づかされているんですよ。それで、我々えらいんだということだけでもよくないので、こういうことをもしできたらなと思っていたことを少し。これを始めたときに、もちろん国際理解教育を通して新潟の地域社会の国際化とかに貢献することを考えていたわけなんですけれども、先ほど質問がありましたけれども、同時にですね大学の教育をちょっと変えるということ、やはり目標としていたんですね。私自身の経験からすると、このワークショップを指導する中で、私も自分自身の授業をかなり直したんですよ。それがうまくできたかは、わからないんですけども、これが、大学教育を変えていく可能性をもつのかな、とずっと思っていたんですね。そういう意味で、アドバイザー制度とい

うものを取り入れて、いろいろな先生に、少しずつでも入っていただく、というようなことを考えていたんです。そういうふうを考えますと、最近大学ですごい形式的なところで成果を出すことが、強調されがちなんですけれども、こういった地道な教育システムを通してですね、大学の教育を変えていくことが、大事なかなというふうに改めて思いました。

もう一点はですね、新潟の特殊性といいますか、JICAの方に以前インタビューを受けたときに、新潟というのはネットワークがすごい強い、という話を聞いたわけです。私たちはこの国際理解教育の事業の歴史的な、なぜこれが実現したのか、を考える必要もあって、それはやっぱり今日、羽賀さんも土田事務局長もこられていますけれども、そういうもともとあったゆるやかな連携といいますか、ネットワークというものに私たちがそれに乗っかると言いますかですね、その中に私たちがなんとか飛び込もうとしてきたという側面もあるわけですね。ですから、こういうネットワークというものを文化人類学の世界で言えばですね、ネットワークというものは維持しなかつたらすぐなくなってしまうものなんですかね。そういう意味で、このネットワークというものはやはり大事にするっていうことも、今後考えていくことなのかな、という感想を持ちました。

佐々木:ありがとうございました。あとはいかがでしょうか。じゃあたくさんですね。ご意見とご質問がでていると思いますが、まず井口さんをはじめとして、お三方に、インストラクターは邪魔じゃないのかという質問とかですね、それから理事長から来た質問もあります。それをちょっと簡単にでもお一人ずつお答えいただけますでしょうか。

井口教諭:邪魔じゃないです。いつも毎回毎回、毎年応募したいと思います。来年度の巻南小は、もしできれば1年生から6年生まで全学年をおねがいしたいなあと考えております。知らない人は知らないで、その辺先ほどありましたけれども、もうすこしPRのほうを。あと夏休みでしたよね、締め切りが。先生方は夏休みになると、小学校の場合ですけれども結構抜けます。ですので、あの辺もうちょっと上手にした方がいいのかなという感じもしますね。原因の1つだと思います。あと、アンケートですか、感想ですよね。あれは子供が書く感想ですか。ワークショップの後に子供向けのアンケートというも

のが配られまして、そこに子供たちいろいろ思ったこととかを書いて、最後ありがとうございましたとか書いているので、特別に書く学校と書かない学校の感想があると思います。

佐々木:じゃあ、今のことについて何かありますか。それじゃあ、すいません。時間がないので。あと、我々として応えなければならないのもいくつかあったと思うんですけども、なんで地方には派遣が少ないのかというご質問がありましたけれども、これはもう純粋に交通費が大変だということがあります。しかし、県の国際交流協会とやっているわけですけども、やっぱりまんべんなく派遣したいというのは我々の思っているところです。それで、もっと率直に言えば、学生も遠いところに行くのは苦ではないというよりも、もうちょっとポジティブに行きたいという部分もあるわけですね。新しい、行ったことのないところに行きたい。そういう意味では、今おっしゃったように遠方に、どんどん踏み込んでいくことは、私もやっていきたいと思います。

それから、断定的なワークショップは注意すべきだというご意見は、本当にその通りだと思います。そういうことも普段から学生は注意してやっています。それから、学生教育なのか国際理解教育が重点なのかということですけども、先ほどそちらの長坂さんのほうからあったように、両方やるんだということです。この大学の中も変わるし、地域も変わっていくという非常に欲張りなプロジェクトなんだということも、ご理解いただければと思います。それから、学生の茅原さんから出た、もうちょっと内容検討しろという話ですけども、これは本当に重要な提言なので、我々としても検討課題にしていきたいと思います。それから、マルチネさんから出た、新潟の地元の外国人がもっといるじゃないか、というご意見。多分ご質問の趣旨は、そういう人たちと交流すべきだというご指摘だと思うんですね。それはやはり私たちも課題としていきたいと思います。新潟に資源がたくさんあるわけなので、それをもっと活用して、ネットワークを作っていきたいなあ、というふうに思っております。また、メディアのお話ですが、新しいメディアを作って、たとえば普通の市民も共有できるようなものを我々が開発していきたいと思っております。今国際理解教育データベースというものを、少しずつ作っています。なるべく早急に作って国際理解教育をしたい教員に限らず、県内市内の人たちがそこにアクセスすればいろんなアイディアがある、というようなものを作

パネルディスカッション「国際交流インストラクターによる国際理解教育の成果」

りたいと思っています。何か最後一言。井口さんから。

井口教諭:ワークショップに外国人の方を活かすと言うことで、前にも話をしたかと思いますが、ワークショップ自体に外国の方をいれて、留学生の方をいれて一緒に作り上げるみたいなのも、すごくいいと思います。タウンミーティングなんかもそういう手法でやりますし。あと、ネットワークですけれども、ほんとに県内のネットワーク、先ほど松本夫妻がいろいろと話をされましたけれども、協力隊のOBなんかは2年なり3年なり、どっぷりと現場を見てますので、そういう方とディープな酒を交えても結構ですので、そういうような場を作ってみてもいいかと思います。平山学長さんが協力隊30名とか言ったら、ばっと30名くらい集まりますよね、無償で。そういうように大学以外の方とのネットワークを大事にしながら、そういうかたちでやっていけば、学生もいい経験ができますし、行く人もまたエネルギーをもらえると思います。以上です。

佐々木:はい。ありがとうございました。冒頭に、羽賀さんのほうからあらかじめ答えのない世界の中で活動する、知的な人的体力というものがこれから必要だというお話がありました。その中でやはり国際交流インストラクター事業がどれだけ貢献できるかというのは、私たちの挑戦課題だと思います。また、釜田先生がおっしゃったことで、一番胸にしみたのは、このプロジェクト自体ワークショップだったのではないか、というご指摘です。まさしくそういうつもりで、私たちも今後もっともっと改良していきたいと思います。その際にはここにいらっしゃる皆さんを始め、地域の皆さんとの力がないとこのプロジェクトは進んでいかないと思いますので、引き続きご協力をお願いしたいと思います。最後に今日お忙しい中、来ていただいたフロアの皆さんに、拍手で感謝の気持ちを伝えたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

今後の国際交流インストラクター事業について



(財)新潟県国際交流協会
土田 純一 事務局長

ただいまご紹介いただきました。新潟県国際交流協会の土田と申します。もう時間がかかり過ぎている中で、やっぱり羽賀さんが最初にあのようなことを言われたからみんなが好き勝手なこと言い出したのではないかと思います(笑)。

私ども協会は本当に、ここでいう国際理解教育の面からすると、お出での皆さんと違ってあまり縁のない世界の間人でございます。それが何でこういった事業に取り組んでいるのかということ簡単に申し上げますと、私どもは、国際理解教育や多文化共生というものを地域政策として考えています。異文化は近くにあると言う方がおりますけれども、別に日本人だろうが、外国人だろうが関係ない、とか、国籍などは関係なくて、それこそさっきのお話にありますけれども、日本人らしくない日本人もいますし、外国人らしくない、むしろ日本人に近い文化を持っている外国人の方も多し、と。そういう地域社会の中で、価値観の違いとか、文化的な違いから生じてくる衝突とか摩擦を、やっぱり緩和しなければならないと思います。その一つの解決方法として、若いうちからそういうものを感じとる感性みたいなものを、身に付ける必要があるんじゃないかということで、取り組んで参りました。

それで、教育関係のことについて、私ども協会はほとんど知識を持っていないので、コーディネイトと言いますか、ネットワークって言いますか、そういったものに徹するような形で進めてきております。

今日の共催団体にあります新潟県国際理解教育推進協議会ですが、ここには行政の県や、県教育委員会、新潟市の教育委員会も入っておりますし、大学関係としては、新潟国際情報大学の他に、上越教育大学、それから新潟大学などからも参加して頂いております。それから、市町村と国際交流協会あるいは民間の団体にも色々参加していただいて、その中からより良い事業を進めていこうということで、皆さんからお知恵を拝借しています。今週の月曜日に協議会を

開催いたしました。皆さんからご意見いただくなかで、やっぱり国際交流インストラクター事業は、来年度以降もやっていこうじゃないということになりましたし、私どもといたしましても、大したことはできないのですけれども、そのコーディネイトや若干の財政的な負担等もしていきたいと思っております。

それともう一つは、新しい提案ですが、今日の話の中で、大して心配することもないという話もありましたけれど、総合的な学習の時間が減ってくるし、あるいはこの事業そのものが単発的であることから、もうちょっと計画的に、長い目で見て重点的にやることよって、新潟県全体の底上げを図るべきではないかと考えます。今までのように依頼のあるところへのインストラクター派遣はやるんですけれども、そのほかに国際理解教育推進重点校、それから地区というものを経年年度から設置します。大体、6校・地区くらい考えています。ここで地区と言うのは、先ほどもお話が出ていましたが、今年度西川町(新潟市西蒲区)の公民館で、学校の枠を超えて5、6校の方が集まって行った事業があるんですね。それが学校の縛りを解決する一つの方法でもあるかな、と思って、そういった形でやるということです。

それと、やはり魅力的なメニューが入ってないと、なかなか取り組めないということがありまして、このインストラクター事業の他に、いくつかのメニューも考えております。学校等で例えば講座をやると言ったときに、このメンバーの方々が、積極的に講師になって参加することの他に、先ほども会場のほうからご質問ありましたけれども、学校では本物の現場の声が聞きたいと言うことがあって、外国人の方、留学生の方を講師として学校に派遣するというようなことです。

それから、私どもで今日はプレゼンテーションコンテストという資料お配りしてあります。これもなかなか魅力的な事業と自負しているのですけれども、そういったことを、やりたいと言ったところにアドバイザーを派遣するようなですね、そういったものをいくつかメニューを

用意して、その中からいくつか取り上げてやりたいという学校に対して重点的にやっていく。それによって、新潟県全体の国際理解教育の底上げができればいいなと考えて、複数年度にわたってやりたい、と考えております。

それから、このインストラクター事業は、プレゼンテーションコンテストの第一歩じゃないかと考えています。このプレゼンテーションコンテストは平成18年度から初めています。これは、特定のチームを作って、自分たちでテーマを決めて考えて、そして発表してもらって、その優秀なチームを海外のスタディーツアーに派遣しようというものなんです。それは先ほど羽賀さんが3つの力ということ言われましたが、私どもこれをやった考えは、調べる力と考える力。それからチームを作ると言うことがですね。1人じゃなくて2人、3人と集まってくると、それだけで考え方が違ってありますね。それをチームとして悩んでまとめる力と言うのが出てくるんじゃないかと。そして自分たちがまとめたものを、いかによその人に理解してもらおうか、というプレゼンテーションの力ですね。そういったものを身に付けていただければいいな、ということやってきております。これを国際交流インストラクター事業と繋いでいって、できればこのインストラクターとして育った方が、是非このプレゼンテーションコンテストに参加する方々に、チームのアドバイザーに育てていただければ、人材育成という点でかなり有機的なつながりが出てくるのではないかなと考えております。

そんなことで私ども引き続きやっていきたいと思っております。ただ先ほど申しあげましたように、私どもほとんど力がない団体ですので、是非関係者の方々とお互いに顔の見えるネットワークを組みながら、より良いものにしてきたいなと思っておりますので、よろしく願いいたします。ありがとうございました。

閉会の挨拶



新潟国際情報大学
学長
平山 征夫

平山です。毎日新聞が毎年、「毎日国際交流賞」という賞を出しています。これは国際交流に貢献のあった団体を全国から募集して、審査をして、表彰するものです。今年2つの団体が表彰されましたが、そのうちの一つがインドのストリートチルドレンの支援をしている新潟の「教育と環境の『爽(さわやか)』企画室」の片桐和子代表と昭吾さんのご夫妻でした。たまたま、その推薦状を私が書いたのですが、出してみたら、審査員のなかに知人の毎日新聞の論説主幹がいました。昨日、彼と会って話をしたら、「本当に面白い夫婦だ」と評価していました。とてもじゃないけれども、普通の人ならなかなか出来ない。老後初めてインドに旅行した。夜中にインドの駅に降り立って、ホームを歩いたら何か柔いものを踏んじやった。月明かりに透かして見たら、毛布に包まって寝ているストリートチルドレンだった。と。見てしまったらほうっておけない。旦那さんは今まだ、警備会社勤めている73歳ですが、得る所得を全部そちらにつぎ込んでやっています。

ところで、私は今、「にいがた青年海外協力隊を育てる会」の会長をやらせて頂いております。実はその前の12年間は、新潟県国際交流協会の理事長でした。なんかこの今出てくるストーリーを見ると、どこかで少しづつ関わったのかなと思います。私にとって国際理解ってことは、新潟県知事になったとたんになりました。

まさにペレストロイから始めて、環日本海交流が始まったわけです。閉ざされた対立する海が、平和と交流の海に変わりました。そのときに国同士がまだ戦後の処置が終わっていないという状態の中で、地方自治体が主体となってこの海の交流を担わないといけない。その中で政策的にも新潟が発信すべきことはやっぱり大きいだろうと思いました。知事として何をすべきか。他の県も一生懸命やっていますが、どうもそれぞれの県が、自分のエゴとして自分に有利になるような国際交流ということを考えているように私には見えました。し

かし、それでは上手くいかないだろうな、と。対岸の国の立場から見れば、日本という国のなかの、日本海側の県のとこが勝つか負けるか、なんかということには、関係がないわけでありました。

日本として、どういう立場でこういった北東アジアの人々と付き合っていくか。また、私にとっては戦争の後遺症が残っている中でありましたから、歴史を勉強しなきゃいけないと思って、いろいろな本を読んだりして、自分なりにあらためて歴史を学び直しました。またその頃、まず県民にアジアの人々の文化を広く知ってもらおうと思って、「新潟アジア文化祭」を始めました。そして、多くの県民にアジアを知ってもらおうと同時に、何でもいから少しでも関わってもらいたいと思って、「新潟・国際協力ふれあい基金」というアジアの人々を支援しているNPOを支援する基金を作り、毎年10団体くらいを支援するシステムを作りました。

その中で感じたのは、国際理解というのは非常に言葉としては分かり易いですが、実際に行くと、それぞれ国の立場、よく出るのは国益という、最も重要なものであると同時に、最も邪魔なものが出てくるのです。私は同質性ということ、常にアジア文化祭のときも言ってきました。それは何かといえば、みんな地球人。人間であるという点では同じであるということです。だけど異質性という、持ってきた歴史とか文化とか。あるいは個人個人でも当然のことながら異質性があります。そういう中でお互いをどう理解するか。

日本はアジアの一番端の東で、おそらく世界の中でもかなり異質の文化を持っています。なぜ国際理解をするか。お互い理解することによって戦争が起きない。理解することによってもめごとが少なくなる。これは当然の目的の一つであります。もっと大切なことは、お互い理解をすることによって自分自身の生き方を見つめ直し、どう生きるかを考えるということだと思います。

日本人としてこの新潟に生まれて、そして地球に住んでいて、自分

はどう生きるか。他の人がどう生きているか。ちゃんと知ることによって、自分の生き方をきちんと考える。それこそが、国際理解が持っている一番大事な意義だろうと、私は思っています。ですから、死ぬまで国際理解のための勉強を、私はしていこうと思っていますし、そのことによって一人でも多くの友達ができるだろうと思っています。

私の娘は二人ともヨーロッパにいますが、帰ってくる度に議論になります。日本人はおかしいとよく言われます。はっきり意見を言わない。とかですね、もうテレビ見ているとろくな番組がない。あんな番組しか見ていない日本人って理解できないとかですね。もう、よく言われます。本当にそうだと思います。もっともっと日本人として世界の中でどう生きるかを考える。そうすると、国際理解教育というのは、小学生からやるべきです。総合教育の時間がどうのこうのなんていう場合じゃない、と思います。

今、学長として一番気にしていることですが、大学生は学士とか修士とかもって卒業します。その学士とか修士という資格は国際的に見てどのようなレベルなのか、ということが問われ出しています。今、文部科学省も大学卒の質という問題を言っています。で、その質をどうやって確保するのかっていう話になると、とたんに難しくなるわけですね。本当言うならば、ちゃんとした国際理解教育というものは、文部科学省が一番力入れてやらなきゃいけないんだ、と私は思っています。

こういう、ISO、つまり国際標準規格みたいなこと言い出すと、大抵、ある国が有利になるように規定を作るという話になって、国際理解教育がまったく違う方向に行ってしまうのではないかと心配をしています。それは国際決済銀行(BIS)がやった銀行の自己資本規制などを見れば、すぐ分かるわけであり、大変心配しています。世界に通用するという考え方は、日本人的な考え方で良くない、ということでは全くありません。世界に通用する日本人としての考え方をもつ

ときちんと押し出し、相手の理解もしてあげればよいのだ、と。私はそのように思っている次第です。

ところで、この現代GPは、文部科学省の予算のために、3年で打ち切られる。来年以降どうするかというと、大学の自前の予算を組んでやらなければならない。多分これは、大学が自分の金でやるように仕組んであるんですね。大学の予算の最終的な査定は、理事長ですが、とりあえず学長のところで、事業仕分けをしなきゃいけない。これから事業仕分けをしますが、なけなしの予算のなかでどうやってこれを続けるのか、あるいは続けられるのか、を、今学内で議論をしています。

これだけ新潟でも多くの人に関わっているわけですから、国際理解を目的としたこの国際交流インストラクター事業を、続けていくべきだろうと思っています。そういう意味で今度は文部科学省の予算ではなくて、我が大学の予算でやることになるかもしれませんが、逆にそういうときほどチャンスです。うちの大学が主体となった事業としてではなくて、本当に新潟県全体の国際理解、県民の国際理解を含めての事業として、将来見据えて道づきをきちんとしながらやればよいなと思った次第であります。今日は本当にお忙しいところ大勢の方にご参加いただきまして、学長として最後にお礼を申し上げまして、閉会の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

参考資料

平成21年度事業報告

現代GP事業として招聘した学外講師一覧 (平成19年10月1日以降)

【海外講師】 (アルファベット順)

(所属先は本学招聘時点での所属先)

Noemi Ardon氏 (フィリピンのNGO団体Alay Kapwa)
Emina Buzinkic氏 (クロアチア平和学センター執行理事)
Emily Carsido氏 (フィリピンのNGO団体Alay Kapwa)
Eliazar T. Rose氏 (インドのNGO団体New Hope代表)

【国内講師】 (五十音順)

(所属先は本学招聘時点での所属先)

井口昭夫教諭 (新潟市立巻南小学校)
石森大知氏 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニアフェロー)
小ヶ谷千穂准教授 (横浜国立大学教育人間科学部)
奥本京子准教授 (大阪女学院大学)
小田敏行氏 (青年海外協力隊OB)
釜田聡教授 (上越教育大学学校教育総合研究センター)
黒田俊郎教授 (新潟県立大学教授)
桜井高志氏 (桜井・法貴グローバル教育研究所)
澤谷めぐみ教諭 (三条市立第二中学校)
島村昌浩氏 (特定非営利活動法人・日本国際ボランティアセンター)
謝黎氏 (放送大学講師)
白木朋子氏 (特定非営利活動法人・ACE事務局長)
真保美奈子氏 (新潟市小中学校派遣員)
高橋陽子教諭 (新潟翠江高等学校)
竹内敏晴氏 (演出家、竹内演劇研究所主宰) 竹内敏晴先生は、平成21年9月7日に逝去されました。ご冥福をお祈り申し上げます。
谷山博史氏 (特定非営利活動法人・日本国際ボランティアセンター代表理事)
ちゃんせいこ代表 (人まちファシリテーション工房)
羽賀友信氏 (長岡市国際交流センター長)
松原孝和氏 (青年海外協力隊OB)
松本ますみ教授 (敬和学園大学人文学部)
山田規央氏 (青年海外協力隊OB)
若月章教授 (県立新潟女子短期大学)

年度別国際交流インストラクター数と国際理解講座一覧

年 度	インストラクター数		講座名	
平成18年度	28名	新潟国際情報大学	28名	ストリートチルドレンから見える世界
				チョコレートから見える世界
				携帯電話から見える世界
				ブラジルサッカーから見える世界
				バナナから見える世界
平成19年度	36名	新潟国際情報大学	26名	異文化理解
				世界の不平等
				戦争と平和
		敬和学園大学	10名	水から見る世界
スラムから考える世界				
平成20年度	117名	新潟国際情報大学	57名	世界のI Love You、世界の結婚式
				食でショッキング、Waterで笑えない話
				世界の時間割、学校に行けない子どもたち
				ブラックバスによるしく、ツバルが沈む!?
				ストリートチルドレンから見える世界、That's☆貧困
				世界の家庭みつけた、血塗られたダイヤモンド
		敬和学園大学	20名	石油がない世界
				世界の貧困と環境問題
				見た目の世界
				子どもから見える世界
県立新潟女子短期大学	40名	韓国から見える世界		
		ファストフードから見える世界		
		マザーテレサから見える世界		
平成21年度	86名	新潟国際情報大学	44名	石油と私たち～資源と環境の行く末は～
				パレスチナ・ナウ～サッカーボールに込められた思い～
				甘くて辛いチョコレートの真実
				学校に行けないってどういうこと?!
				世界をみ茶(ちゃ)おう!しつ茶(ちゃ)おう!
				うたがって気づく自分の“世界”
				ファストフードからみえる異文化
		敬和学園大学	27名	砂嵐がやって来た
				人口ドカン!定員オーバーなんですけど
				Hello! Good bye work
県立新潟女子短期大学 新潟県立大学	15名	今、あなたがほしいモノは???		
		日本人って変?		

参考資料

平成21年度事業報告

年度別派遣実績

年 度	派遣校数			派遣回数 ^(※1)			派遣校数(人)		
平成18年度	10	小	6	11	小	6	372	小	275
		中	1		中	1		中	N/A
		中等教	1		中等教	1		中等教	13
		高	2		高	3		高	84
平成19年度	29	小	24	35	小	30	2,670	小	2,440
		中	3		中	3		中	190
		高	2		高	2		高	40
平成20年度	25	小	17	29	小	20	1,152	小	887
		中	4		中	4		中	194
		高	4		高	5		高	71
平成21年度 ^(※2)	24	小	15	30	小	20	1,307	小	1,036
		中	2		中	2		中	59
		高	5		高	6		高	152
		公民館他	2		公民館他	2		公民館他	60

(※1)同一学校に複数回派遣されるケースがあるため、派遣校数と派遣回数は一致しない。

(※2)平成22年2月実施予定分を含む。

県内市町村別派遣先一覧 (平成18年度～平成21年度予定分)

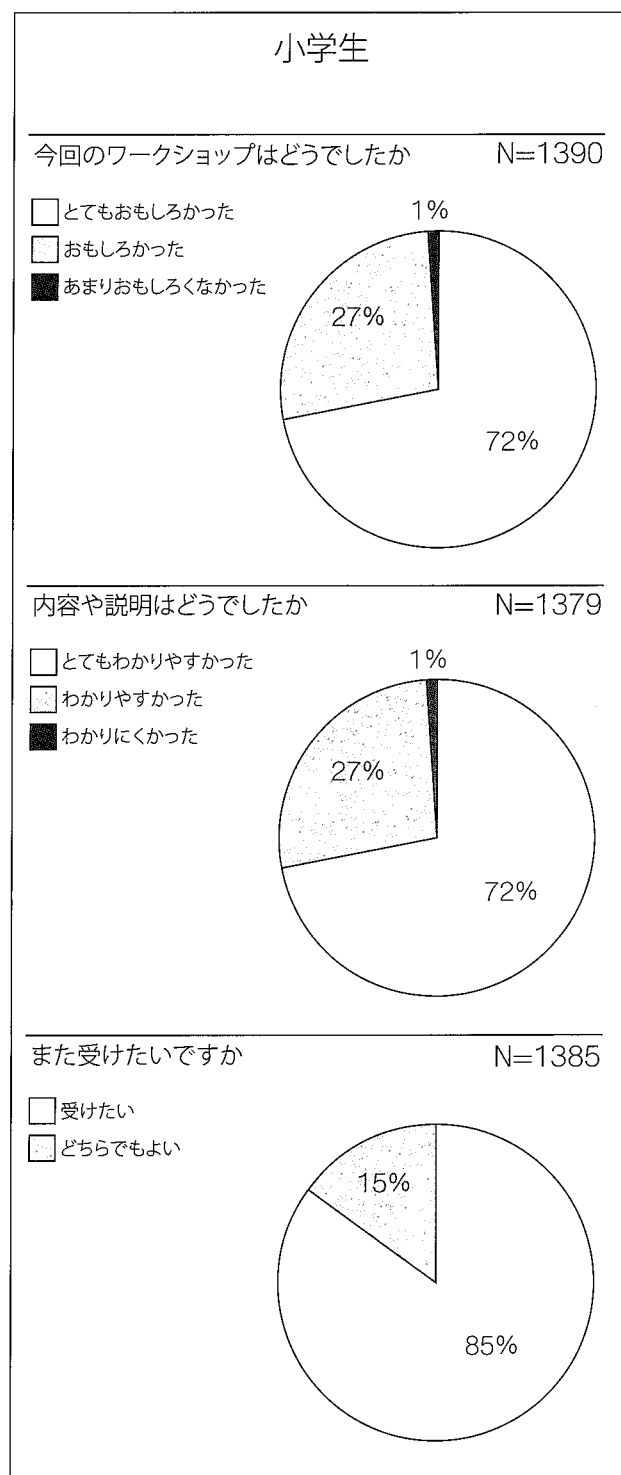
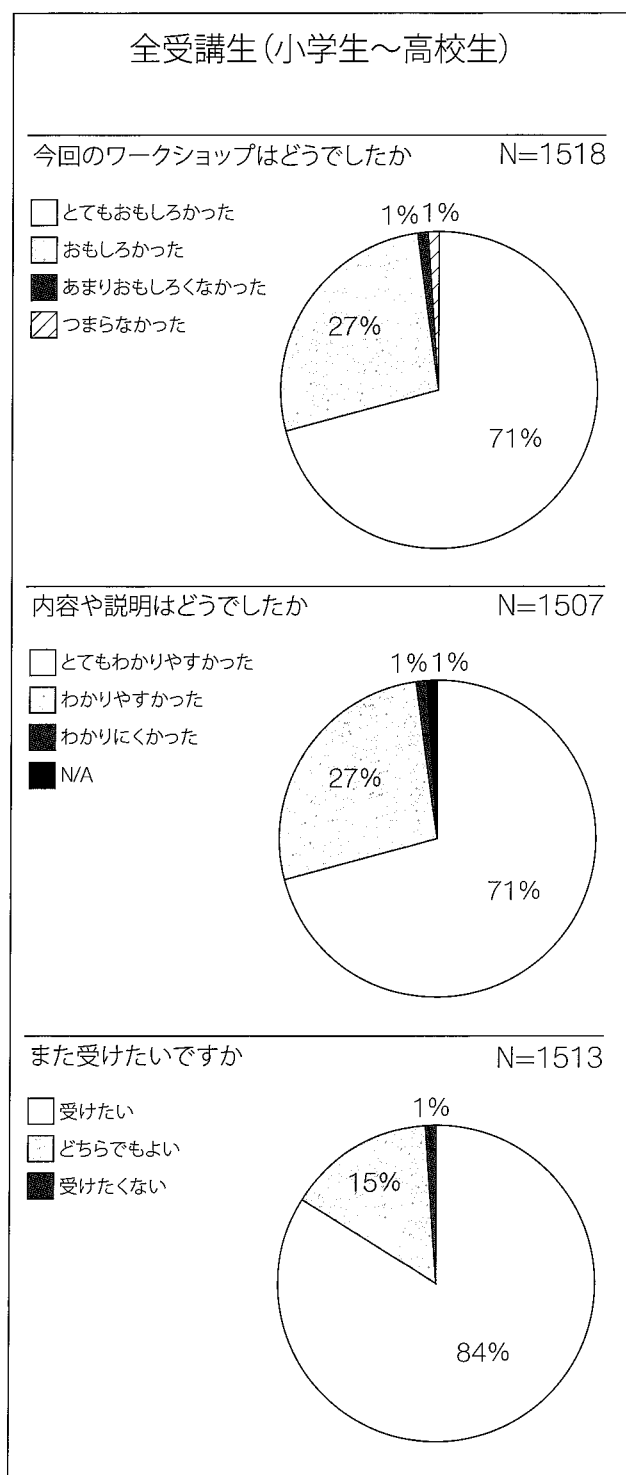
新潟市	(20)	赤塚小学校、五十嵐小学校、亀田東小学校、黒埼南小学校、新通小学校、関屋小学校、西内野小学校、根岸小学校、東山の下小学校、巻南小学校、真砂小学校、満日小学校、桃山小学校、割野小学校、二葉中学校、新潟工業高等学校、新潟翠江高等学校、新津工業高等学校、万代高等学校、西川地区公民館
新発田市	(3)	猿橋小学校、東豊小学校、加治川中学校
村上市	(4)	上海府小学校、山辺里小学校、村上中等教育学校、村上桜ヶ丘高等学校
五泉市	(4)	五泉東小学校、村松東小学校、愛宕中学校、村松高等学校
阿賀野市	(3)	水原小学校、前山小学校、阿賀野高等学校
胎内市	(3)	築地小学校、鼓岡小学校、中条小学校
佐渡市	(1)	羽茂中学校
長岡市	(2)	島田小学校、東谷小学校
三条市	(5)	栄中央小学校、森町小学校、大崎中学校、第二中学校、三条高等学校
柏崎市	(3)	大洲小学校、鯖石小学校、新道小学校
小千谷市	(1)	岩沢小学校
加茂市	(2)	下条小学校、須田小学校
十日町市	(1)	中条小学校
見附市	(1)	新潟小学校
燕市	(1)	吉田南小学校
魚沼市	(2)	井口小学校、東湯之谷小学校
南魚沼市	(1)	第二上田小学校
上越市	(3)	南本町小学校、針小学校、大和小学校
糸魚川市	(1)	根知小学校
妙高市	(2)	新井中央小学校、矢代小学校

県内20市町村、62校(小学校47、中学校6、中等教育学校1、高等学校8)、1公民館

参考資料

平成21年度事業報告

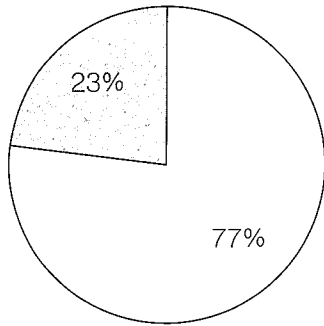
昨年度以前の児童・生徒アンケート 平成19年度(2月期実施分のみ)



中学生

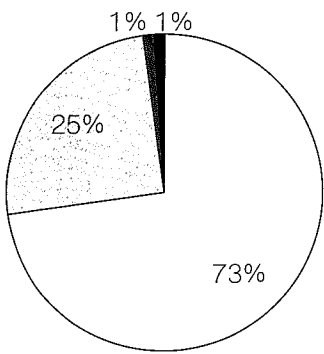
今回のワークショップはどうでしたか N=106

- とてもおもしろかった
- おもしろかった



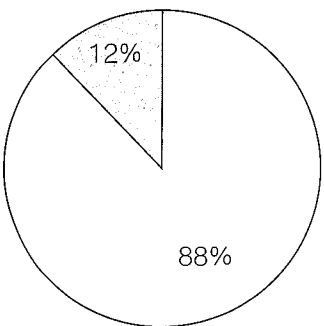
内容や説明はどうでしたか N=106

- とてもわかりやすかった
- わかりやすかった
- わかりにくかった
- N/A



また受けたいですか N=106

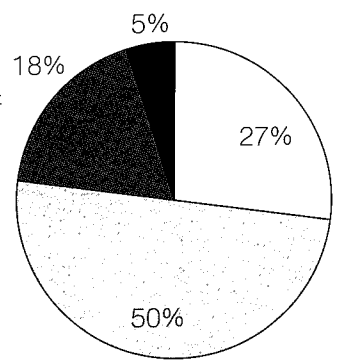
- 受けたい
- どちらでもよい



高校生

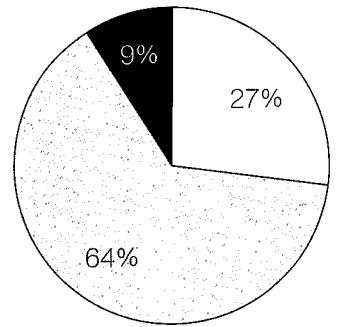
今回のワークショップはどうでしたか N=22

- とてもおもしろかった
- おもしろかった
- あまりおもしろくなかった
- N/A



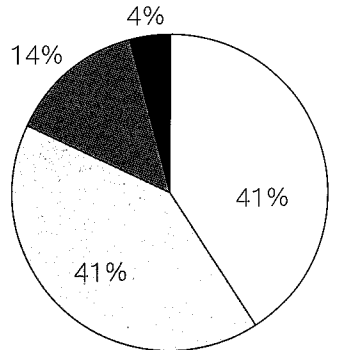
内容や説明はどうでしたか N=22

- とてもわかりやすかった
- わかりやすかった
- N/A



また受けたいですか N=22

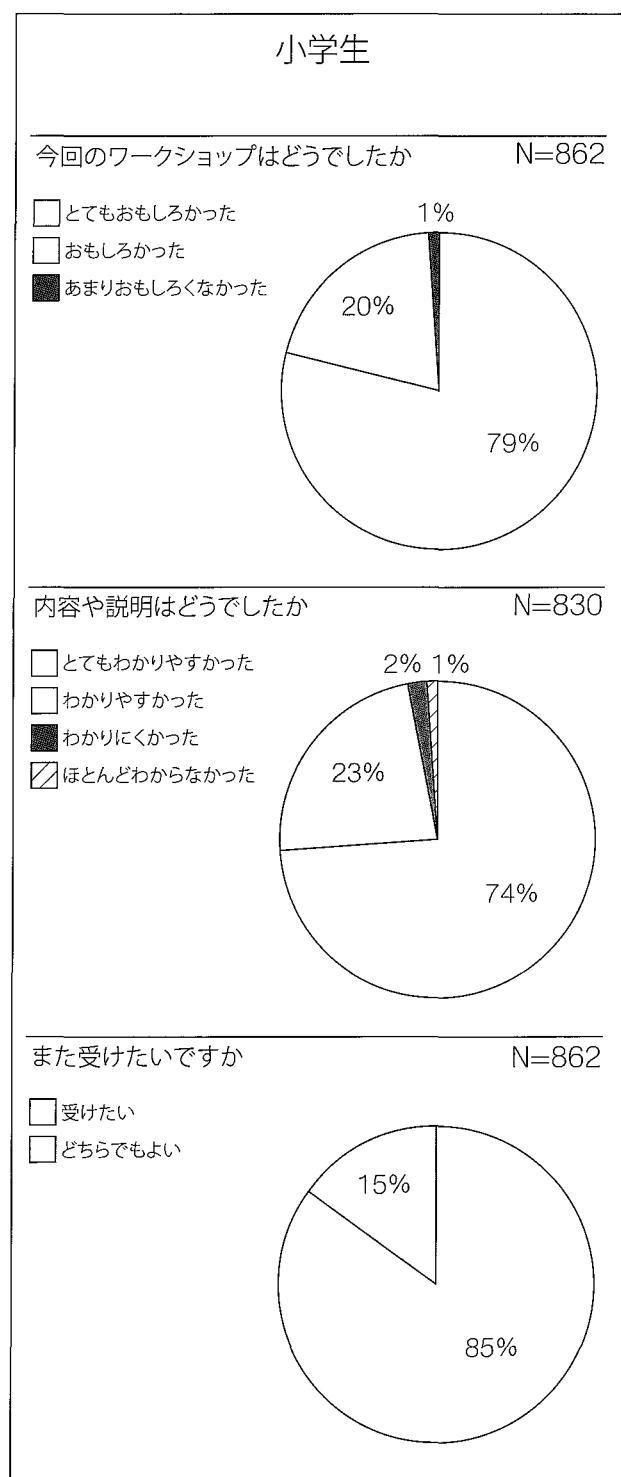
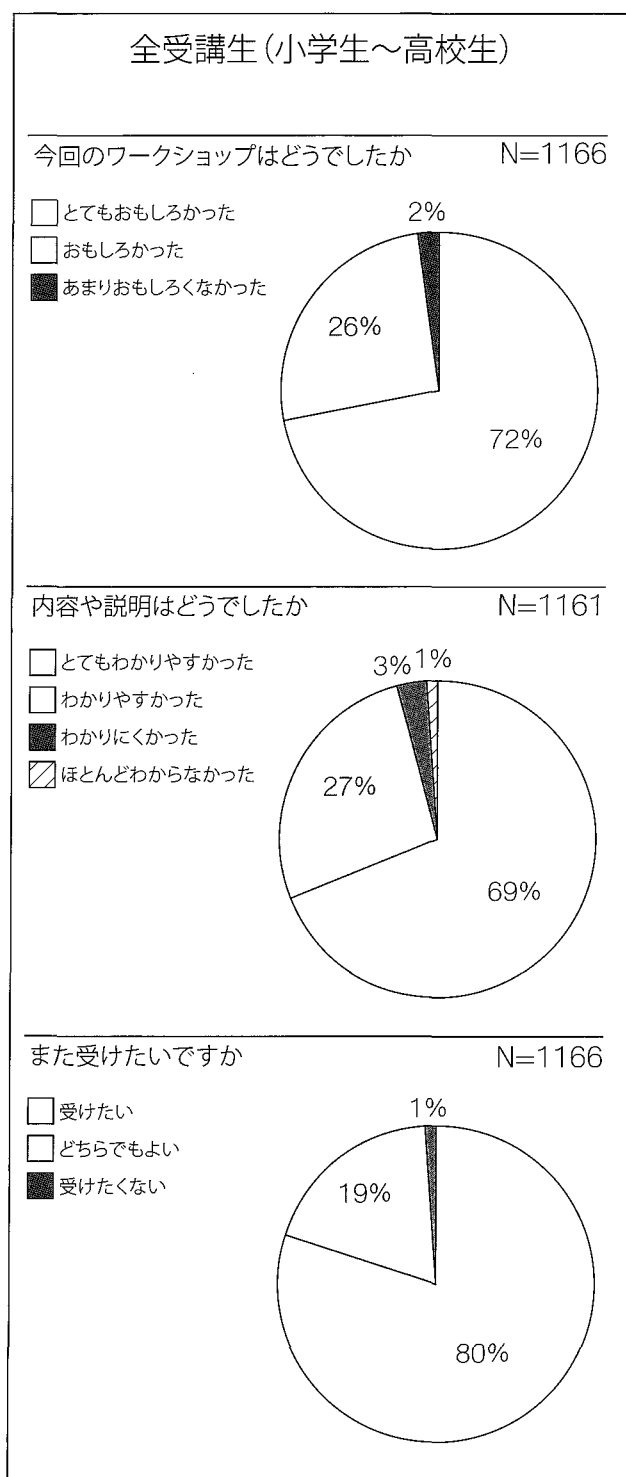
- 受けたい
- どちらでもよい
- 受けたくない
- N/A



参考資料

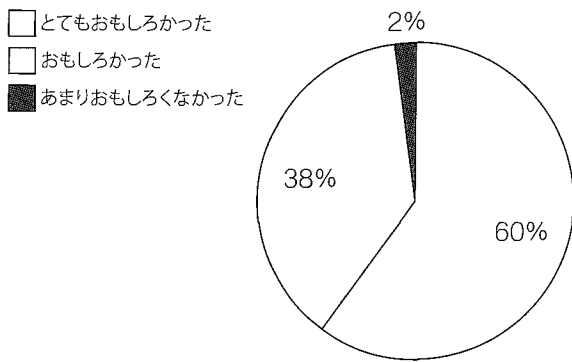
平成21年度事業報告

昨年度以前の児童・生徒アンケート 平成20年度

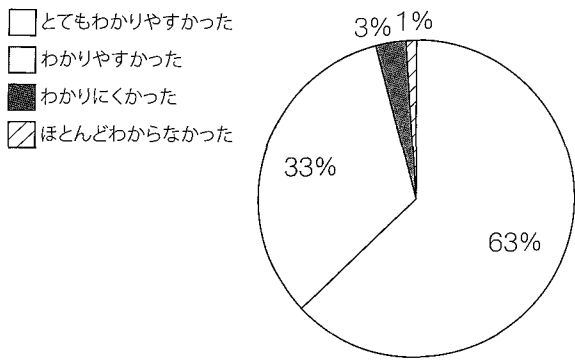


中学生

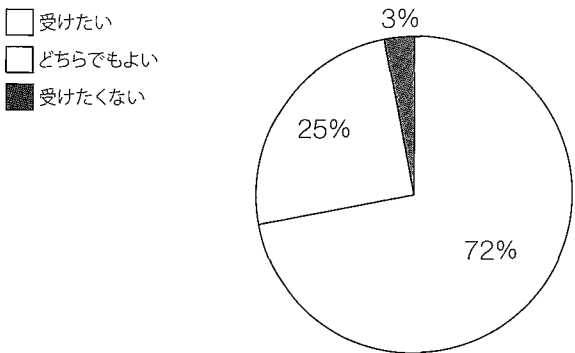
今回のワークショップはどうでしたか N=194



内容や説明はどうでしたか N=194

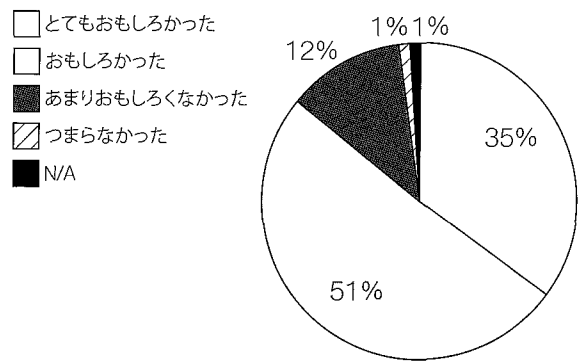


また受けたいですか N=194

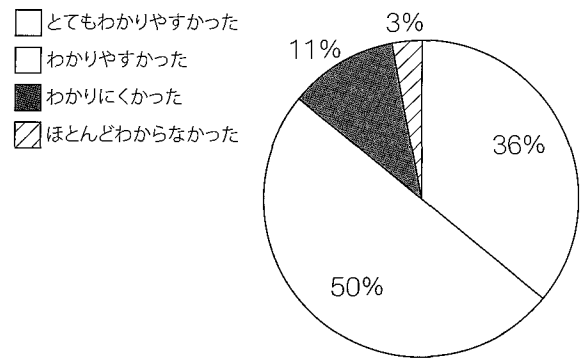


高校生

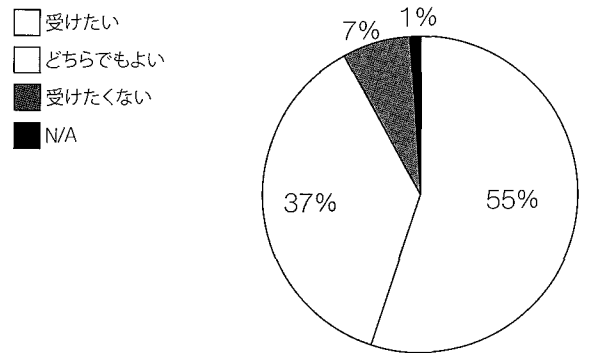
今回のワークショップはどうでしたか N=110



内容や説明はどうでしたか N=109



また受けたいですか N=110



新潟国際情報大学国際交流インストラクター事業学内委員会

佐々木 寛	情報文化学部教授(事業推進責任者)
小林 元裕	情報文化学部准教授
吉澤 文寿	情報文化学部准教授
小宮山智志	情報文化学部准教授
池田 嘉郎	情報文化学部講師
佐々木辰弥	総務課長
宮下 豊	国際交流インストラクター事業担当研究推進員
新津 厚子	国際交流インストラクター事業担当プロジェクト推進員
神戸優香里	国際交流インストラクター事業担当事務補佐員

(平成22年2月現在)

平成21年度 新潟国際情報大学 国際交流インストラクター事業報告書

平成22年2月発行

編 集: 新潟国際情報大学国際交流インストラクター事業学内委員会

〒950-2292 新潟市西区みずき野3-1-1

TEL 025-264-3012 FAX 025-264-3016

制 作: (株)北都



新潟国際情報大学
Niigata University of International and Information Studies

新潟国際情報大学 現代GP事務室

〒950-2292 新潟市みずき野3-1-1

TEL.025-264-3012 FAX.025-264-3016

✉ iuip@nuis.ac.jp

🌐 <http://www.nuis.ac.jp/iuip/>